
カノジョは南の島の独裁者～がんばれ大統領選～

弓式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カノジヨは南の島の独裁者ゝがんばれ大統領選ゝ

【Nコード】

N7644Q

【作者名】

弓式

【あらすじ】

トロピコのプレジデントを女性にした小説っていえばわかる人にはわかると思います。……すいません。誰もわかりませんね。端的に言えば、『南の島を舞台にした選挙戦を描いた話』です。

高飛車だけ子供っぽい大統領スバルと、少し怖いメイドさんのアソリと、スバルにむりやり結婚させられた直衛が、幼女軍人のフィアと大統領の座を争って選挙戦を戦う話。少し選挙からの脱線も多いです。

これ、東方のあのキャラのパクリじゃんとか、これ絶対この動画（

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm10777016> から影響受けただとか、てかお前文章下手だなおい。とか色々言いたいことあると思いますが勘弁してくださいorz

あと、どうでもいいですが、参考にした資料は第十二部のあとがきに書いておきました。

もしも高校生の俺が南の島の大統領と結婚させられたら（前書き）

トロピコのプレジデントを女性にした小説っていえばわかるひとはわかると思います。……すいません。誰もわかりませんね。端的に言えば、『南の島を舞台にした選挙戦を描いた話』です。

高飛車だけど子供っぽい大統領スバルと、少し怖いメイドさんのアソリと、スバルにむりやり結婚させられた直衛が、幼女軍人のフィアと大統領の座を争って選挙戦を戦う話。少し選挙からの脱線も多いです。

これ、東方のあのキャラのパクリじゃんとか、これ絶対この動画（<http://www.nicovideo.jp/watch/sm10777016>）から影響受けただろとか、てかお前文章下手だなおい。とか色々言いたいことあると思いますが勘弁してくださいorz

あと、どうでもいいですが、参考にした資料はあとがきに書いておきました。

もしも高校生の俺が南の島の大統領と結婚させられたら

ある冬の晴れた早朝

高校生の俺、工藤直衛は真つ黒な学ランを着て、雨上がりの通学路を歩いていていた。

そして俺は現在、非常にゆゆしき問題が発生している。

それは暇なことである。

小中高と地元の公立に通い、家族4人暮らし、父は平凡なサラリーマン、母はパートをやつてゐる主婦、妹が1人中学に通つてゐると、俺は全くとつて一般的な高校生。

当然のことながら

空から降つてきた美少女にキスをされて108羽のセキレイの中から嵩天を目指したり、

空から降つてきた美少女にごはんをせがまれて、能力を消す右手だけで戦に挑んだり

空から降つてきた美少女と天空に浮かんだ城へ行き、バルスしたりしない。

まあしないよね。いきなり何の努力もしないで空から降つてきた美少女と付き合うことになるなんて夢物語の話さ。現実は厳しい。

俺は現実の儚さを感じながら、降つてこねえかなあと上空を見上げながら、近道である人通りの少ない裏路地を進んでいった。

ゴミ箱が猫に食い荒らされていた。薄暗くて寒い。大きなビルの合間はこの通学ラッシュの時間でも人っ子1人いやしなかった。

(ここつて本当不気味だよな。バラバラ殺人の死体でも置いてそんな場所だ)

と、しばらく歩いたところである。

空からどんどん近づいていくものが見えた。

「え？ 何々？ まさか……」

ハゲ面マツチヨのおっさんが空から降つてきた。

おっさんは屈伸するように立ち上がる。事態が全く飲み込めない俺。スーツ姿のおっさんはニカツと笑って、2mはあるかと思われる麻袋をがばつと俺にかぶせて俺はそのまま麻袋に入れられたままどこかへ連れて行かれた。

母さん。現実には

空から降ってきたハゲ面マツチヨに拉致されて東京湾に放り込まれるようです。

「うおおおおおおお、なんだこりゃあああああああ」

俺は麻袋の中でじたばた体を動かす。暗い。体がちくちくする。冷たい。昨日の雨が麻袋にしみこんでる。息苦しい。死んじゃう。窒息して死んじゃう。お母さんお父さん助けて

ドサツとソファーに乗せられ、バンとドアが閉まる音がして、ブロロロと排気ガスを出す音がした。車に乗せられたらしい。

野太い野獣の声が耳元で喉を鳴らすようにささやいた。

「シット……騒ぐとどうなるかわかってるか？」

ペチペチと麻袋の上からナイフが頬に当たるのがわかった。

俺は震えながら、今までの生活を走馬燈のように思い出す。

学校の健とアニメの話でもりあがったなあ。妹の奈々にテストの勉強教えて夜更かししちゃったなあ、お父さんは昨日も夜遅くて肩もんでやったなあ、あはは。

すいません。暇って言うてすいません。平穏な日々が一番です。

そのとき、俺は携帯をもっていることに気づく。ごそそと学ランの胸ポケットから携帯を取り出す。だが携帯の青い画面にはアンテナが立っていないかった。

くっそ！ 圏外かよ！ それともなんか電波遮断装置でもつけてるのかこの車！

数時間後、俺は体に浮遊感がして、今度はガタンガタンと平行に動くエスカレーターのようなものに乗っていた。

「家用ジェットの方ですね」

ここは空港か？

俺が声を上げようとしたそのとき。ゴンと目の前に星が現れて、目の前が真っ白になった。あのおっさんに頭を殴られて気絶させられたんだと思う。

そして目を覚ますと、俺は寒い寒い貨物機の中で体中を凍らせて鼻水を垂らしていた。

「どこに連れてく気なんだああああああああああああああああ」俺の叫びは虚しく貨物機の中でこだましていた。

意識が戻った。

暑い……さつきまで全身こごえるように寒かったのに、今度はすごく暑くなった。どうなってんだ。

ゆっくりと眼をあけると赤いロングスカートに、臍脂色のブルゾンを羽織った女性がアゴに手を当てて椅子に座りながら俺を見下すような目線で見ていた。その女性は非常に高貴そうな仕草で、それとは裏腹の笑顔が似合いそうな活発な表情をしていた。

カラカラと開け放たれたステンドグラスの窓から涼やかな風が吹いている。

その風は少し潮の匂いがした。

高そうな絨毯が敷かれ、これまた高そうな壺や調度品が置かれていた。どこかのお屋敷なのだろうか。

「おはよう、直衛」

「あ、おはようございます。あの……ここどこでしょうか？　なんか怖いおじさんに連れてこられた記憶があるんですか？」

俺は椅子に座らされて、後ろ手に縄で縛られていた。

「あれ？　縛られてる」

「とりあえずこれを書きなさい」

「え？」

渡されたのは2通の書類だった。

「何これ、なんか色々書いてあるな……」

「あーうーんとですね。本籍と父母の氏名と住所はわたくしが書いて

てしまいましたから、とりあえず名前を書いて拇印を下さい」

2 通の書類の一番上に書いてある文字を読む。

婚姻届 婚姻証明書

夫になる人が空欄になっていて、妻になる人に名前が書いてある。ご丁寧に初婚にチェックがあつて、新本籍の部分はオラパ共和国リリユー州1番地とか聞いたことが無い国の名前が書いてあつた。

俺の頭にハテナの文字がでて、10秒くらい経って、なんだか笑いがこみあげてきた。

「え？ なにこれ？ なに？ なんで俺が婚姻届に名前書かされるわけ？」

隣に書いてある文字を見る。

ナカムラスバル

「いやこの女の人だだよ……」

彼女は自分を人差し指でさした。

「私です」

「へー、そうなんだ。君と結婚するんだ………だが断る」

「断れません」

横からあのひげ面のおっさんが首を出して、俺の目の前に現れた。

「げえ！ 誘拐犯！」

そのおっさんは縄をほどくと、ものすごい筋力で俺の手をボキボキいわせながら操作。工藤直衛と妙に達筆な文字で書いて、親指で拇印をむりやりおさせた。

「これで婚約成立ですね。直衛様！」

そういうと彼女は椅子に座ってその書類をにやにやしながら眺める。

「いやいや、日本の法律知ってる？ 本人の意思でなく無理矢理行われた契約は無効なんだよ？ だからこの婚約無効！」

「ふーん。そういえばうちにもそんな条文あつたような……じゃあ布告を出して、変えましょう」

「へ？」

『私と契約をしたものは絶対にどんな状況下でも有効な契約とします！』

「あ、ヒヤマ、新聞に載っけておいてくださいね」

「あい」

ヒヤマは頷くとその部屋から出て行った。

「は？ 1人で法律どうこうできるわけないだろ？ 何いつてんだ？」

「できますよ」

彼女は一差し指を立てて、ウインクした。

「だって私、この国の独裁者ですから」

「え？」

「だーからー私、ナカムラ・スバルはオラパ共和国大統領です。

そしてあなたは私の夫、ファーストジェントルメンに今なりました」

そういうと、彼女はブルズンを脱いで、中に来ていたＴシャツを脱ぐ。そして、ブラジャー一枚と長スカートだけになって、俺の頭の後ろに手を持ってきて、にっこり笑った。

「じゃあ、熱い一夜を過ごしましょうか」

「ええ！ ちよつちよつと待つて。心の準備！ 心の準備！
ていうか意味わかんないから！ 頭の整理！」

「うーん。ベジタブル系ってやつですか？ 恋愛に消極的な男子だったんですか」

「いや違う違う。こんな状況でS。Xに積極的になる男なんていないから！ まず状況説明してくれよ。なんで俺、こんな国に連れて来られて、あなたと結婚することになってるわけ！ しかも大統領ってなんだよそれ、冗談もほどほどにしてくれよ」

「んー本当なんですけどねえ」

「いや、あなたが大統領だなんて信じられないし！」

「あ、そうだ」

彼女は机にあったノートパソコンのキーボードをパチパチと押して、こちらに持ってきた。

「これ、日本の外務省のホームページです。基礎データというタグをクリックしてください」

俺は怪訝そうな顔でクリックする。ホイールをくるくる回して、画面を下へ動かすと、元首ナカムラ・スバル大統領（2010年12月就任、任期3ヶ月）とでてきた。

「ハッキングしたとか？もしかして同じサイト作ったとか……」
「そんなことできるわけじゃないですか。インターネットの設定だって、メイドのアンリにもらったくらいなのに」

グーグルでナカムラ・スバルと打って検索する。確かにどれもこれもオラパの大統領であることを示す資料ばかりでてきた。ついでに彼女の写真もでてきて、彼女がオラパの大統領であることは本当のようだ。

「で……なんでその南の島の大統領様が俺をさらって結婚させようとしてるわけ？」

「あなたを好きになったから」

「理由は？」

「愛に理由なんて必要なの？」

「いやいや……」

彼女は手を絨毯の上につけると、下から見上げるように心配そうに長いまつげのついた眼で、俺を見た。

「私のことが嫌いなのか？」

心臓の鼓動がなった。

「いや、そういうことじゃなくてね。結婚はね、相手の意見をね、聞いてからね、やるもんでね」

「やっぱり嫌なの」

「いやだからね。とりあえず、俺を日本に帰して、君が告白をしてから、まずデートでデイズニールランドに行って、映画でも見て、それから順を追って、お父さんとお母さんに紹介するって段階を踏んで、式場を予約して、ウェンディングドレスを賃貸で注文して、それから婚姻届けを役所に提出……ってなんで俺、結婚を前提にしたお

つきあいをする事になつてんだ！」

「やっぱり私のこと嫌いなんですね！」

「人の話聞けよ！ どう考えても嫌ってるようなこと言つてないだろ！」

大体俺、童貞だし、アプローチされて悪い気はないんだが……普通に帰り道に声をかけりゃいいのに、なんで誘拐なんてするんだこの人。かなり変だ。

「じゃあしょうがありません」

彼女は胸の間から黒光りする拳銃を取り出す。

そして太陽の光を背ににっこりと天使のような微笑みをして、銃口を俺に向けた。

「処刑」

「へ？」

「殺します」

「ええ！ どうして！」

「だって、あなた、ここで日本に帰したら絶対に他の女の子と付き合うでしょ？ いや、絶対付き合っちゃいます。こんな魅力的な男性放っておくわけないもの！ だから、他の女性とちぎりを結ぶ前に殺ります」

「んな、自己中にもほどがあんだろ！」

俺の額に銃口が突きつけられる。

この蒸し暑い中に、ひんやりと冷たい感触。それが拳銃が現実である文字通り肌で解つて、背筋がすうっと凍り付いた。

カラカラと風で窓が揺れ動く音が聞こえる。カモメの鳴く声が遠くから聞こえてきた。それら全てがこれが現実であることを俺に伝える。

そう。彼女はできるのだ。何故なら彼女は独裁者だから。人1人殺したって、問題無い。名だたる独裁者。スターリンだって、レーニンだって、ロベスピエールだって、ソ連人民の敵だとか、反革命罪とか、タバコに毒薬をしこんだとかあらぬ罪をでっちあげて何人

も罪のない人間を殺した。平凡な高校生の俺なんか彼女のような独裁者には簡単に殺せるのだ。

そして……彼女は何の躊躇もなく、拳銃の引き金を引いたのだ。

「GOOD BYE」

カチツカチツ

しかし銃弾は放たれず、彼女は首を斜めにして、不思議そうに銃口をのぞき込んだ。

「あれ？ ジャムってる。イギリス製はだめねえ」

こいつ、普通に殺そうとしてきた！ やばいまじでやばいぞこいつ、ど、どうにかしてここから逃げないと……

その瞬間である。

詰まっていた薬莢が排出され、引き金が元の位置に戻っていった。そこに握り込んでいた人差し指が、引き金を押し戻す。

弾倉から銃弾が上がり、撃鉄が弾の背中をたたき出して、その銃弾はくるくると螺旋状に回転しながらだんだんと昴の顔に近づいていった。

つまり、2発目の銃弾が彼女に向かって放たれたのだ。

直衛はその瞬間を眼で見て、

とつさに彼女を抱きかかえるように壁際へタックルした。

間一髪。

銃弾は昴の髪をきり、窓のステンドグラスに突き刺さった。

（いやちよつと待て、なんで俺助けてんだ！ 逃げるチャンスじゃねえか！ くそ……）

彼女は呆けた顔をして天井を見ていた。そして、眼から涙が流れて、ぎゅつと俺の学ランに手をしがみつけた。

「い、今死にそうだった」

「う、うん。そうだな……」

（死にそうだったのは俺もなんだが）

「こ、怖かった。怖かったよう」

彼女は俺の体を抱きしめて、わんわん泣いた。

（いや、でもそれお前の不注意じゃん）

と言いたかったが、なんとなくやめておいた。

まるで子供みたいに泣きじゃくる彼女を見て、かわいそうだった。思った。

そして抱きしめていた。奇妙だと思う。誘拐犯で、自分勝手に、俺を殺しかけたこの女性に同情するなんて……それでもなんだか、彼女のすべては本気で純粹でそして愛おしさを感じるほど子供っぽかった、だから、放っておけなかったんだと思う。

「キスして」

「え？」

彼女は目を閉じて、俺の唇とその震えた唇をあわした。

「抱きしめたらキスをしなきゃいけないって小説に書いてあった」

そう、この独裁者は、全てのものを無邪気に子供のように捉えていた。

（まあ、もう少しくらいいてやってもいいか）

俺はそんなことを思いながら彼女と唇を重ねていた。

もしも高校生の俺が南の島の大統領と結婚させられたら（後書き）

参考文献・ゲーム・サイト

世論の曲解 菅原琢

選挙の経済学 ブライアン・カプラン著 長峯純一／奥井克美 訳
トロピコ POPTOP SOFTWARE

[http://ja.wikipedia.org/wiki/
ウィキペディア](http://ja.wikipedia.org/wiki/ウィキペディア)

[http://blog.livedoor.jp/aoyama
211111/archives/51636750.html](http://blog.livedoor.jp/aoyama211111/archives/51636750.html)

世襲議員比率

[http://www.myfood.jp/wlmyfood/
us|foodnews/2009/01/post.html](http://www.myfood.jp/wlmyfood/us|foodnews/2009/01/post.html)

アメリカ食通信 大統領の食卓

[http://sankai.jp.msn.com/world
/korea/100718/kor1007181713002](http://sankai.jp.msn.com/world/korea/100718/kor1007181713002)

-n1.htm 産経ニュース

[http://www.nicovideo.jp/watch/
sm10777016](http://www.nicovideo.jp/watch/sm10777016) 東方楽園鉄 〱ゆうプロ楽園統治記

もしも高校生の俺が南の島の大統領と生活したら

常夏の太陽。まぶしすぎる朝日。生い茂る椰子の木。聞こえてくるさざ波。

俺はそんな心地の良い南国の楽園にいる。

そしてふかふかの羽毛ベツトの上で寝ている。

麦わら帽子を被って下着姿の17歳くらいの女性が俺の腰の上で馬乗りになっている。

まさに天国である。

俺の口に冷たい拳銃が入ってること以外は。

「デートしましょ」

安全装置はしっかりはずされている。

「嫌？」

俺は混乱して周りに誰か助けをよぼうと首を横に振って人がいないか確認する。

「首を横にふるって嫌なの？　じゃ……死刑」

「うおおおおおおおおおおおおおおおお」

俺は口に入れられた拳銃を掴む。リボルバー式だったので、弾倉部分を掴んで撃たれないようにして、口から拳銃を引き抜いた。

彼女はおほほと口に手を当てて笑っていた。

「嫌ね。冗談よ。弾は入ってないわ」

「朝っぱらから目覚め最悪な起こし方すんな！」

「で、どうする？　行く？」

「行くよ！」

殺されたくないからな。俺は彼女が手に持っていた拳銃の弾倉にしっかりと弾が入ってるのを横目で見ていた。

「うん。じゃあ着替えましょうか」

そいうといつの間にかいたメイドが2つほど服を持ってきた。

左手にはラフな英語のロゴがついたＴシャツと青い短パン。

右手にはタチバナ・スバルとでかでかと名前が書いてある体操服である。しかもスパッツ全盛の今の時代にブルマだ。

「うーん。どっちがいいかしらねえ、直衛選んでくれる？」

「左」

「右ね」

そついうと彼女は右の体操服を指さした。

「いや、左つつただろ。右はどう考えてもおかしいから。なんで体操服？ それ普段着じゃないでしょ！ 学校で着るものだよ！」

ちなみに昴は俺と同年だが、現在、学校に行っていない。2年前に飛び級で高校を卒業後、これまた飛び級で大学を2年で卒業している。勉強はできるらしい。それ以外の頭はどう考えても空っぽだ。

「あんたに聞いたのは一応。右はアンリ推薦なのよ。運動するなら日本ではこっちがデフォらしいじゃない」

「アンリって誰」

メイドさんが体操服をもったままお辞儀をした。

「村井アンリと申します。今後お見知りおきを」

彼女はまだ眠いのか。半眼で挨拶をしていた。メイド服は黒いメディウム丈のスカートに真っ白なエプロン、ふわふわのメイドカチューシャに、胸元を強調しないゆるやかなカッティングのデコルテ（胸の部分のこと）と、比較的地味めなメイド服であった。

まあ、メイド服の時点で地味じゃなくて派手だと日本にいたら思っただろうな……秋葉にいたあいつらはすごい存在感だったし。

とはいえここは大統領官邸である。メイドはそう珍しくない。彼女の他にも10人ほどが働いていた。

「いやーアンリは日本に留学したことがあってさー、なんと！ 東京大学で勉強してたらしいのよ！ あ、うちの国の奨学金だね！ 彼女は自慢のメイドよ！」

昴はそついうと、ばんばんと彼女の背中を叩く。

アンリは複雑そうな表情をしたあと、顔を真っ赤にして俯いた。
おそらく恥ずかしがりやさんなのだろう。

「へーそいつはすごいな。俺の頭をどうひっくりかえしてもあそこに入れないや」

「お茶の水まで行くのは大変でした」

「ふーん」

あれ、お茶の水に東大の校舎つてあつたっけ本郷と駒場だよなあそこ……ま、いつか。

「ちなみにあたしはハーバード！　すごいでしょう」

「それ、昨日から100回くらい聞いてるから」

「でもすごいっしょ！　すごいっしょ！　めっちゃがんばったんだから！」

「そうだね！　天才はすごいね」

「そう、私は天才だから」

えっへんと昴は胸を張る。勉強以外は小学生みたいだけだな。

メイドさんが少し怒りながら、俺たちの間に割って入った。

「あの、早朝ランニングに遅れますよ。大統領自ら遅れたら示がつきません」

「あー、はいはいわかってるわかってる。じゃ行こうか」

「ランニング？　だるいなあ……俺は休んでいいでしょ。こちらが昨日の今日で時差ボケが酷くてさ」

昴は体操服に身を包むと、びしっと人差し指を立てて、腰を曲げて俺に説教した。

「関係ないの！　夫婦は必ずランニングしなきゃいけないことが、法律で決まってるんだから」

「法律で決まってる？　まさかお前……」

「1週間前私が決めました。月1ランニングの日。最近太っちゃったのよねえ。で、私だけ走るのってなんか寂しくて嫌じゃない。だから国民みんなで走ることにしたの」

「くだらねえ……んで、法令の内容は具体的にどういうのなんだ」

「1世帯当たり1人がランニングの日に1km走ること、結婚して
る場合は夫婦2人で走ること。ただし、病人、子供、老人はのぞく。
従わなかったら罰金1ドル」

「島民も大変だな」

「じゃ、行くぞー」

「「オー」」

昴は拳を振り上げる。メイドさんのアンリもいつの間にか体操服
に着替えて2人で拳を振り上げていた。

俺たちはビーチを走っていた。

俺はトランクスー丁の水着姿で、他2人は体操服。どうもさっき
の話はマジなようで、さっきから何十人もランニングしている島民
をみかけた。どう考えてもこの遭遇率は異常なのでランニングの日
はガチなのだろう。どういつもこいつもデブばかりで大汗かきながら
走っていた。南国はそこら中の植物から食べ物が取れるので、くっ
ちや寝して生きてるのが大半らしい。ランニングの日は島民の健康
に良いかもしれない。

まあそんなことはいいんだけどさ。

この汗だけでビーチに体育座りして、顔真っ青にして遠くの朝日
を見ているこの法律作った大統領様はなんだよ！

「1kmつてきついなー」

メイドのアンリが持ってきたポカリスウェットを渡していた。

昴は蓋を開けて、ごくごく飲む。

ぷはー

「ありがとアンリ」さすが気が利くわねえ。ここらへん忠誠心が為
せる技ね」

「ありがとございます」

「本人がこれはないんじゃないかな」

「別に良いのよ真面目にやってる奴なんていないし、まあついでだ
からうちの島の案内がてら歩きながら話しましょ」

「そのセリフ聞いたら支持率がた落ちだぞ。まったく途中で貧血でぶっ倒れそうになったらちゃんといえよ」

「心配してくれるんだ。えへへ……」

「べ、別にそういうわけじゃねえよ」

昂はとことこと岩の上を歩くと手を大きく広げた。

「ここがレミアビーチ。朝だから岩がごつごつして結構汚いけどさ、満潮だと真っ白な砂浜になるんだよ。うちの観光名所だね」

「ふーん」

「あんま興味なさそうだね」

「海からの日差しがきつくてね。あんまり海は好きじゃないんだ」

「あ、そう」

次に来たのは波戸場である。

「ここがキャンベラ。木造の古くさい波戸場なんだけどさ、綺麗な珊瑚礁が見えるから大人気」

「ふーん」

「やっぱり、あんま興味なさそうだね」

「ここは魚臭すぎる、魚好きじゃないんだ」

俺はさっさと去ろうと後ろを向く。すると、大きなワニが口をくばあと開けていた。スバルに波戸場から笑顔で突き飛ばされる。ワニはそれを追跡。

「ここ、ワニが出るんだよね」

アンリと昂はボートで沖に逃げていく。俺は必死でクロールしてボートまで追いついて、空気の混じった白い泡を体に巻き付けてボートの上にあがった。

「お前、俺のこと嫌いだろ！」

「だって、うちの観光名所なのにつまんなそうな顔するんだもん。もうちょつと喜んでくれないとつまないだってみんな思ってる。観光客減っちゃうよ」

「俺が喜んだって観光客の数は変わんねえよ！」

次に来たのは空港。

「ここはリリユー空港。簡単な滑走路があるだけだね。観光客はセスナで来ることが多いかな。船と飛行機の比率は半々くらい。うちの主な収入源は観光なんで重要な場所だね」

「わーい」

と俺は両手を上げて喜ぶ仕草をした。

昂は手に口を当ててクスクス笑う。アンリも笑っていた。

「え？ 何？ 空港の何が面白いの？ ちょっとおかしくなっちゃった？」

「プツ……」

観光客達がH A H A H Aと言いながら俺を指さして笑っている。

俺は顔を真っ赤にして、手を下ろした。

「本当、お前良い性格してるよな」

「あれ、誉めてもらっちゃった。えへへ」

「……」

次に来たのは何もないジャングル。

「なんだ。ジャングルしかないぞ」

「いやいや、ここも観光名所なんだよねえ」私にはちょっと理解できないんだけど

真っ黒でふかふかした土をふんで進んでいくと、それがそこにあった。

戦車である。

リベットがゴツゴツと突き出たし、申し訳程度の小さな主砲がついていた。おそらく米軍の戦車にやられたであろうでかかとした穴が砲塔部にあり、漫画本程度の厚みしかない装甲がぺらりとめくれていた。

この戦車の横には、コンクリート造りの施設があり、八木アンテナがぴこんと立っている。

「ここ、旧日本軍の軍施設跡なんだよね。なんだか知らないけどさ、よく日本人の変な男どもが見に来るのよ。こんなもの見て何が面白いのか……」

「うおおおスゲー　チハじゃん！　本物まじ初めてみたんだけど」
メイドはアンリにボソツと耳打ちした。

「彼も変な男のようです」

「かわいい。チハはかわいいなあ。スリスリ」

そう言いながら、ツタの絡んだキャタピラや砲塔を俺はなで回した。やっぱ男は兵器みると喜んじやうなあ。

「あそうそう。そこらへん、洞窟陣地後で地面が抜けやすくなってから気をつけ……」

ズボツ

俺の足下の土が抜け落ち、体中が吸い込まれて、俺は手を挙げた状態で真っ暗な暗闇の中へ落ちていった。

俺たちは、レストラン、展望台、キャンプ場などを練り歩いて、最後におかしな箱形の建物についた。

「ここはバイオ研究所。私がこの前廃校になった学校を改修して作ったのよ」

「南国の島にバイオ研究所？　あまりにも不釣り合いじゃないのか？」

「うちの主要な産業は観光なんだけどさ、さつきから回っていて変じゃなかった？」

「変って何が？」

「観光客全然いなかったでしょ？」

「あ、そういや……　チラホラしか見なかったな」

「リーマンショックでね。激減しちゃったのよ。観光業のさがつてやつね。外国の情勢にすぐ影響しちゃうの。だから、もっと恒常的に収益が上がる新産業が必要だなんて思って作ったのよ。ちよっとお金はかかっちゃったけどさ。この研究所で新製品の開発ができれば、大もつけ。財政だって良くなるわ。そしたらそのうち発展途上国から抜け出ることも可能なの。私の代でこの国を日本みたいな先進国にしてやるのよ」

などと眼をきらきらさせながら、昴はその研究所を見ていた。

俺等の国の研究所からしたらぼろつちくて汚いところだけど、彼女にとっては夢の場所なんだなと思った。

俺は昴の頭をなでる。

彼女はえへへと笑いながら、はずかしそうに顔を赤らめていた。

大統領官邸までの帰り道にこの国の社会体制を昴は教えてくれた。「この国は、WW1のパリ講和会議で日本の委任統治領になり、WW2に日本が無条件降伏したあとにアメリカの信託統治領になったの。その後、10年前に独立したミクロネシア諸島の1つがこのオラバ共和国よ。人口は2万人前後。公用語は日本語と英語。旧占領国の言葉を使ってるの。議会も当然あるわ。といっても大統領の権限がすごく強いからお飾りみたいなもんだけどね。私のお父さんが第1代大統領、それから何期か連続でやってガンで死んじゃった。それで、大統領選があつて私が大統領になったのね」

「え、一応お前、選挙で大統領になったのか」

彼女は腕を組む。

「そうよー。選挙は3ヶ月に1回、国民投票による直接選挙制よ」

「お前みたいのが大統領になるって、てっきり某民主主義でもなければ共和国でもない半島にある国みたいに世襲制でなったかと思つた」

指をちつつちと左右に振って、昴は何か意味ありげな表情をする。

「ふっふっふっ、それが選挙の面白いところよ。選挙ってのは結構世襲制っぽいところがあるの。アメリカでは上院の世襲議員の比率は13パーセント、また日本の衆参両議院の世襲議員の比率は43パーセント（第44回衆議院議員総選挙時）で、データから明らかに世襲のほうが選挙には有利なのよ」

「なんでそんな世襲ばっかになっちゃうんだ？」

「人間ってのは短い時間で他人の中身なんて全くわからないのよ。その人のことを知るのは選挙期間中のごく短い間だけ、議員の2代目はその親を知っているからそれだけでもしかしたら親と同じくらい優秀かもと思つて投票しちゃうのよね」

確かにそうかもしれない。知名度というのは重要だ。例えば、知名度の高いタレント候補と名も知らないどこその名も知らぬ活動家あがりの候補が二人いたら、俺はタレント候補に入れてしまっただろ。やっぱりよく知らない人は何考えてるかわからないから、気持ち悪いし、避けがちになる。

「あ、そうそう1ヶ月後に選挙あるから」

「それで受からなかったら？」

「大統領官邸から追い出されちゃったただの女の子になっちゃうわね」

「大丈夫か？」

俺は不安な表情を向ける。

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。受かるわよ。この前の選挙は12000票対4000票の8000票差で勝ったのよ。今度の選挙も負けるわけないわ。圧勝よ圧勝」

「そうか。それは良かった」

俺は安心して意気揚々と腰に手を当てて歩く昴の背中についていた。まだもう少しこの生活は続くようである。まあ早めの冬休みと考えればいいかな。と俺はそのとき思っていた。

そんななか、アンの表情が曇っていたのに俺は気づかなかった。

「圧勝……？」

ポケットから新聞の欠片を取り出してアンは読んでいた。

それを見た彼女は不安な表情で顔を固まらせたまま、二人の後をついていった。

夕食時

シャンデリアが掛かった大きな大広間に、テーブルが並べられていて、床にはヘレケの高級絨毯。その真ん中で、俺たちは二人くっついて食事が来るのを待っていた。昴はいつも通りきゃきゃ騒いでいた。

「広いんだから、もっと遠くで食えよ」

「いいじゃない。こっちのほうの話ししやすいでしょ」

眠そうな半眼のアンリが映画で見るようなふたつきの銀の食器を持ってくる。

このアンリ、朝は眠そうだから半眼なのだと思ったが、元々このような顔らしい。じとつとした眼で朝から夕方まで人を見ていた。大統領の食事だもんな。すげえ豪華なものがでてるんだろなとわくわくしながらじつと銀の蓋を見つめる。その銀の蓋が開けられた瞬間。

香ばしい薫製の薫りと、鼻を通る懐かしい匂い。高原のすがすがしいつんとした香り。そしてほくほくした白米の匂いがした。

などと高級感たつぷりに表現したが、何のことはない。アジの開き、茶碗に入った白いご飯、トマトが乗ったジャガイモサラダ、それにオレンジジュースである。

「今日はアジの開き定食ね。おいしそう」

などと言って、箸をつけて食べていた。

「なにこれ、なんかうちの家より質素じゃね。うちだったらこれにヨーグルトとみそ汁つくよ……」

俺は肩をがっくりと落とした。

「あ、そうなの」

「あ、そうなのじゃねーよ。おかしいだろ。大統領だったら、もつといいもの食うはずだろ。あ、さてはダイエットしてるから日本食にしてんのか？ それとも大統領がこんなだからメイドがストライキを起こして、飯作るのさぼってるのか！」

アンリは不機嫌そうな顔をした。

「さぼってません」

「別にいつもこんなもんだけどねえ……魚嫌いなのか？」

「大統領つてのはよ。もつと一杯山のような銀の食器が来てさ、オードブルと魚料理と肉料理が3回くらいきてさ、それに山盛りのデザートを食って、で、こんなアジの開きを見せられると『これ、ゴミい？』とかいって庶民どもの食事を馬鹿にするんだ！」

平手でこつんと昂は俺の頭を打った。

「そんなもん毎日食ったら糖尿病になるじゃない」

「えーでもさー。じゃあなんでこんな大きな大広間でこんな豪華な食器つかってるの？」

「ここは、来客用だから大きいのは当たり前よ。銀食器は使わないともしたいないから使ってるだけ」

「ま、まじでー」

「なんか、大統領つてとんでもない勘違いされてるのね」

大統領の食事は案外質素である。例えば、アメリカのケネディ大統領の食事は朝食はポーチドエッグ、オレンジジュース、ベーコン、マーマレード、コーヒーで、昼食はニューヨーク風フィッシュチャウダー、夕食はあまり食べなかったそう。クリントン大統領はチキンのメキシコ風や野菜と牛肉のスープが好物だった。ちなみに日本の昭和天皇は朝食はハムエッグ、昼食はカレーライス、夕食は多少豪華にフランス料理などを食べていたそう。

「せっかく作ったのにひどいです」

アンリが下唇を上唇で噛んでいた。

「あんたがどんなもん食っていたか知らないけどさ、人様の手料理にケチつけるってどうよ？」

なんだかいごちが悪くなっていた。

ぱくぱくとごはんを口にいれてと箸でアジの腹を割って食べる。

「……お、おいしいです」

「いまさらおそーーーい！」

昂にビンタされて俺の体は、テーブルの上に滑り、テーブルクロスを巻き込んで、床に落ちた。やべえ、こいつすげえ力ある。

そのあとアンリさんに葉縫ってもらった。

そんなこんなで夜。ふかふかの大きなベットに入って就寝。

ふう、ゆっくり寝られると一息ついて、水玉模様のパジャマを着て布団に入った。

ミーンミーン！ ジーギー！ ミーンミーン！ ツクツクホーシ！ ツクツクホーシ！ ジーギー！ ミーンミーン！ ツクツクホーシ！ ツクツクホーシ！

セミの大合唱である。

う、うるせえ、寝られねえ。そういやヤシの木に20も30もセミがはっついていやがったな！ くそお……

「あれ、耳ふさいでどうしたの？」

と、俺の横にある布団の中から顔を出す昴。

「いやさ、セミが五月蠅くて寝られない」

「じゃあ五月蠅くないようにヘッドホンもってきますね」

といって、彼女は布団から裸のまま出て、机の引き出しに入っていたヘッドホンを取り出すと、俺の耳に付けた。

「サンキュー、これで寝られるわ」

といって、彼女が裸のまま布団に入った後、彼女とは反対側を向いて、寝ようとし……なかった。

俺は慌てて、彼女の方を向いた。

「な、なんで裸で俺のベットに入ってたんだ！」

「そりゃあ夫婦ですから、初夜ですよ。もう……いけず」

やべ、耳がふさがって何言ってるんだかわからん。

彼女は裸のまま俺に抱きついて、足を絡めて、手を背中後ろに回した。

胸が目の前まできて大きな谷間が見えている。彼女は妖艶な細目で俺を見つめ、目と目がくっつくかくっつかないかというほど顔を近づけて、

「は・じ・め・ま・し・よ」

と言った。

ともかくおれの童貞が危ないようだった。

俺の頭の中で天使と悪魔が現れた。

天使さん「いやいいんじゃないの。ここで卒業しちゃえよ童帝神ぶっちゃけこれ逃したら絶対無理だし」

悪魔さん「よしここは尺八から、正座位だな。お前のエロゲ知識をフル活用だ」

俺さん「おい、お前ら、反対意見はないのかよ！ 天使と悪魔は喧嘩すべきでしょ！」

天使さん&悪魔さん「全会一致で南国の美少女とS。Xを可決しました」

俺さん「お前等、欲望に忠実すぎるだろ！」

ムクムクとあれがたってきた。やばい。このままだと18禁になつてしまう。

ポクポクポクチーン

俺の頭にオシヤカ様が現れて、朗らかな笑みを浮かべた。

話を反らしてごまかそう。

「なあ昴、今日は一日、遊んでたけど、大統領の執務はいいのか？ 色々忙しいんじゃないのか？ 俺、大統領の手伝いたいんで色々教えてくれると助かるんだが」

「え？ でも今は」

「夫婦は助け合うのが仕事だろ！」

彼女は俺にぎゅっと抱きついた。

「さすが直衛かつこいいよう」

彼女の大きな胸がぴったり張り付く。

「ウ、ウへへ……いかん。煩惱退散煩惱退散！」

彼女は唇に人差し指をつけると考え込んだ。

「そうねえ、本来なら大統領は政策決定や緊急法令、また国軍の導入決定など色々やることあるんだけど、予算案にはこの前サイン書いちゃったし、緊急法令をするほどせっぱ詰まっているわけじゃない、もち戦争なんてあるわけないから、国軍なんて及びじゃないし、さしあたってやることないのよね〜じゃ、続きしましょ」

彼女は唇を重ねようとする。

「おーん！ そ、そうだ。一ヶ月後の選挙！ 選挙対策しなくちゃいけないだろ！」

「あ、確かに」

「というわけで、選挙対策を夜まで語り合おうぜ」

「え、つまんなーい……どうせ勝つ選挙なのに」

「語り明かそうぜ!」

「じゃ、明日ね。なんか今日疲れたし、寝るわ」

俺はガッツポーズをして、ぐーすかベットの途中で寝た。

もしも高校生の俺が南の島の大統領と新聞の支持率調査を読んだら

早朝、アンリがいつもの半眼で新聞を持ってきた。

「朝チユンですか……」

などと俺にぼそりと言う。何故だか知らないが、俺のパジャマが脱がされていて、まっばだかだった。暑かったからだろう。俺はそう思いこんだ。

昂はブルゾンをもう着て机の前でパソコンを打っていた。

「今日はオラパタイムズだけじゃなくて、ワシントンオラパも持ってきて」

「あ、はい」

「何やってるんだ？」

「メールチェック。時々、政府官僚からメールが来るときあるから」と、真面目な顔で彼女はパソコン画面を見つめていた。

10分後にアンリが走って新聞を持ってきた。走ってくるとは、ずいぶん仕事熱心なメイドさんだなと思った。

昂は英字の新聞をぱらぱらめくって見る。

「うん。ここね。あれ……」

「どうしたんだ？」

「いや、これ、【大統領支持率】なんだけど、おかしいなあ……打ち間違ったのかなあ」

英語はほとんど読めない俺だったが、数字がでかかと書いてあるのでわかった。

【40%】おそらくこれが大統領支持率である。

「40%って、そんな高くないよな。ていうか低いんじゃないか」

「2ヶ月前の就任時は70%近くあったんだけど、おかしいな。なんだろう」

彼女が見ていた新聞はワシントンオラパである。俺はもう一つの

オラパタイムズをめくった。たぶんここにも大統領支持率の調査が載っているはずである。もし同じ数値ならこの40%という数字は疑いようがない。

あつた……【70%】あれ、大丈夫じゃね？

「おいおい、オラパタイムズだと70%の支持率になってるぞ。以前は12000票対4000票の圧倒的多数で勝ったんだろ？　じゃあこっちのほうが実際の支持率に近いんじゃないか。そのワシントンオラパが数字捏造でもしたんじゃないかね。ほらマスコミってそういうのよくするじゃん。支持政党に有利に記事書いたりとかさ」

彼女は眼を鋭くして声を大きくして言った。

「オラパタイムズの大統領支持率は全くあてにならないわ」

「どうして？」

「うーんとね。経済関係のニュースはオラパタイムズのほうが詳しくから取ってるんだけど……昔の記事が、机に入っていたはず」

彼女はごそごそとヒモで縛って整理していたりすると案外、几帳面な性格なのかもしれない。

3つの新聞を机に置いた。

「これが1週間前の記事、これが2週間前の記事。これが2ヶ月前の就任時の記事」

1週間前の記事は支持率【50%】と書いてあり、

2週間前の記事は支持率【30%】と書いてあり、

2ヶ月前の記事は支持率【90%】と書いてあった。

「なんだこれ……ずいぶん支持率の変動が激しいな……どうなってるんだ」

「質問内容を見て頂戴」

「ごめん。英語読めない」

「じゃあ、訳して教えてあげる。」

まず、1週間前の記事の質問内容は

『大統領としてナカムラ・スバルはふさわしい人物か？　はいかい

いえで答えてください」

次に、2週間前の記事の質問内容は

『大統領としてナカムラ・スバルはふさわしい人物か？ はいかい
いえまたはわからないで答えてください』

さらに、2ヶ月前の記事の質問内容は

『圧倒的多数の票を獲得したナカムラ・スバルは大統領としてふさ
わしい人物か？ はいかいいえで答えてください』

「なんだこれ、質問内容が変わっている……」

「そう、こころ質問内容が変わっているの。その質問の仕方では支
持率が簡単に変動しちゃうのよ」

「んーでもわかんないな、なんで質問内容でこころ支持率が変わ
っちゃうんだ？ 結局は支持してるかしてないかってことだろ？」

「普通の人はほとんど政治には興味ないのよ。だからみんなあやふ
やな印象でしか、支持をするかどうか決めてないの。だから質問内
容で支持率が変わってしまうの。例えば1週間前の記事と2週間前
の記事を比べると2週間前の記事には質問内容にわからないが入っ
てるわよね」

「うん」

「政治に興味がない人は大統領が何やってるかなんて知らないから、
大体わからないに入れちゃうのよ。そりゃそうでしょ、全く興味な
いんだから。直衛だってめんどくさいアンケートとかではわからな
いによく丸をつけたりするんじゃない？」

「そーかも。商品のアンケート調査のはがきとか大体わからないに
つけちゃうわ」

「わからないを中立と考えてアンケートから排除しちゃうことがあ
るわ。ほとんど政治に興味がない層これを【中間層】というんだけ
どその人達を全部排除しちゃうことになるの。でも投票者のほとん
どが中間層にあたるの。だからもし彼らを排除しちゃったらほとん
ど意味が無くなってしまっちゃうよね？ その結果、元々支持する人が
決まっている【固定層】のみの偏った支持率がでてきちゃうのよ」

「な、なるほど、じゃあ2ヶ月前の記事でおそろしく支持率が上がってるのはなんで？」

「2ヶ月前の記事には【圧倒的多数の票を獲得した】って文言が入ってるでしょ。これが厄介なのよね」

「どういうこと？」

「この文言で、みんなが支持してるなら間違ってるはずはないと【思いこんでしまうの】そして勝ち馬に乗ろうとこぞって支持してしまうのね。これを【勝ち馬投票】というの。だからこれは最初の文言で、支持率を大きく増やしてしまっていて正しい支持率調査になっっていない」

「は〜なるほど。じゃあ1週間前の記事が一番正しいわけ？」

「まあ比較的信頼性は高いわね。でも新聞にはそれぞれ読者層があって、その読者層に合わせて書いているの。この新聞の場合、経済に強いからお金持ちや会社員が読んでるわけで、だからその分、【統計の偏り】が生じてしまうから、完全に信用できるわけじゃない。それにこんな質問内容をこころ変えるという基本がわかっていない新聞社がきちんとした世論調査を行えているのかはかなり怪しい。もしかしたら聞き出す過程で誘導尋問的な質問法をしている可能性もある。その点、ワシントンオラパは長年の蓄積があって、この世論調査を行っているから信頼性が高いといえるわね」

「話を纏めると、質問内容を変えないワシントンオラパの支持率調査は信頼できる。そしてこの2ヶ月前から30%の支持率低下は実際の支持率を表していると」

「そうね。何か政策的に失敗したのかもしれない」

「思いつくことは？」

「さあ……わからない。ちょっと考えてみるわ」

彼女は椅子に座ると、少し落ち込んだのか、肘を立てて、手に頭をのせてうなだれた。そんな姿をみて、かわいそうだな……と思う。政策のことは全くわからないので俺には原因を突き止めることはできないけど、せめて何か元気づけてあげられないだろうか。

そうだ。料理を作ろう。

いつもアジの開きだとかあんな質素なものじゃなくて、朝飯くらい豪華なものを食べたっていいじゃないか。

そうすれば少しは元気がでるんじゃないだろうか。

そう、俺の自慢の手料理を食べさせてやる。

「俺、ちよつと用事があるから！」

「あ、待つ……」

昴は静止するように手を伸ばしたが、俺はボタンとドアを閉めて、厨房へ走っていった。

昴は俺がいなくなるとため息をついていた。

「こういうときに一緒にいてほしいのに」

彼女はまた大きいため息をついて、少し悲しくなったのか、机に突っ伏して新聞を枕にしてそのまま眠ってしまった。

「直衛のバカっ……ぐす……」

もしも高校生の俺が大統領御付メイドと一緒に料理を作ったら

厨房は広がった。大きな水洗い場や冷蔵庫、オープンなどよりどりみどりである。電気はついておらず、朝日のこもれびの中で、包丁片手にトントンとアンリー1人が寂しく料理を作っていた。

「おはよう！ アンリ」

アンリは俺の声に気づくと、手を止めて、いつものやる気の無さそうな半眼をこちらに向けた。

「おはようございます。直衛様」

頭をぺこりと下げた。

「何作ってるの？」

「今日はハムエッグです。今、キャベツを切っていました」

「やっぱり質素だなあ……質素なのも悪くないんだけどさ、こう朝はしっかり豪華にいかない？」

「豪華ですか？ でも献立の予算は決まっております、朝食はこの程度が限界です」

「そこなんとかならない？」

「宮廷管理費の内で行くりすればいいと思いますが宮廷管理費の割り当て変更は大統領の許可がいりますね」

「秘密にやりたい」

「秘密に？ それはメイドの私にはできません。権限を逸脱しますから。勝手にやったらクビになってしまいます」

「まあ、そうだね……でもそこをなんとか！」

俺は両手をつけて拝むように頭を下げた。

アンリは迷惑そうな顔をした。

「それじゃあ、直衛様の自費でやられたらどうでしょう。いくらかは持っているでしょう？」

「それが無一文なんだ。銀行に貯金はあるけど、ここじゃ卸せない

し」

アンリはふうつとため息をついてダンともっていた包丁でキャベツを切り落とした。

「ヒッ！」

「じゃあ私の私費から出しますよ。あとできちんと返してくださいね」

「あ。い、いや無理しなくていいです」

「断るとあとが怖いですし」

「え、何が？」

アンリは軽蔑したようにさらに眼を細めて、クビを斜めにした。

「あ、あはは……ありがとう！ほんと、日本に帰ったら絶対返すから！」

「一旦家にもどってお金を取ってきます。そのくらいの時間はいいですよ」

彼女はすたすたとドアの方へ歩いていった。

「俺も一緒に行くよ！食材は俺が持つからさ。二人でいったぼうが買い物も楽だろ」

アンリは下を向いて、少し逡巡した。

そして、諦めたように首を振る。

「わかりました……」

すたすたと先に歩いていった。

アンリさんてすごく良い人だな。

怖いけど。

彼女には何か後で恩返しをしよう。そう思いながら早足で歩くアンリの後ろをついていった。

大統領官邸からぬけて、噴水を通り、ジャングルで覆われた道路を歩いていく。レストランなどが点在する中心街とは逆方向である。そこに掘っ立て小屋が密集して存在していた。人々はアクビしながら小屋の前に座り込んでいたり、あまり綺麗とはいえない服で忙

しく歩き回っている。またバケツを持って、河から水をくんできた女性がいた。

「な、なあここ通るのは危ないんじゃないか？　ちょっと危険な人たちがいっぱい住んでるみたいだし」

彼女は無言のまま歩き続ける。すると、一件の藁葺き屋根の家でとまった。そこらの木材をかき集めて作った本当に簡素な家だ。

「少し、ここで待っていてください」

アンリはその家の中に入った。

あれ……もしかして、アンリさんここの住人さん？
すぐに出てきた。

「じゃあ食材を買いに行きましょうか」

するとまた無言になって、歩き出していった。手には財布を持っている。おそらくあの家から取ってきたのだろう。

いや、絶対ここアンリの家だよ。ああ、やべ、危険な人たちがいっぱい住んでるなんて言っちゃったよ……怒ってるかなあ

「あ、あのごめん」

「何がですか？」

「さつき、危険な人がいっぱいいるとか言っちゃって……」

「別に気にしてないですよ。全然。ゼーんぜん。ちよおおおとも。そういう扱いは慣れてますから」

彼女は上目遣いで影の着いた半眼で指をボキボキしながら俺を睨み付ける。

めっちゃめっちゃ怖い。

「あわ、あわわ本当ごめん。でも俺はそういう意味で言ったわけじゃない」

彼女は俺の目をじっと見つめたまま、顔の側まで近づいてくる。

と、その場でぎこちなく彼女は顔の半分は笑った状態で、顔の半分は怒っている状態になった。

「もう、この話は止めにしましょう。正直、大統領閣下のファーストジェントルメンが人様に謝っているのは世間体によくありません。

これを昂様が知ったら、私をクビにしかねませんから」

これ愛想笑いだったらしい。

「ふ、ふえええええ。わかった。ごめん。ごめん。もう話さないよ。だから殺さないで」

「は？ まあどうでもいいですけど」

そして彼女は振り向いてとことこ歩き出した。

二人はしばらく無言のまま市場へと着いた。

それにしてもアンリって結構苦労してるのかもな。そう俺は思った。

市場についた。

バナナや椰子の実がカゴの中に入ってる果物屋。ダンボールの中に詰められたキャベツやダイコンなどの輸入食材専門店。醤油やソース、ケチャップやマスタードが並ぶ調味料店など、案外品揃えが良かった。魚なども豊富で、ウオヤと書かれた看板が軒下にそこから中吊され、おそらく地元でとれたマンジュウイシモチ、ヒラアジ、ハゼなどが並んでいる。

どこも椰子の葉っぱで屋根を作り、簡単な木材の柱で簡素な作りの店だった。

「意外に食材豊富なんだね。何作るか迷う」

「ええまあ、食糧支援に関しては、旧占領国のアメリカから大量に來ますからね。これでも以前よりは少ないと思います。リーマンショックの影響でアメリカからの支援額も減ってますから」

「ふーん」

そう言われるとそうかもしれない。店頭の広さに比べて並べられている食材の量はまばらですかすかだ。本来は山のように置かれているものなのだろう

店主がその嫁さんと話している声が聞こえた。

「ったく、これじゃやってけねえよ。以前に比べて食材が減って全然客がよりつかねえ」

「確かにねえ、これで金利返せるかしら」

「やってくしかねえだろ……あ、外国人のお客さん！ 椰子の実買ってかないかい！」

その親父は俺の学生服の裾を引っ張って一向に離そうとしない。

「え、あの……そのお」

アンリはぱしとその手を払って、親父と俺の間に割って入った。
「結構です」

俺の手を引っ張って歩いていった。

「うーん。どこも必死なんだな」

「そうですね」

アンリはあまり興味なさそうだった。

「そついや、あのおっさん、金利どうこう言ってたけど借金してる島民多いのか？」

「お店をやっているところは『マイクロクレジット』を使って大抵借金してるんじゃないでしょうか」

「マイクロクレジット？」

「主に貧困層のような返済可能性が低く、融資不可能な人間に対して行われる金融制度です。金利はおおよそ20%程度で、5人程度の連帯保証人をつけて、払えない場合は彼らが払うことになります。融資額は大体50〜3000ドル程度」

「金利20%？ 高えよ！」

「これでも良心的ですよ。マイクロクレジットを使わなかったら40%50%当たり前です」

「でも日本だと住宅ローンとか3%くらいだぜ」

アンリは呆れたように肩をすくめた。

「日本人の基準と一緒にしないでください。ここは南国の島国、大した産業なんてないんです。つまりその分、返済される可能性が低い。貸したら返ってこないこともままある。日本の場合銀行ローンの貸し倒れ率は2%と比較的低いですがここじゃあ貸しても返ってくるかどうかはわからないですよ。その返ってこない分を金利に

上乘せしなくちゃならないんです」

「勉強になった。さすが東大出だぜえ」

アンリはそこで立ち止まって、ぎゅっと足を踏んだ。

「痛！　なんで足踏まれるの！？」

「どうでもいいですが、さっさと作るもの決めてください。朝食の時間が過ぎちゃいますよ」

「あ、うん。そうだね。おー痛……それにしても生活苦しくなってるんだな。そのせいで支持率が落ちちゃったのかな」

「支持率って大統領支持率のことですか？」

「え、うん。それで昂が落ち込んだじゃってさ、それで俺がおいしい手料理作って喜ばそうとしているわけ」

「大統領を支持する理由っていうのは人それぞれ【選好】が違いますからね。リーマンショックによる経済後退だけが原因ではないと思います。まあ私には関係ないことですね。早く買う食材決めましよう」

選好って何？　って聞こうとしたが、アンリは早く食材買って帰りたいようなので言うのはやめておいた。

「じゃあ……うな重だ！　うな重にしよう！」

「作れるんですか？」

「たぶん」

アンリは口をひくひくさせていた。

「たぶんって……まあ買いに行きましようか」

（私が食うものじゃないし）

という声がどこからか聞こえたような聞こえなかったような気がした。

ウオヤを見て回ると、一軒だけ、膾にはいったままウナギを売っている店を見つけた。

「あ、お客さん、日本人？　フィリピン人じゃない？」

「俺は日本人だけど」

「ウナギピチピチだよ！」

俺が日本人だと気づくとアロハシャツ着たウオヤの店主が軽快な口調でくっちゃべる。日本はかなり凋落したものの一応GDPが世界3位の国なので、金持ちが来たと思っただろう。確かに色といい艶といい悪くない。中国産の養殖物でなく、天然物のようだ。それにしてもなんでフィリピン人と間違うのだろうか、俺ってそんなに色黒かな。

「じゃあ、これ1つ」

「ちよっとー、私が先に買おうとしてたのよー」

俺は顔を横に振り向いた。

すると白衣姿で、頭にお花を載せて、眼鏡の上に緑色のゴーグルを装着した女の子がそこにいた。背は子供のように小さかった。

なんだこの子、なんで白衣で、頭に花なんかつけてるんだろう。

「お客さん値切ってばっかで全然買おうとしないし、うちは値切りダメだから。看板に書いてあるでしょ」

「ケチンボ！」

外国だと値切りはあまりしないらしいな。ほとんど値切りは受け付けないと聞いた。

「何ドルですか」

「30ドル」

現在のレートは1ドル80円だから2400円。物価なども考えると高いなこれ。確かに値切りなくなる気持ちもわかる。だけど、値切りダメって書いてあるんだから、その土地の風習に従うのが道理だと思う。

「後で絶対に、ぜえつたいに返してくれますよね」

アンリは口をとんがらせて言った。

「うん。返す。昂に土下座してでも日本の銀行からお金を送金させる」

アンリは疑い深そうな半眼をぴくりとも動かさない。

俺は心臓がバクバクなった。

「まあ信じましょう……」

そういつて、ピラミッドの書かれた1ドル札を30枚だした。

「まいどあり〜」

「むううううううう」

隣でしかめっ面している女の子は無視。

「じゃあ、帰ろうか」

「あ、あんた、そのあんた名前何!」

「先に名前乗るのが礼儀じゃないのか?」

「キイー偉そうに、一般庶民の癖に! 私はプリシス・ベクトラよ、さ、言ったわよ。あんたの名前何よ!」

「工藤直衛」

「中村直衛ですよ。ファーストジェントルメン」と即座にアンリにつっこみをいれられた。

「中村直衛つて、大統領と電撃結婚したスケコマシ野郎じゃん! 毎日毎日淫乱生活していて、それで大統領が腑抜けになっっているってゲンダイオラパに書いてあったわ!」

アンリはひよこつと胸元からゲンダイオラパという雑誌を取り出した。女性の裸の写真とともにゴテゴテしたカラーのイラストと文字がひしめき合っている。

「ゴシップ雑誌です」

「なんであなたが持つてるんですか」

「女性にとつてうわさ話は3度の飯より重要」

そういつと、アンリは目はそのままで口元だけにやりと笑った。

「と、とにかく、そのうなぎ返しなさいよ! 10ドルで!」

「なんで30ドルで買ったものを10ドルでわたさにやらなんのだ……」

「はあ? この愚民が。じゃあこのゴッグル1日使わせてあげるから、それで10ドルまでまけるよ!」

口の汚い女だな。

「そんな趣味の悪いゴッグルいらんよ」

その女の子はゴーグルをはずすと、くりっとした目をだした。そしてテンプル（フレームの耳にかける部分）についているボタンをポチポチ押して、そしてにやにやと笑いつつ、俺にゴーグルをかける。

「あ、背中向かないと」

目の前にプリシスのぷりっとしたおしりと、肌色の背中が見えた。つまりプリシスの背中まっ裸だった。

「ブー！どんな服装したんだおまえ！ 前だけ白衣はっつけて、背中まっ裸とかコントかよ！」

「は？ 何言ってるんですか直衛様？」

「お、周波数合ってたみたいね」

プリシスは俺に近づくと、背中を向けたまま、上半身だけをねじって、手で胸を隠したまま耳のそばで喋った。

（これ、服が透ける眼鏡なんですよ）

「う、うそお？」

（本当ですってMRIを応用した技術で、ある一定の原子の共鳴周波数に合わせて、物体の周りに磁場を発生させるんです。そして、その共鳴現象の緩和過程をゴーグルの中のCPUで計算して、その原子を持つ物体の立体映像をゴーグルに映す装置なんです）

まじのようだ。何故なら、彼女のねじった上半身にはさっきのようないきなりなく、しっかりと赤いさくらんぼのような乳首が見えていた。

「うおおおおおおお、さくらんぼ発見！」

プリシスは眉をへの字にすると、俺の顔を90度回して、アンリの方を向かせた。

「楽しむのはこっちの人にしてくださいっ」

俺の目の前にアンリの裸体が見えた。

アンリの体は胸が出て、お腹は引っ込み、おしりがでている。つまり出るところは出て、引っ込んだところは引っ込んでいいる。じっとした汗が、胸からへそをぬけて、股の間を抜けていくのが見

「ちよつちよつと待つて、それ100万ドル！ 100万ドル！」

そういいながら、プリシスがスライディングでそのゴーグルをキャッチ。ゴーグルの代わりにプリシスの背中が足蹴にされた。

「うげ」

「あなたとんでもないもの持つてますね」

「あ、あぶなくただでさえ少ない研究費がさらに削られるところだつたよ」

「研究費？」

「ああ、私はバイオ研究所の所長なの」

プリシスはぱっぱと白衣の水コリを払って、立ち上がった。

この小さいお子様が？ 昴はどういう基準で選んでるんだよ。まああいつのことだからどうせ適当に選んだらうけどさ。

「つうとこれは、バイオ研究所で作ったのか」

「そうそうすごいでしょ」

「すげえ」

まだ怒りが収まらないのか、顔中に血管を浮き上がらせたアンリが口をだす。

「研究費でエロ眼鏡なんか作らないでもらえませんか？」

「いやー別にこれはエロ眼鏡じゃなくて、MRIを使って、体の内部構造を映し出すものだから。ちよつと周波数変えるね」

もう一回、ゴーグルを俺にかける。

「ちよつと！」

「まあまあ、カルシウムの原子に周波数を合わせてつと」

目の前にガイコツが動いてる。

「げ、ガイコツが動いてる気持ち悪！」

プリシスはアンリにもゴーグルをかけさせた。

それを見ると、納得したのか、ため息をつきながら、ゴーグルをはずす。

「でもやっぱり下らないものです。こんなの作ってどうするんですか」

「いやいや、医療面で使えるんじゃないか。患部を切り開かず、悪いところを見ることができる」

「まあ確かにそうですね……」

「いや、すごいじゃん。これを工場で大量生産すれば結構売れるんじゃないか。昴が作ったバイオ研究所もいいもの作ってるじゃん」

プリシスとはばけたような表情をしていた。

「工場で大量生産なんかしないよ。これただの趣味だし、今は違うの作ってる」

「え、なんで……これ作ったら売れるんじゃないの？」

「ボクが研究しているのはボクの趣味だもん。商業利用のための研究なんてまっぴらだよ。画像の画素数を上げるためにちっさい改良繰り返しして、安い材料でつくるためにせせこましい生産技術の研究をするなんてまっぴらだね……つまんない」

「でも、昴がバイオ研究所を作ったのは新しい産業を作るためで、商業利用しなきゃ何の意味もないじゃないか」

「関係ないよ。ボクはボクの好きなことをやるだけさ、出資者の意向なんて関係ないね。ボクは自分の研究のために、自分が楽しむために研究してるんだよ。面白くないことなんてやらないよ」

なんか俺はむかついてきた。昴が島民の未来のために作った研究所がこいつの私物化されているような気がしたからだ。

「お前の研究費は税金から出てるんじゃないのか？」

「だから？ こんな島民がいくら税金しぼりとられようとボクには関係ないんだけど」

「おい！」

「うるさいなあ……じゃあいいよ。 جوجل返して、うなぎももういらなから」

プリシスはぷいっとアンリから جوجلを取って、あちらの方へ歩いていってしまった。

「なんだ、勝手なやつだな」

「一々怒ってもしょうがありません。みんな自分の利益が一番で、

国家のために働いている人間なんて1人もいませんから」

アンリは遠くへ去っていくプリシスを遠目で見ていた。

「そりやそうだけどさ。税金を好き勝手に使ってるのはなんか許せないよなあ……」

アンリは俺の肩をぽんと叩いて、朗らかな笑いをした。

「早く帰らないと、大統領の背中とお腹がくつついちゃってまーた、だだこねちゃいますよ」

「そ、そうだな」

俺たちはプラスチックの袋を抱えて、急ぎ足で大統領官邸へ戻った。

俺は厨房に立つと、コック姿に着替えて、さっそく料理を開始した。

俺の手料理なので、アンリは手伝わない。アンリはパイプイスにアゴに手を置いて眺めていた。

「本当に大丈夫なんですか？」

「おう、親父がうな重作ったのみたことあるから余裕だよ」

アンリはアゴから手を滑らしてこけそうになっていた。

「みたこと……ま、まあ頑張ってください」

大鍋の中に砂糖、みりん、醤油を入れてまぜる。

アンリは呆れたように声をあげた。

「酒は？」

「え？ 酒、い、入れるんだな」

酒を1さじちよびつと入れる。

「足りません」

「え、え？ じゃあこれくらい？」

大さじ10杯くらいいれる。大鍋に火柱が立った。

「あわあわわわ」

アンリは手ぬぐいを大鍋にかぶせて、鎮火した。

「はあ、ったく、じゃあ私が手取り足取り教えますよ」

「でも……」

「素人はプロの意見を素直に聞く!」

「は、はい」

とほほ……

そんなこんなでアンリに手伝ってもらいながら料理を作っていた。

「じゃあとりあえずうなぎを捌いてみましょう。それくらいできるでしょ?」

「え、どうやるの?」

「仕方ないですね……じゃあ私と一緒にやりましょう」

アンリはいきなり俺の手を握って、ウナギのさばかたを教えようとした。

アンリの口から出る甘い吐息が顔のすぐそばまで来て、ゆっくりとした口調で教えてもらう。

「まずですね。目にこうトンと千枚通しを刺して、エラのうしろに切れ込みを入れて」

アンリの胸がエプロン越しに俺の背中に当たる。

「はう!」

「はい?」

「な、なんでもありません」

「いつきにしつぽまで開きます。こうジャツと」

動くたびに胸が俺の背中に触れて、ゆらゆらと揺れていた。

「はあはあ……」

「大丈夫ですか? なんか息が荒いんですけど」

「なんでもないです」

「内臓と背骨を取って完成です」

「うお、こすれる!」

というと、彼女はぱつと離れて、自分の胸を隠す。

「もしかして背中に胸が当たってました?」

「え、あ、う、うん……ごめん」

「いやまあ良いんですけど、別にいいんですけど……」

「う、うん」

「……それよりさっき失敗したタレをもう一度作りましょう」

俺たちはなんとなく無言のまま作業を続けた。

お玉を渡すときに手と手が触れるとアンリはぴくっと反応する。

その後、そおっと俺の手をゆっくり握って離れた。

え、何このピンク色のムード。

「お酒１００ＣＣとみりん３００ＣＣを入れて強火で沸騰させてください」

俺は言ったとおりに作業をする。沸騰するまで時間がかかる……

その間の厨房の雰囲気がいまいにも重い。のどに重油でもつつこんだように息が苦しくなった。

沸騰した後は砂糖を溶かし込んで、その後、醤油を入れて、２０分待つ。ここに来てやることなくなり、俺たちは見つめ合った。

そして俺愛想笑い。アンリもいつもの半眼で愛想笑い。その後にお互い目を伏せて、真っ赤になった。

あまりにも気まずい雰囲気、俺はとりあえず話をふることにした。

「あ、あのさ、さっき市場で言ってた選好って何？」

「せ、選好ですか！　そ、そうですね。タレが煮詰まるまで説明しましょうか！」

ぐつぐつと鍋の底から小さな気泡がでて、もわもわと湯気が立ち始めた。

「選好というのはですね。例えるなら、僕はバナナよりリンゴが好きだけど、あいつはリンゴよりバナナが好きってことです」

「バナナ？　リンゴ？」

「人それぞれ、好きなものが違うってことです。例えば、大統領が補助金を国民全員に与えたとする。そうなると支持率はどうなると思いますか？」

「上がるんじゃないか？　それももの凄く」

「それがですね。実際は上がらないんですよ。あんまり」

「えっ……なんで？」

「補助金といつても全員にお金を分け与えた場合すごく小額になってしまふんです。こんな小額をもらうよりもっと別の政策にお金を使ったほうがいいんじゃないかと思う国民が多いんですよ」

「はあ」

「老人なら、その補助金で病院などを建てて福祉を重視してほしいと思うし、若者ならその補助金で雇用を促進してほしいと思うわけです。つまり国民それぞれによつて好まれる政策が違ふんです。だからお金をみんなにばらまいても、きちんと国民の需要にマッチしていないと意味がないんです」

「つまり……貧乳のロリが好きな国民もいれば、巨乳のお姉さんが好きな国民もいるってことか」

「あなたはエロ方面に話を拡大させないと理解できないんですか？」

もう話しませんよ？」

アンリはじとつとした目つきで睨む。

「俺に理解しやすいように考えたただけだよ……うーん。しかし、そういう風にみんながみんな欲しいものを欲しがって、大統領が国民の欲しいものを与えると支持率が上がるってわけなんだな。ふーん。選挙ってよくできてるなあ」

「うーん。選挙がよくできた制度ねえ」

鍋がぐつぐつと沸騰しはじめてきた。アンリは味を少し確かめると、お玉で軽く中身を混ぜて、もう少し醤油を加える。そして少し色が薄まったタレは沸騰が収まり、また静かになった。

アンリはまたパイプイスに座り込んで、アゴに手を乗せ、軽く口元を笑わせた。

【選挙とは致命的な欠陥を持つ最低最悪の制度です】

アンリは冷たい目つきで俺に言い放った。

「えっ……どうして？ みんなの好きなものを欲しがってそれを手に入れられるのが選挙だろ。選挙がなくて王様が勝手に政策を決め

る独裁制なんかより全然良いんじゃないか？」

「国民が本当に自分にとって必要なものを欲しがっているとは限らないんですよ」

「どうということ？」

「国民は世の中に出回っている一見正しいような風聞に惑わされて、自身の選好を変え、自分の利益を度外視した投票行動を取ることがあります。例えばですね、この大統領は外国人に肩入れして自国民の利益を重んじないからだめだとか、この政策が施行されると自分に有利になるが、一部の人間の利益になるからだめだとかね」

「良いことじゃないか」

「そう思うでしょ。でもね違うんですよ。国民は政策が行われた実際の効果をほとんど知らないんです。間違った政策を支持することもあるんですよ。国民は大統領とあなたが淫乱結婚生活をしているというゴシップネタはよく知っていますが、税収がどのくらい減ったかということや、社会保障費が増大しているという事実はほとんど知りません。もし、対立候補が国家を傾けさせるような政策を発表しても、一見正しそうに思えば、その対立候補が勝つこともありえるんですよ」

淫乱結婚生活ってなんだよとっつこみたかった。

「一見正しそうな政策って具体的にいえばどんなものだ？」

「それは反移……わ！」

ぐつぐつぐつ

アンリは立ち上がると、ガスコンロを止めて、沸騰するタレを見た。

「危ないところでした。こげちゃうところでしたよ。まあタレはできましたね。じゃあ続きははじめましょうか」

「ちよつと待って、話の続きは？」

「それよりこれ先に作っちゃいましょう」

俺はドンブリの上にご飯をシャモジで詰め込むと切ったウナギを載せた。

タレをかけて、うな重ができあがった。

「さっ、大統領に持っていきましょう」

「わりいな。なんかほとんどアンリが作ったみたいな感じになっちゃった」

「まあ、最初はこんなもんです。手料理を披露するのはもうちょっと練習してからね？……ふふ、料理してたら暑くなっちゃった」

アンリがメイド服の上に着たエプロンを脱いで、胸元のボタンを外した。

と、その時である。

俺は先ほどこぼした酒に足を滑らせて、転んでしまった。そして前にいたアンリの上におぶさってしまった。アンリは半分服が脱げているような状態で、俺と抱き合っている格好になっていた。

「いてて……ごめんアンリ」

「あ、はい直衛様……あ」

「でもこれだとまるでよくあるギャルゲの恋人同士がやるシチュエーションだよな」

「直衛様、それ以上言うのをやめてください」

「へ？ 俺たちが恋人同士だってどこ？」

その時、後ろから細く震えた声がした。

「あなたたち、何してるの？」

俺が後ろを振り向くと、そこに昴が立っていた。

昴は手に銃を持っていた。昴はアンリを軽蔑したような目で見て、アンリの額に拳銃を突きつけていた。

そして昴の銃声が厨房中に響き渡った。

間一髪、俺が昴の足にタックルをして銃口は逸れた。

銃弾は大鍋を貫いて、壁に立てかけられたフライパンにめり込んだ。

大鍋に穴が空き、なかのタレがそこに蛇口があったかのようにジヨロジヨロと流れだし、アンリの顔にかかり、アンリの黒い髪と白

い顔と使い古された白いメイド服は真っ茶色に染まった。

「あ、あわ……」

「死んじゃえ！ 私の直衛に手を出すんじゃないっ」

「ちょちょちょ……冷静になれって、違うから！ 今のは転んで俺がアンリの上におぶさっただけだから！」

「なんで？ なんで直衛は私がいるのにこんなことするの！」

昂は半泣きの表情になって、アンリの額に銃を突きつけた。

「そっだ……この女狐が私の直衛を誘惑したんだ！」

「ちよつと待てって！ アンリは俺の手料理の手伝いをしてもらっただけだから！」

いくら俺が弁明を述べても、いやいやと昂は顔を振るだけだった。こつちの話なんて全く聞いちゃいない。

俺は仕方なく、昂を壁に押し付けて、体ごと押さえ込んだ。アンリはそれでもじたばたと暴れた。

「やだやだやだ！ アンリが直衛を取ったの！」

昂は目を擦りながら、ぐすぐす泣いていた。

俺は昂を抱きしめる。

「本当だから。あそこにな重があるだろ。あれ今俺が作ったのだから。これでも食べて落ち着け」

「はむ……はむ」

昂は銃を離そうとしない。俺がうな重を割り箸で割ったあと箸で昂の口に鰻を食べさせた。

「お、おいひい……これ、直衛が作ったの？」

「そっだよ。だから落ち着けて、銃捨てろって」

「う、うん」

昂は銃をゴトツとタレで汚れた地面に落とした。

「はむ……はむ」

昂はしゃくりあげながらうな重を食べていた。

その間にアンリは左手の上腕を手で押さえて、ゆっくりと洗面台に体重をかけながら、立ち上がった。

「大丈夫か？ アンリ」

「はい。大丈夫です。直衛様、お気になさらず……すみません。大統領閣下、誤解するような真似をしまして、事前にお伝えしておくべきでした」

アンリはタレでずぶぬれになった頭でぺこりとお辞儀をした。

「だって、私1人置いて直衛どつか言っちゃうから……またずっと大統領室で1人で仕事するようになったら嫌だったから」

昂は独り言をつぶやいて、うな重を置いたあと、また俺に抱きついた。俺は昂の頭をなでて、彼女を慰める。

アンリはトボトボと厨房を出て行こうと歩き出していた。

「着替えてきます」

そういうと、背中を丸めてアンリは出て行った。

俺はアンリのその背中を悲しそうな目で見つめた。

「直衛はあたしだけのものだよね」

昂の見開かれた大きな瞳は俺だけを映していた。

その瞳は純粹さと狂気を孕んでいる。

そう俺は再確認した。

もしも高校生の俺が大統領候補の幼女とレストランで対峙したら

1週間後、昴と俺はリリユー島の水ワイトジュエリーレストランで昼食を採った。昴がうな重のお返しをしたかったということだ。ホワイトジュエリーレストランは真っ白な壁が目印の店だ。

昴はお忍びなので、黒いサングラスをかけている。麦わら帽子を被って、黒いレザージャケットに黒い手袋、ジーンズを着て、クラウンチェアにもたれかかっていた。正直、麦わら帽子とレザージャケットは合わないと思う。

昴はサングラスを少しずらす。

「アンリはちゃんと遠くの席に座ってるわね」

アンリは遠くの席でぼつりと1人背を丸めて座っていた。

あの事件以来、昴はアンリにかなり冷たくなっていた。朝刊を持ってきて料理を食べているときもアンリとは一言も離さず、始終俺に話しかけてくる。俺は毎度気を遣って、アンリにも話に入ってこさせようと声をかけるのだが、昴が話を遮って邪魔をするのだった。

「別に一緒に席で食べてもいいのに」

「ふん。やあよ」

「お前なあ、そんなに嫌なら連れてこなくていいじゃないか。連れてくるってことは」

「車の運転手がいらないからよ。あたし運転できないから」

「ったく……」

「才待タセシマシタ」

片言の日本語で色黒のメイド姿のウェイトレスが料理を運んできた。

ウェイトレスはうやうやしく頭を下げて、お盆に載っていた刺身を、丸いテーブルに置く。

珍しい。ここの島民は大抵日本語が流暢なので、片言の日本語は新鮮だった。そのせいで、この島にしていると本当に外国にいるんだかわからなくなるものだが。

「あれ、この料理間違ってるわよ。わたしが頼んだのはお刺身セツトじゃなくてウエカブよ」

「失礼シマシタ……」

「今度は気をつけてね」

おそらく日本語が苦手だから聞き間違えたのだろう。

昂は文句の1つでも言うのかと思ったら意外に優しく対応していた。いつもならぎゃあぎゃあ騒ぐのに。何か思うところでもあるのだろうか。

「お前どうしたんだ？ いつもならもつとわめくだろうに」

「私をどんな風に思ってるのよ。フィリピン人はみんなから嫌われているから優しくしてるの」

「嫌われてる？」

「彼女らが仕事取っちゃわないか、怖がってるのよ」

日本でも最近、賃金の安い現地の中国人などに取られて若者の失業問題が発生している。

「はあ、なるほどどこも変わらないな」

「人間の一番根本的な感情は恐怖よ。人々は証明できない不安を恐怖へと変えるの。そしてその恐怖は如何なる感情よりも自分を動かす原動力となる」

「才待タセシマシター」

ウエイトレスがウエカブを持ってきた。

「ありがとね」

ウエイトレスは御礼を言われると、うれしそうにニコニコしてペコリと頭を下げて、隣の席の人からオーダーを取りにいった。

俺たちがウエカブのスープをすすっていると、店の入り口付近で客がざわめきはじめた。顔をのりだして、窓から外を見ている。すると人の渦ができる。その中心で彼らと握手しながら、談笑する女

の子が現れた。

ベレー帽をちょこんとのせて、金髪のポニーテールをふわっさふわっさと揺らしながら、迷彩服を着て、長靴を履いている。ちょこまかと手を動かして子供らしい愛嬌のある笑いを浮かべていた。

「何か困っていることある？」

「最近ねえ、フィリピン人が増えて怖いですよ」

「私が大統領になったら、すぐに制度を変えるよ！……」こによこによこによ

小さな女の子に大の大人達がぺこぺこ頭を下げていた。

俺は眉をへの字にした。

「なんだあれ？」

「あれは対立候補のランフォード・フィア。オラパ陸軍の元陸軍大將」

「軍人？ 冗談だろ」

「イラク戦争後のレジスタンス掃討作戦で米軍に協力、活躍したエリートよ」

「あいつがイラク戦争の支援に行ったのか……この国人材難すぎるだろ……」

「見た目に騙されちゃだめ、あいつ相当ヤバイわよ。アメリカから賄賂を受け取っていた士官を軍事裁判が終わった直後に持っていた拳銃で銃殺刑に処した別名【ヘルコマンダー】」

「まっさかー」

「ま、島民のほとんども外見に騙されて、その事件のことすっかり忘れて大統領候補に祭り上げてるから。直衛に信じろとは言わないわ」

俺は馬鹿馬鹿しいと肩をすくめた。

「で、あいつ何やってんだ？」

「【どぶ板選挙】ね」

「なにそれ？」

「民家を1つ1つ回って、握手をしたり、国民の要望を聞いたりし

て支持を集める選挙手法。一番確実に票を集められる手法ね。戸別訪問ともいうけど」

「ふーん。それって意味あるの？」

「どぶ板選挙はスナイパーの射撃みたいなもんね。テレビや新聞で出てくるより目の前で会ったほうがインパクトもあるし、要望を聞いてくれる感じがするから、集票効果は高い。けれど、その分、回れる数が限られるから、効果は限定的になりがち、ピンポイントに票数は稼げるけど、弾数は少ないみたいな戦法よ。一日100人に会ったとしたら、1ヶ月で3000人、オラパ島は2万人の人口だから、フィアに会った人全員がフィアに投票した場合、島民の15%の票がひっくりかえるかしら」

「え、まじかよ。敵さんは確実に票を取りに来てるってことじゃないか。こつちもそろそろ選挙活動しなきゃやばいんじゃないか」

「大丈夫よ。だって前は12000票対4000票で」

「現在の支持率は40パーセントだろ」

「うるちやい」

「何にもしなかったら負けちゃうって！」

「いいのー今日は直衛と遊びたいのー」

だめだこいつ……早くなんとかしないと

「バッカヤロウ、何やってんだテメエ！」

客が怒声に驚いて、全員振り返る。

ウェイトレスが遠くの方で客に怒鳴られていた。

「おいおいおい、これで3回目だろ。いいかげんにしろよ」

「ス、スイマセン……」

「謝って許してもらえるのか。このフィリピーナ！」

ウェイトレスはお盆を膝に当てて、ぺこぺこ頭を何度も下げている。
それを見ていた客達がヤジを入れていた。

「外国人は故郷に帰れよ」

「かーえれ！ かーえれ！ ああ日本語わかんねえのか？ フィリピナゴーホーム！」

俺はその光景を見て不快に思った。

「なんだありや、あいつらは関係ないだろ」

「ちつ……島民はやつかんでるのよ。さっきは話さなかったけど、島民はフィリピン人が最近の不景気の原因じゃないかって思ってるの」

「え、なんで？ リーマンショックが原因じゃないのか？」

「リーマンショックなんて難しいこと島民は知らないわ。知っていてもこの国とは関係ないと思ってる。新聞には粗暴な態度のフィリピン人のせいで観光客がよりつかなくなってる原因で不景気になっているんだと書いてるの。スケープゴートよ。不景気の原因を余所者におしつけてるの」

「なんだそりや」

「だから、移民との宥和政策をあたしが大統領に就任してから行ってるんだけど、全然効果あがってりゃしないわね……くそっ」

そうか、昂は移民支持派なのか。そりやそうかもなアメリカ帰りみたいだし。

ん？ ちよつと待て、昂は島民が嫌っている移民を擁護してる？ それってもしかして、最近の支持率低下の原因は移民宥和政策なんじゃ

俺はそう思ったが真剣に、いじめられてるウェイトレスを見つめる昂を見て言うのをやめておいた。もしそうだとしても、はつきりいって俺がここで口を挟んで、移民融和路線を変えて欲しくなかったからだ。

島民の1人が食っていたので卵をそのウェイトレスに投げつけていた。ウェイトレスが手を顔に掲げてひるむが、卵は防げず、顔が卵でべちゃべちゃになった。彼らはその光景を見て笑っていた。さらに近くにいた男は足をひっかけてその場にウェイトレスを転ばせ

ていた。

それを見ていた昴は胸元に入れていた拳銃を握っていた。

「ちよつと殺してくる」

「うおおおおお、さすがに銃はやばいだろ！ 俺に銃向けるならまだいいが……いやいやぜんよくないんだけどさ。対立候補の前で島民に銃を向けたら、しゃれにならんぞ！」

「あたしは……選挙のために島民を見捨てるなんてできない！」

「そ、その意見には大賛成だけど」

気づくとアンリも近くに来て、大統領の手を掴んでいた。

「大統領選のためですっ」

「アンリあんた手え離さないとクビにするわよ」

昴はアンリを睨み付けた。

「そ、それでも私は、大統領のために手を離すことはできません！」

昴は不機嫌そうにちつと舌打ちして、アゴでアンリをどくように指示する。それでもアンリはどかない。昴はだんだん足を貧乏揺すりしてイライラしてきたようだった。

こりややべえなと俺が思っていたところ、俺の前に人影が通過ぎた。

その人影は、フィアがふわっさふわっさとよこにポニーテールを揺らして、そのウェイトレスの前までずい進んでいったものだった。

「あなた、フィリピン人？」

「ハ、ハイ」

フィアは腕を組みながらにこにこしてウェイトレスの周りを回る。ポニーテールがくるくる回っていた。立ち止まるとポニーテールがピコーンとまっすぐに伸びる。なんだあれ機械でも入ってんのか。

俺たちは島民の横暴を止めるのかと思って、彼女のやることを注視した。

だがフィアは、ふとなりの席のマカロニ・スープを手にとると、

そのウェイトレスの頭にかけたのだった。

「アツアツア……」

ウェイトレスは顔にかかったそれを熱いというより痛そうに顔を振って、髪の毛の間にはさまったマカロニを取り出すために頭をかきむしって、ぐちゃぐちゃになったマカロニを床にぶちまけた。

「ごめんなさい。間違えて落としちゃったあ、でもいいよね。間違いだもんね。あなたも間違えちゃってたし」

「アウ、コレワザト……」

「え、何？ 今この子に言いがかりつけられちゃったんだけど……今のわざとだと思う人手え挙げてえ」

客達はへらへら笑っていた。

「今のは間違いにしかみえねーわ」

「そうよねえ」

「へへへ、ゴミどもにやこれがお似合いだよなあ？」

「ウ、ウウウ」

ウェイトレスはよろよろと立ち上がった。

「酷イ……コンナノ酷イ……ヒック……ヒック」

ウェイトレスは顔を手で隠しながら泣いた。

フィアはウェイトレスの顔をのぞき込んだ。

「泣いて許されるのは子供までだよお？ ボクは子供じゃないけどねえ」

「ウヒヒヒ」

「キヤハハ」

泣きじゃくる彼女の周りで大の大人達が手を叩いて笑っていた。

俺の顔中に血管が浮き出た。

「昂はそこに座つてろ……」

「でも！」

「俺があいつの脳天ぶちまけてくるあ！ 俺ならなんの問題もねえだろ！」

俺が立ち上がった、ウェイトレスの前で手を広げて立った。

「これ以上手えだしたらまじぶん殴るから」

「え？ なにおまえ？ 彼氏？」

「ちがう」

「関係ないならどいてよ。今、ちょっと調教してるところなの」

「お前まじぶんなぐるから」

「うわーこわいよう。ボク幼女だから、おしっこちびりそうだよ」

「ガキは家に帰ってゲームでもしてろ」

「あ？」

フィアはポニーテールの中に手を入れると、すつとそこから何かを取り出す。

「危ない！」

昴が店内に響くような大声をあげて、銃をフィアに突きつけた。

フィアの手にはナイフが握られて、俺の首もとにナイフが突きつけられていた。

「あれえ、現大統領閣下ではないですか」

フィアは俺と昴を順番に見る。

「ああ、これが最近、あなたが日本から買ってきたおもちゃですか」
「おもちゃじゃなくて、私のファーストジェントルメンよ。その手に持つてるものを捨てなさい」

「夫？ 実際は拉致同然で連れてきたと、オラパタイムズに書いてありましたけど？ 夫じゃなくてまるでダッチワイフみたいに扱ってるらしいじゃないですか。彼はあなたのことをそれほど好きでもないとか」

俺はその言葉にどぎりとした。

「そんなことない！ 私と直衛は愛し合ってるの！」

「まあどうでもいいです。現大統領閣下の夫が対立候補に暴力発言……ずいぶんなスキャンダルですね。これ。報道されたら大統領支持率がナイアガラのように落ちるんじゃないんですかあ？」

「あなただって、ナイフ突きつけてるじゃない」

「これは正当防衛。経緯を考えれば誰だって認めるでしょ」

「くっ……」

「さあ銃を降ろして、おもちゃはどいて、調教を続けます」

そういうとフィアはナイフをペロリと舐めた。ウエイトレスが震える。

ここで俺がどく？ 泣きじゃくる女の子を目の前に悪党に売り渡す？ この舌なめずりする小さい悪魔に屈服する？

んなもんありえねえ！ 泣きじゃくってる女の子をほつといてどつかいっちまうようなのはそんなもんは人間じゃねえ！

「てめえの腐った脳みそを俺の拳でシェイクして治してやる！」

俺は勢いよく拳を振り上げ、フィアの顔に向かって拳を振り落とした。

フィアはその拳を一瞬でよみきり、後ろに跳躍、俺はその場でバランスを崩して倒れかける。

「ハハハハハ！ 一般人が軍人に喧嘩で勝てるわけないでしょ！」

その瞬間である。落ちていたマカロニ・スूपを足で踏んで、ズルツと俺は小さなジャンプをした。そして俺は転ばないように何かを掴もうと思い、目の前にあるそれを掴んだ。

フィアの軍服である。年季の入った軍服は不幸なことに、素地がボロボロだった。そう、ビリッと音がして軍服が胸元から腹部にかけて破れ、ついでにブラのフロントホックがはずれ、ついでにズボンがずり落ち、ついでに彼女の小さな胸とかわいいクマさんパンツが大衆にお披露目なされた。

「この人、転んじやつた、馬鹿みたい！」

フィアは気づかないのか、足を大の字に開いて、堂々と俺を指さした。もちろん素っ裸のまま。

そしてフィアは訝しげな表情をして、周りの雰囲気がおかしいことに気づく。

「なに？ なんでみんなボクをにやにや見つめたり、ボクから目を伏せたりしてるの」

「ア、アリガトウゴザイマス……う、うわああああああん」
ウェイトレスは俺の胸で泣いた。

「あんたたち、今度やったら法律変えてやるからね。彼女に卵投げた奴は死刑って、遡及法（過去に遡って刑罰を下すこと）だって大統領権限があればできちゃうんだから」

客達は反省したのか、背中を曲げて料理を食べるもの、居づらくなつて店から出るものの二つに分かれた。

「直衛かつこよかったわ」

昂が俺の肩に手を当てる。

「でもね……他の女の子を抱きしめちゃだめ！」

もの凄い力で俺とウェイトレスを引きはがそうとする。

「わりい、彼女が泣きやむまでな」

「だ、ダメなの！ 絶対ダメ！ あなたは私だけのものなんだから！」

昂は彼女から俺を引きはがすと抱きしめて、キスした。

「心配したんだからねっ」

キスが終わると、目と目がくつつくほど、息と息がふれあうほどの距離で俺はそう言われた。

俺はその日、顔の火照りが夜まで取れなかった。

もしも南の島の大統領が落選したら

翌日、俺たちはリムジンで草木生い茂る谷間に作られた道路を通り、ルーコル中心市街地へ行った。目的は街頭演説である。それと
いうのも

「これやばいよなあ」

俺はワシントンオラバを英和辞書片手に必死に読んでいた。

大統領支持率35%とでかどかど書いてあった。

「この短期間で5%も下がってるじゃないか。もっと早く選挙活動
してればさあ」

「いつまでもねちねちと……だから街頭演説に行くって言うてるで
しょ」

「さあ」

俺は昂の顔の前で口を大きくあけて挑発する。

スーツ姿の昂は腕を組んだまま、こめかみに血管を浮かび上げら
せると、くわつと鬼のように口を開いて、俺が読んでいたワシント
ンオラバを奪い取るとめちやくちやに破って窓の外に投げ捨てた。

「あーあ」

「うっさいうっさいうっさい！ あたしが演説すればすぐ支持率
は鰻登りよ。70%は固いわ」

「つーか、なんで以前から35%も下がってるんだろうな。原因が
わかれば、対処のしようもあるんだろうけど」

「選挙における国民の投票先の決め方っていうのは、自分に対する
利益、全体に対する利益、自分の所属してる派閥、自分の好みなど
非常に複合的な要素から作られるものだから、支持率の高低の原因
を見定めるのは非常に難しいのよね。例えるなら、いろんな調味料
が入った料理がおいしくなった原因を見つける作業とでもいうのか
しらね」

「着きました」

ルーコル中心市街地の教会前についた。

教会は市場に近いので、お昼休みのサラリーマンや、お昼の買い出しに着ていた女性達が教会の前の広場でご飯を食べていた。

今日はミサでないので、教会に来る人間はまばらだったが、お祈りに何人かが来ているようだった。

「ここが一番広いと思います」

アンリはマイクを手で渡そうとする。

昂はぶすつとした顔でマイクを乱暴に受け取った。

「音量調整のミスとかしないですよ」

「はい」

「ふん！」

昂はまだ俺たちが抱き合っていたことを根に持っているようだった。あれから何度もあれは誤解だと言ったのに全く思いこみが激しいというかなんというか。

昂がリムジンから出る。

俺はアンリの方の手を握った。

「あいつが態度悪いのはいつものことだからきにすんなよ」

「あ、はい……お気遣いありがとうございます直衛様」

アンリは顔を伏せて、ぽつと顔を赤らめた。

俺はリムジンから出る。すると昂は運転席に軽蔑した視線を投げかけていた。

「これのどこが間違いじゃああああ」

昂は俺の頭をリムジンに擦りつけて足で蹴りまくった。

「いてえよ！ お前が根に持ちすぎなんだよ！」

昂は顔を真っ赤にした。

「死んじゃえ！」

俺の頭にハイキックをかまして、俺の体が2回転、真っ黒な粘土質の土に頭がぐにやりと沈んだ。

昂はふんと背中を向いて、ずかずかと教会の前にある噴水へ歩い

ていった。

「ったく……」

俺は立ち上がると、演説の舞台設営を開始する。オラパの旗を昂の後ろに2本刺したり、スピーカーを置いたりしていった。こういうことは普通、ボランティアがやるものらしい。なんで俺1人でやってるのかといえば、昨日ボランティアを募集したらしいのだが、なんと募集に來たのは0。支持率低下は相当深刻なようだった。

「つーか、なんで昂は嫌われてるんだ……バイオ研究所立てたり、移民融和政策したりと頑張ってるじゃん。まあランニングの日とかいうアホな法案作ったりしてるけど、結構良いことしてると思うんだけどな」

アンリはスピーカーを持って、俺の横に立った。

「国民にとって良い政策でも、国民自身がその政策を悪いものだと思ういこんだら支持率は下がってしまうですよ」

「どういう意味だ？」

アンリは口元に人差し指を立てた。

（静かにしてください）

昂の方を見るとすぐに演説が始まるようだった。

「あーあー まいくてすつ まいくてすつ……次の選挙私にいれなさい。その方があなたたちのためになることをこれから教えてあげる」

俺はつばをごくりとのんだ。

「アンリ、昂は何か秘策があるのか？」

アンリは腕を組んで考え込むしぐさをする。

「もう投票日1週間前です。この時期に何か新しいことはできないと思います……それより大統領がおかしなことをしないか不安です」

確かに、昂は感情に押し流されて失敗するタイプだと思うから、それは懸念されるな。

昂は胸を張ると、島中に響き渡るような大声で言った。

「私が受かったらそうね。1人当たり100ドルの給付金をあげるわ！それに島民全員が使えるリゾートホテルを海岸に作ってあげる。あとそうね……クルーザーで毎月近くの島をクルージングさせてあげる。さあ渡せるもんは渡したわよ。これで私に入れなきゃあんたたち馬鹿ね。大馬鹿ものよ！」

近くを通りかかった島民もぼかんと口を開けて固まっている。

俺も口をぽかんと開けて、ふさがらなかった。

アンリは持っていたスピーカーをガタンという音を立てて落とした。

「買収してるけど……いいのか」

「個人的な資金供与は法律違反ですが国民全体に与えるサービスは違法ではありません。ですが、ただ前にも言いましたが、こういった給付金などの施策は」

「支持率をあげない」

「はい……あ」

「どうした？」

「そ、そういえば、大統領閣下は演説を一回もしたことありませんでした……」

「え、ええ！」

「必要なかったですよ……前の選挙は大統領の急死でドタバタしていて、対立候補がろくに選挙活動できなかった。それで圧倒的有利な状況下で戦えたのですが必要がなかったんです」

「つまり……昂は演説全くの素人なのか？」

俺は頬から汗がたらりと垂れた。

昂はさらに衝撃的な発言を続ける。

「あと、前にリーマンどもがバイオ研究所を作るの反対したけどありえないわ。こっちは真面目にやってるわけ、あんたたち予算の使い方とかほんとわかってんの？予算の無駄遣いじゃなくて、これは投資なのよ投資。そんなことがわからないから、やすい給料で

経営者にこきつかわれてるのよ！」

数人のスーツ姿のサラリーマンが鬼のような目で昴を睨み付けていた。

「はあ？ 何この豚、何にらみつけてるわけえ？」

「ちよつと……投票してもらう島民の悪口はまずいんじゃない……」

アンリは頭を抱えていた。

「何よ、何も言わないの？ ふん。じゃあ続き話すわね」

昴はポケットからごそごそカンペを取り出す。

「あーあとなんだっけ……」

こいつ、演説文の暗記もしてねえ……アホ丸出しやん。

そこでサラリーマンがぼそつと言った。

「馬鹿じゃねえの」

昴はそのサラリーマンに向かって指を指す。

「馬鹿じゃないわよ。おたくらみたいになえ、あたし遊んでるわけじゃないの。わかる？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ 何か言いなさいよ」

サラリーマンはへつと笑うと背を向けて会場を去った。

周りにいた農民達もくすくす笑っていた。

「な、何よ……この愚民共！ あーそういう態度取るなら、ここで全員逮捕してやる！」

俺はびっくりした。

「ちよ……今の発言はいくらなんでもやばいだろ」

「もう演説は中止しましょう……これじゃ逆効果です」

会場は不穏な空気が漂っていた。

人々は無言になり、危険なことを口走る昴に明らかな敵意をむき出しにしている。

「あんたたち愚民が……」

アンリがスピーカーのコードを抜いた。

「あれ、声が……」

「ナイス！」

俺はダッシュで昴の元に行くと、口を押さえた。

「な、何すんのよ！ もがもが……」

「み、みなさん、これで今日はおしまいです。次の選挙は是非、ナカムラ・スバルに入れてくださいねー」

と俺がにこにこしながら言ったら、

「誰が入れるか糞が！」

「こんな最低な大統領だと思わなかった！」

「カーエレ！ カーエレ！」

ブーイングの嵐とともに本だのバナナだのが投げつけられる
そのうち、誰かが陶器を投げつけて、昴の頭に飛翔してきた。

「危ない！」

身を挺して、昴をかばう。

俺の頭に陶器がぶつかってこなごなに割れた。

「いつつ……」

俺は意識がもうろうとしてその場に頭から地面に倒れ込んでしま
った。

「直衛！ 大丈夫！ 直衛！」

「だ、大丈夫……うつ……」

目の前の景色がぐにやりと曲がる。昴の声が遠くから聞こえてい
るように感じて、頭が酷く重く感じた。

昴はぎりつと歯ぎしりをした。

「あ、あんたたち……絶対に許さない！ 絶対に逮捕してやるんだ
から！」

昴は胸元から拳銃を取り出して島民に向けようとする。

（やめろ……そんなことしたら、確実に次の選挙に落ちる）
しかし俺の体は動かなかった。

万事休すと思われたそのとき、アンリの手が昴の拳銃を抑えてい
た。

「大統領、冷静になってください」

「あんたっ……直衛をこんなふうにした連中を許していいと思って

るの」

「冷静になってください！」

「どきなさい！　ここでこいつら全部撃ち殺してやるんだから！」

アンリの手のひらが昴の頬を叩いた。

「えっ」

アンリは顔を伏せてこぶしを握りながら言った。

「ここで大統領が島民を撃ったら、直衛様がなんで倒れているのかわからないです。止めに入った直衛様の気持ちも少しはわかってください……大統領は他人の気持ちをあまりにも無視しすぎています。大統領は頭も良くて綺麗で、でもそれだけが欠点なんですよ」

その言葉を聞いても昴は拳銃から手を離そうとしなかった。

「私は直衛を傷つけた奴を許さない」

昴の血走る目と哀れむようなアンリの目が交差した。

アンリは仕方なく、昴の腕を背中に回して、拳銃を奪い取った。

「あなた、後で覚えてなさいよ」

その言葉にアンリは無表情で応えていた。

と、そこでざわめきが止まった。

人の波をかき分けるように、背の低い彼女がポニーテールをふわつさふわつさ動かしながら群衆の中から現れた。

「大統領閣下が島民のみなさんを敵に回してどうするんですか？」

フィアであった。

「フィア……」

「演説はもうしないよね？　これ以上続けたら暴動に発展しかねないし」

「何が言いたいのか？」

「ちょうどボクもここでやりたいなあと思ってたの」

「は？」

「みんな設営準備急いで、簡単なのでいいから10分で終わらせてね」

フィアが手を挙げると、ぞろぞろとTシャツ姿の男達が設営準備

をする。筋肉が隆々で昨日フィアがつけていたベレー帽を被っていることからおそらく軍人なのだろう。選挙ボランティアとしてコネを使ってかり出したのかもしれない。

旗は倒され、スピーカーはどかされて、演説台において、俺等の場所のすぐ前に彼らは会場をセツテングした。

「ちよつと、ふざけないで！ こんなこと許されるはずないわ！どこか違う場所でやりなさいよ！」

蒼い目を薄くのばして、フィアは昂を嘲笑した。そして、そこに刺さっているマイクを手に取った。

「ランフォード・フィアが当選した暁には先代のような無知蒙昧な政治をしない！」

フィアは拳を振り上げて人差し指をたてた。

「何故あなた方が今現在、依然と比べて過酷な生活を送っているのか。何故現在は過去より常に悪くなりつつづけているのか……あなた方は常に血と汗を使い努力をしている。しかし結果をだせない。それはあなた方自身が原因ではないのだ」

演説台をダンと叩いた。

「現大統領の政策が間違っているからである。その間違っている政策とは何か……」

フィアは胸の前で両手を交差させた。

会場はしゅんとしずまりかえった。誰も彼もがフィアの演説を聴きいていた。

昂の時とは全く違う。フィアの演説は全ての人間の心に訴えかけていた。

「それは【移民政策】である」

胸の前の両手をバツと広げる。

「フィリピンからの大量の移民があなたがたの仕事を奪い、その分賃金を低下させているのである。移民！ 問題は移民にある！」

昂はその言葉に驚きを隠せなかった。

「な……そんなわけ！」

昂の声はフィアの声にかき消された。

「彼らの数は今や増えるばかり、一体何人の人間が要職をフィリピン人に握られたのか、医者、官僚、看護婦、ウェイトレスから料理人に至るまで、フィリピン人は我々の職を奪いつづけている。しかしそれは彼らに実力があるからではない。彼らが努力した結果でもない。それは移民政策推進による政府の保護の結果なのだ。その象徴がああ……」

フィアは丘の上に立つコンクリート付き固められた元は学校である施設を指さした。

「バイオ研究所である！ 我々の血税で作られたあの機関はほとんどが外国人である。しかし彼らが作るものは、未だ1つとして役に立っていない。結局のところあれは我々の雇用を奪い、税金を吸い尽くすバキウム装置と化しているのだ」

昂は空いた口がふさがらなかった。

「馬鹿な！ 現在私の国では失業率は問題になっていない！ むしろ失業率は回復傾向にある。そもそも移民の数はフィリピンより隣国のイライアの島民からの方がおい！ バイオ研究所だって成果がでるのはもつと後なのよ！ すぐに結果がでるわけじゃないじゃない！」

しかしその言葉を発しても演説を聴いていた島民は昂に侮蔑の目を向けるだけだった。

「我々の生活を脅かす移民政策を断固として許してはならない。ノーモアフィリピーナ、ノーモアフィリピーナ、ノーモアフィリピーナ」

フィアは演説台に前屈みになり、拳を何度も振り上げた。

ボランティアの人間が同じように拳を振り上げて、ノーモアフィリピーナを繰り返す。

それにつられて島民達も拳を振り上げだした。

「ノーモアフィリピーナ！ ノーモアフィリピーナ！ ノーモアフィリピーナ！」

会場は異常な熱気に包まれた。彼らは汗を体中にびっしょりぬらしながらも、拳を振り上げることを止めなかった。

そしてこの観客の中にフィリピン人はいた。それは昨日のフィリピン人のウェイトレスだった。悪魔の巢に入り込んだように彼女は怯え、おそらく昼の食事であるお弁当を地面に落とした。彼女に危害を加える人間はいなかった。しかし怯える彼女を人々は充血した目で見つめ、彼女の周りに円を作り、見下し、今にも襲いかかって来そうな殺気をぶつけていた。彼女は怖くなって一目散にその場から消えてしまった。

彼らの拳にぴちちと水滴が落ちる。そのうち、それは滝へと変わった。

スコールである。スコールが彼らの体に流れ落ちていく。しかしそれでもこの熱気は収まらず、ノーマファイリピーナの声は止まらなかった。

「皆さん、スコールが降ってきたのでここまでにします。投票用紙には是非、ランフォード・フィアとお書きください。センキュー」
雨でぐっしょり濡れたフィアは自信満々に胸を張りながら、ボランティアの人間に撤収作業をさせた。

帰り道、わざと昴のそばを通るようにフィアは帰った。

「これが器の差ですよ」

昴は悔しくて悔しくて、その場で唇を噛んで首を垂れる。もう彼女を励ますものはいない。アンリはすでに俺をリムジンにおしこんで病院に連れて行くこうとしていたから。昴はしばらく雨に打たれながら真っ黒な空を見て呆然とその場に立っていた。

俺はもうろうとする意識の中、その昴に手をかけようと腕を昴の方へ伸ばしていた。それでも昴には届かず、ただただ俺自身の何の力も持たない無力さを改めて噛みしめていた。

この日ほど、俺が何の力も持たないただの高校生であることを呪った日は無かった。

神は何故、俺を凡人として生まれさせ、彼女と結婚させようと思

ったのだろうか。

俺が目を覚ますと朝だった。

「おはよう直衛」

すぐ側には昴がリンゴを剥きながらにこにこして座っていた。俺の頭には包帯が巻かれていた。俺は頭を抑えながら真っ白なベットから起きあがった。

「いつつ……あれからどうなった」

「どうでもいいじゃないそんなこと」

「どうでもいいわけあるか」

「寝てる間に精密検査したから、結局どこにも異常は無いって、ただの脳震盪らしいわ」

「いや……それはいいんだけどさ」

「いいったらいいの。さ、官邸に帰りましょ」

俺は納得いかなかったものの昴に手を引かれて、学ラン姿に着替えると、病室を出た。

真っ白な病院の玄関を抜けるところで、俺はあるものを見て、驚きで心臓がはちきれるかと思った。

ワシントンオラパが売店で売られていて、そこに大きく英語で大統領支持率【10%】という文字があるのがみえたのだ。

間違いない。何度もこの英語を読んだから間違えるはずがない。これじゃあ大統領選は絶望的だ。

「なあ、大統領支持率……」

「どうでもいいでしょそんなこと！」

昴は玄関の人間全てに聞こえるような大声で言った。

なんだか笑い声が聞こえるような気がした。

昨日の演説のせいかな？ いやそれともいままでのフィアのどぶ板選挙による影響が一気にでたのかもしれない。

俺は何も言えなくなつて、そのまま昴についていった。外に出るとジャングルを歩いていく。

もう歩いて30分になるだろうか。なんで車使わないんだろうと思った。

「なあなんで車使わないんだ？」

「そういう気分なの」

と言いつつも昴は息が切れている。汗だくになって、もう30分くらい歩くとその場に座り込んだ。

「ごめん休ませて……」

「アンリに言って車持ってきてもらおうぜ」

「……」

昴は何も言わず、じっと地面に歩いているアリを見ていた。

「なあ」

昴は俺の目を見て、少し半笑いになって言った。

「アンリはクビにしたから」

「え……？」

「アンリはクビ、私のこと叩いたし、それに病院であなたと一緒にいてそれで……私の直衛を奪おうと……」

「いや、何言ってるんだよ。俺、ずっと寝てたって、アンリとは何もしてないよ。お前どうしたんだよ」

昴の様子は明らかにおかしかった。目の焦点があっていない。それにぶるぶると震えていた。

「アンリは私の直衛を奪おうとしたの、だからクビにした。そう……」

「……」

「おい、正気になれって」

「だ、だってこのままだと私大統領じゃなくなっちゃう、そしたらどうなるの？ 想像できないよ、あのときアンリがもっと早く止めてくれれば支持率低下は避けられたかも。そうよ。アンリが！ アンリが悪いんだよ！ アンリがフィアに頼まれて私を毆にはめようとしたの！」

「いいかげんにしろ！」

昴は俺の言葉を聞くとびくつと震えが止まった。

「だって……だってだって、私は悪くないもん。全部悪いのはアンリだもん！ アンリだもん！ 私には何の責任もないもん！ 彼女が止めてくれなかったから！ 大統領じゃなくなったんだもん」
「お前の選挙とアンリは関係無いだろ！ とつとクビを取り消せ！」

「も、もう無理だよ。だって解雇してから再雇用の手続きは時間が掛かって、あと5日後の選挙日まで書類が通らないもん。そうなたら次の人が雇用するかどうか決めることになって私、そのときはどうせ大統領じゃ……ない……から……許可が降りない」

昂の襟首を掴んで、持ち上げた。

「ふざけんじゃねえ！ お前、自分が選挙に落ちた腹いせにアンリも道連れにしようつてのか！」

「ち、ちがうよ」

「違わねえよ！ この最低女！ ふざけんじゃねえ、アンリがどんな苦労して生活してるのか知ってるのかよ！」

「ほら、またアンリの肩もった……だからアンリは嫌いな」

「お前が……お前がそんな奴だとは思わなかったよ！」

「だって、だって、大統領じゃなくなつて直衛まで取られちゃつたらつて思うと仕方ないじゃん。う……うわああああああ」

昂はそこで膝を崩して枯れ葉の上でわんわん泣き出した。

俺は一瞥して、昂の元をさろつと歩き出す。10歩、20歩、30歩とどんどん進んでも、昂の泣き声はやまなかった。

いいんだ。あんなやつ。放っておけ。

歩いて5分ほどすると泣き声も聞こえなくなった。聞こえるのは鳥のせせらぎと、小川の水音だけ。

あいつ、こんなところで一人で官邸に帰れるのか？ そのまま迷子になつちゃうんじゃない。いやそもそも毒蛇とかにやられて本当に死んじゃうとか。

昂ならありえるかもしれない。

昂の首に毒蛇が巻き付き、死体となつた昂が脳裏に浮かんた。

「ああ、くそ！」

俺は来た道を走って戻った。

昂は泣き疲れていたようで、その場で木の棒でアリの巣をいじっていた。

「くすん、……直衛？ 帰ってきてくれたの？ よかったあ」

「帰ったら、すぐに再雇用の手続き取れ、あとはお前が選挙受かりやいい！」

「う……うん。わかったよ。そうすれば直衛はどこにもいかないよね？」

「行かねえよ」

「くすん」

昂は鼻水をすすった。

「だっこしてお家に帰らせて」

「え……」

「だっこ」

必死にせがむのでおれは昂を背中に背負ってやった。

「ありがとう……直衛はやっぱりお父さんみたいだ」

「そうかい」

複雑な気持ちだった。昂のやってることは無茶苦茶だ。自分が大統領に落ちそうになったからってアンリをクビにするなんて、とんでもないやつだ。でもこいつは放っておけないくらい子供っぽくて、1人じゃ生きていけるかもわからないくらい細かいやつだ。頼れるところもあるけれど、それと同じくらいダメな部分が多い。だから俺は昂と一緒にいる。俺が彼女をサポートしてやる。今回みたいに悪いことをしたら俺が修正してやる。

それが夫婦ってもんだろ。

それとも俺は、昂に冷たくしてやれない。単に優柔不断でダメな人間なだけなのだろうか。

「お父さんがいなくなっただけでずっと寂しくて、大統領でもみんなよそよそしくてひとりぼっちだったけど、直衛が来てからずっと楽しか

った」

「なあ、なんで俺を日本から連れてきたんだ？」

「イケメンだから」

俺はずっこけそうになった。

「酷い理由だな」

「言い換えると一目惚れ。空港の帰り道にあなたを見つけたの。お父さんそっくりのあなた。あなたなら、ずっと一緒にいてもいいなと思ったの」

「ファザコン」

「ち、ちがうよ」

「そうかい」

そのうち昂は何も喋らなくなった。

背中ですーすー吐息を立てて彼女は眠っていた。

俺は甘すぎるのかもかもしれない。アンリをクビにした昂にはもっと厳しい対応をしなくちゃならなかったのかもしれない。だけど、昂から今俺がいなくなったら、彼女が壊れてしまうように感じた。憎悪と愛おしさの板挟みに合いながら俺は大統領官邸についた。

そしてすぐにアンリの再雇用手続きを取った。

しかしそれからアンリが大統領官邸に姿を現す事はなかった。

「今日もアンリを探しに行くの？」

「ああ」

「でも再雇用手続きは間に合わないよ。意味無いよ」

「間に合わなくてもこのまま別れることはできない……そんなの後味悪すぎるだろ」

「そう……」

昂は不服そうだったが、俺は無視して、アンリの家に行った。

途中でスクールが降ってきた。傘を持ってくればよかったと、俺は後悔してびしょぬれになりながらもジャングルの道を駆けていった。アンリの家のは近くはいつも通り汚くて、そこら中に食べ残した

魚の死骸や果物が散乱していた。

アンリの家についたときには、未だ空は雲でかげっていたものの雨はやんでいた。

アンリは家の外でリュックを背負っていた。

俺の姿に気づくとアンリは顔を下げて見ないようにして、俺の傍を駆け足で通りすぎようとする。

「アンリ、ちょっと待ってくれ」

俺の背中 of 辺りでぴたりと足を止めた。

「なんですか……」

俺はポケットから現金を出し、両手に一杯の10ドル札を握る。

そして深呼吸して、俺はアンリの方へ振り向いた。

「前に借りたお金返してなかったろ」

「どうしたんですかこれ……」

「昂に作ってもらったクレジットカードを使って、空港前のハワイ銀行からATMでおろした」

「私がお貸したお金よりずいぶん多いんですが……」

「これから色々大変だろ。だから少しでも足しになればいいかなと思っ

アンリはキツと髪の毛の間から俺を睨み付けた。

「同情ならよしてください。それじゃ私が乞食みたいじゃないですか。こんなめぐんでもらうみたいなことできません」

「ど、同情じゃねえよ!」

「嘘」

「アンリが、アンリが好きだから、大変な目に遭って欲しくねえって思っただんだよ!」

「好き……」

アンリは俯いていた顔を上げて、髪の毛をかき分けて、俺に目を見せた。ぴちゃりと俺の髪の毛の雫がアンリの頬に当たり、白い頬から白い首元にかけてすると落ちていく。

「同情だっと思うなら、次に会う時返してくれりゃいい。アンリ

ならすぐ別の仕事につけるって、なんてったって東大でてるんだからよ」

「ははは……それは嘘ですよ」

「だから嘘じゃねえって」

アンリは消え入るような声で言った。

「東大に入ったなんて嘘ですよ……入れるわけないじゃないですか
私が」

「え……」

「奨学金を使って、3年かけて、東京に行っただんですけど、結局受からなかったんです。他の国立大学もね」

「そんな嘘だろ。色んな事知ってアンリ頭良いんだから」

「買いかぶりすぎです。所詮、リリユの片田舎出身の小娘なんていくら夢を持ってもこの程度なんです。これが私の分ですよ。まあ間違っただけに受かったとしてもこの国で私が入る職はメイドしかなかったのかもしれませんが……でもそれも無くなってしまった。私にはもう……何もありません」

空笑いしながらアンリの目から涙が流れていた。

アンリはそれから俺に抱きついた。

「しばらくこのままでいさせてください……現実はいくらに厳しすぎます」

俺の胸の中でアンリは嗚咽した。俺はただ彼女の髪を、なで続けることしかできなかった。その内、雲間から太陽が現れた。

「さようなら」

俺たちは別れた。

その後、アンリが大統領官邸に姿を現す事はなかった。あのバラツクの家からもいなくなった。結局何の力もコネも持たない俺にはアンリを救ってやることはできなかった。アンリは俺からもらったわずかなお金でその後どうしているんだろうか。己自身の無力さに選挙当日まで俺はしばらく無気力感に襲われた。

そして選挙日当日が訪れた。

第十三回大統領選挙は投票率80%超の活気ある選挙であった。

【ランフォード・フィア】 11316票

【ナカムラ・スバル】 5505票

ランフォード・フィアが現職ナカムラ・スバルを2倍近い圧倒的多数の得票差で破り、当選を果たした。

もしも高校生の俺が落選した大統領と仕事を探したら

俺たちは大統領室で荷物をまとめていた。

ノートパソコンと洋服類をまとめて、後はワシントンオラパや持っている本類をヒモでしばっていく。

「この絨毯とか調度類はもっていかないのか？」

「それは公費で買ったものだから私のものじゃないの。私費で買ったものは本とか洋服とかそれくらいね」

昂は泣きもせず笑いもせず無表情でもくもくと梱包作業を続けている。

結局持つて行けるものは、意外に少なくリュックサック2つつ分だった。

「これからどうする？」

「さあ……とりあえず銀行に行ってお金をおろして、どこかのアパートに住むわ。仕事探しはそれからね……でも」

「なんだ？」

「直衛はいいの？ 無理矢理連れてきちゃったから……私が大統領じゃなくなったら、もう日本に帰っちゃうんじゃない？」

昂は心細そうにもじもじと両手の指をからめていた。

「大丈夫だよ。どっかに行ったりしねえって」

昂は頬を真っ赤にして笑った。

「あ、ありがとう直衛」

その時、ドアがボタンという音を立てて開いた。

そこには両腕を組んで、仁王立ちするフィアの姿があった。

「いやあ一般市民のお二人お熱いですねえ」

フィアは嫌みったらしく一般市民を強調して、高笑いをした。

「ささ、早く出て行ってくださいここは私の部屋ですよ」

手を振って出て行くジェスチャーをする。

昂は嫌そうな顔をした。

「言われなくても出て行くわよ」

「あーそこそこ、そこにある調度類はどかして私の勲章とカリフォルニア州ライフル選手権の優勝トロフィー置いて、そのベッドはでかすぎて邪魔だから捨てちゃって新しいのにしましょう。お金は気にしないでどうせ公費で出るんだから」

部屋に置かれたものは全てのけられて、ゴミのように部屋の隅に山になった。昂はそれ感慨深そうに見つめて、ぷいっと背中を向いた。

「行きましょう」

「そうだな」

俺たちはリュックサックを背負った。

その時、フィアは笑いながら、不穏なことを言った。

「あなたたちはもうどこにも住む場所なんてないのに」

「は？」

「なんでもないよっ」

フィアはウィンクをした。

俺は不思議に思いながら、大統領室を後にした。

銀行の窓口につくと、昂は行員に声をかけた。

「とりあえず１０００ドル、半分は１ドル紙幣で、もう半分は１０ドル紙幣にしてね。お金が集まったら、ステートメントに残高を記帳して渡して頂戴」

海外に銀行手帳はほとんどの場合、存在しない。代わりにステートメントと言われる入出金記録が１ヶ月に一度郵送される。毎日残高を確認したい場合、インターネットで見えることもできる。

銀行のロビーは大理石で作られ、天空にはシャンデリアが飾られ、床に真っ赤な絨毯が敷かれていかにも高級感を漂わせていた。

ソファアーに座って待っていると女性の銀行員に呼ばれた。

俺たちはそそくさと窓口の前のイスに座った。

しかし銀行員は手ぶらで紙幣を一枚も持っていない。どうしたのかと思った。

「残高はありません」

「は？」

「預金封鎖されました」

昂は呆然とした。

「な、何を言ってるの？」

その銀行員はかけていた眼鏡をくいつとなおした。

「元大統領閣下、どうやら知らないようですが……【親比派財産没収法】により、あなたの財産は凍結され、国庫に納入されることになりました」

「親比派財産没収法……何よそれ。何言ってるのよあなた！ 私の財産をどうしようが私の勝手でしょ誰の許可があつて！」

「現大統領フィア様が、就任当日に反移民政策の一環として、親比派の財産を没収しようという法案を大統領閣議決定しました。議会は騒然としたものの、過半数の得票を得て法案は可決されました。そして同法案によって設立された【特別警察委員会】による捜査の結果、親比派と判明したあなたの財産が没収されたのです」

特別警察委員会

後にわかったことだが、特別警察委員会とは親比派財産没収法によって制定された独自に捜査、逮捕、及び法の執行ができる外部警察機関である。反国家的行為を行ったものを選定し、その財産を国家に帰属するかの是非を決定できる。

「そ、そんなめちゃくちや通るわけないじゃない！ 財産権の侵害よ！」

「あなただって、法律を盾にめちゃくちなものを制定してきたじゃないですか。ランニングの日とか」

「それとこれとは話のレベルが違うわよ！」

俺はあまりの出来事に一言も話すことができなかった。法律でこんな簡単に人の人生を狂わせることができるなんて思わなかった。

何個も0が並ぶステートメントが突然1つの0になるというだけの現象、それがあまりにも非実在的で現実に起こったこととは思えなかったからかもしれない。

そういえばこんな話を聞いたことがある。

韓国では親日反民族行為者財産の国家帰属に関する特別法いわゆる【親日派財産没収法】というものが盧武鉉大統領の下に制定された。2010年までこの法令により戦前に日本人に協力したとして168人について、その子孫から、相続した土地など約13平方キロ、計2373億ウォン（約170億円）を没収した。

これはWW2のナチス時代に作られた法案ではない。21世紀に作られた法案である。この法案は明らかに憲法の遡及法（事件実行時よりも後に作られた法律をその事件に適用することを禁止すること）に抵触し、明らかな違憲法案であるが、現実に実行されている。結局のところ、民主主義の名の下に多数決でもって過半数を得た法案というのは如何に憲法に違反されようと実行されるのである。一時の国民の熱狂が憲法の根幹を破壊する可能性が常に存在することをこの法案は物語っている。

「ふにやあああああああ！」

昴は猫の真似をして、デスクの上に乗って銀行員に無茶苦茶怒った。

ちよつと意味がわからない。

そんなことをしていると、警備員が現れる。両手を捕まれてETのような状態になる昴。

「絶対でてかないんだからね！ 金返せ！」

じたばた暴れる昴、俺はどうしようかとあたふたしていると1人のグラサンをかけて筋肉隆々の男が現れた。

ヒヤマである。

「あんた！ ここに再就職してたの！」

「……」

「キタ！ メイン警備員キタ！ これでかつる！ 助けてー 助け

て」

ヒヤマは何も言わず昴と俺を掴んで、外に放り出した。

「な、なにすんのよ！ あんたのご主人様の顔忘れたの！」

ヒヤマは歯を見せて、親指を下に向けた。

「ガツデム、俺は金で雇われてただけだ。金が無くなっても主人面するんじゃない」

「え……だってヒヤマはお父様のときから代々仕えていたじゃない」
「それは給料が良かったからだ。俺がお前のような小娘に心酔しているとも思ったのか？」

昴は瞳孔を一瞬開かせて、驚いた。

「ふ、ふん。いいわよ！ 後で覚えてなさいよ！」

昴はぶんすか胸を張って怒りながら、俺を引っ張って銀行を去った。

「こっからどうすんだよ」

ぐ

昴のお腹が鳴った。

「とりあえずレストランで食事をするわ！」

「お金は？」

「まだ財布にあるわよ」

「いやでもお金は貴重じゃないか」
ぐ

「やだゝ食べるゝお腹すいたゝ食べるのゝ」

昴はリュックを背中にして、振り子のように腕をじたばたしてだをこねていた。

「お前って本当子供みたいだよな。同い年に見えねえ」

「はあ？ 直衛なんて大嫌い！」

昴のぐーぱんちで俺はヤシの木にたたき付けられた。

その後、俺たちはレストランでウエカブを食べた。

昂が支払いをしようと財布に手を入れた。俺は後ろから財布をのぞき込む。そこには10ドル紙幣2枚しか入っていないかった。

「言わんこっちゃない……」

「う、うっさい！ いいのよ！ 計画通りなんだから」

「何が計画通りなんだよ……」

「うっさい！ うっさい！ じゃあ直衛が出しなさいよ。前にクレジットカード渡したでしょ」

「ごめん預金全部つかっちゃった。もう使えねえ」

「はあ？ 何よあんただって浪費家じゃない！」

「消費税込みで20ドル50セントになります」

「げ、何その端数！」

スツカラカンになった財布を振って50セント硬貨が手のひらに落ちた。もう硬貨もすっからかんだ。

「「せーふ」」

二人で腕を開いてセーフのジェスチャーをした。

店の外に出ると、ヤシの木の先に見える海の上に橙色の夕日が落ちかけていた。

「今日の宿どうしよう……」

「とりあえず、アンリの家に行こう」

「え……アンリ」

追い出したアンリと会うのが気まずいのかもしれない。

「アンリはもういないから、仕事探すためにもっと中心街の近くへ移ったらしい」

「それ本当だよね？」

「俺が嘘言うと思ってるのかよ」

「うん。じゃあ行く」

別の宿を探すまでに一時的に借りよう。アンリも怒ったりしないだろ…… たぶん。

バラック通りの道を進んでいく。

「なにここ……」

昴は不安そうに俺に肩をつけてぴたりと寄り添っている。

「アンリの家知らなかったのか？」

「え……もしかしてアンリってここに住んでたの？」

「そうだよ」

「あたし……悪いことしちゃったかな」

「今頃気づいたのか？」

「……」

昴には珍しく何の反論もなかった。

もう辺りはすっかり真っ暗である。携帯の明かりを頼りにアンリの家についた。

家につくとすぐ携帯の電源を切った。これからライト代わりにどこかで使うかもしれない。

1週間ほど放置してたせいか、雨足に当てられてさらに汚くなっている気がする。ボロボロで今にも朽ち果てそうだった。

昴はびっくりして声もでないようだった。

「中に入るぞ」

「え……ここに入って住めるの？」

中に入って昴はキョロキョロ中を眺めた。

「ベットが無いじゃん。やっぱり、アンリが住んでたんじゃないよ。ベットが無かったら人が寝るとこないじゃん」

俺は部屋の隅っこにある真っ黒に汚れた毛布を指さした。

「毛布があるじゃん」

「え、でもあれじゃすごく寒いから寝られないよ」

「ここは南国だから大丈夫だよ」

「え……本当に寝る気？」

「当たり前だよ」

「い、いやよ！ いやいやいや！ ふかふかの羽毛布団のベットじゃないと寝られない！」

俺は呆れて肩をすくめた。まだこのお嬢様は状況がわかっていな

いようだった。しかし、ここまでお嬢様のテンプレを見せられるとは……あんなもん小説の中だけの人間だと思ったぜ。なんかどこかですごいつつこみの嵐があつたような気がする。

「まあ住めば都よ。俺だつて子供の頃は布団で」

「うにゃああああああああああ」

と、昴が俺に抱きついてきた。

「ど、どうした？」

「ネネネネズミが」

「あーいるだろうな」

「ネズミがゴキブリ食ってる」

俺は驚いて携帯の光で部屋を照らした。

玄関先で頭の無くなったゴキブリをネズミがカジカジしているのが見えた。

ちよつと俺もここで寝るのが嫌になった。

1つの布団に二人でくるむ。

昴はこの布団一枚じゃ暑いだろうと言ってたが

「直衛、ものすごく暑い」

南国の暑さを舐めていた。このオラパ国、赤道直下なのである。二人で1つの布団にくるまっているともものすごい汗が体中から出てきた。昴は一日中クーラーのついてる部屋で過ごしていたから寒くなると思つたのだろう。

「全部脱いじゃお」

昴は着ていたブルゾンを脱いで、下着一枚になる。さらにブラジャーのホックに手をかけた。

「ちよおおおおおお すとおおおおおおおおおぶ」

「えい」

ブラジャーを脱いで、さらにパンティまで脱いだ。

俺は目を瞑って見ないようにした。

「直衛も脱ごうよ」

昴はにっこりとした笑顔で星空を眺めていた。

「そうか。じゃあ寝るか」

「直衛」第一ラウンド」

「そうか。じゃあ寝るか」

「直衛」第一ラウンド」

「そうか。じゃあ寝るか」

俺は昴を無視して、布団の中でうつぶせになって寝た。

チュンチュン

こんな島にも雀がいるんだろうか？

翌朝、俺と昴は裸で抱き合っていた。

「……」

俺は無言で学生服に着替えて、外に出る。

「どこいくの？」

「仕事探しに行く」

「そうだね。じゃああたしも一緒に行くよ」

「ハローワークとかあるのか？」

「そんなのないよ。一件一件雇ってくださいって回るしかないね」

「じゃあ二手に分かれて探しに行こうか」

「やだ。直衛と一緒に探す」

昴は俺の体に抱きついた。

「お前な……その方が効率的だろ。女を必要とする職場と男を必要とする職場は違うんだから」

「私はできるだけ直衛と一緒にいたいのに！」

「なんでだよ。これからいつでも会えるだろ」

昴は不服そうに顔を歪めたが、少し考え込むとうんと頷いた。

なんだか、昴は一層、子供みたいに俺に依存しだしてないか？
こいつは元々そんな奴じゃなかった気がするんだが……大統領の支持率が急落してからずっとこんな感じになっている。何か、心境の変化でもあったのだろうか。

「お願いします！」

「あーいやまあ足りてるからねえ」

ホワイトジュエリーレストランで雇ってくれるようお願いする。

これで5件目だ。やはりこの不景気のご時世にはなかなか雇ってくれない。

店主は困ったように頭を掻いた。

「まあ、元大統領閣下の親父さんとも交流があって、断るのは気が引けるんだけどさ……正直、アレがあったから、もし雇って私らが親比派のレッテル張られたらと思うと」

アレとは親比派財産没収法のことだろう。確かに店主の気持ちもわかる。もし親比派となったら、店も今まで作った財産も全て取られてしまうのだ。一時の親切心のために今までの半生を台無しになど冷静に考えたらできないだろう。

「ノーモアフィリピーナ ノーモアフィリピーナ」

店内でも数人の高校生くらいの女がラジオ片手に叫んでいた。選挙結果がでてから、島の雰囲気は異様になっていた。まるで閉じこめられたような閉塞感と、住民達の殺気だった目線が見える。おそらく、自分たちが法の正義の名の下に、住民それぞれが親比派の活動をしている人間を探そうとお互いがお互いに監視をしているためだろう。昂が統治していたころに比べてずいぶん息苦しい島になったと思う。

「全く若者はすぐ時流に影響されて、考え方をころつと変えるから、ああいう醜いことを平気でするんだよね。異民族排斥なんてとんでもないよ。うちのウェイトレスがどんだけ酷い目にあったか」

「あなたみたいな人ばかりだったら良かったんですが」

「まあ島内の会報渡すよ。ここにかなり求人が載ってるから役に立つと思う。今はこれくらいしかできないけど、がんばってね」

「ありがとうございます……」

俺は会報を受け取るとその店を後にした。

それからその会報を元に何軒か回ったが結局1つも雇ってくれるところは無かった。

「ああ？　うちは募集してないよ！」

「この不景気に雇うわけないだろ……しかも外国人なんてな！」

夕日が海の上にあつて、その上でカモメが鳴いていた。帰り道、学校の近くで日本の童謡が聞こえていた。この島は昔は日本領だったから未だに学校で日本の童謡を教えている。

夕焼け小焼けの　赤とんぼ

おわれて　見たのは

いつの日か

山の畑の　桑の実を

小かごに摘んだは

まぼろしか

十五でねえやは　嫁に行き

お里の　便りも

絶え果てた

夕焼け小焼けの　赤とんぼ

とまっているよ

竿の先

俺はちよつと懐かしくなつて、そして寂しくなつた。涙は流さない。それは自分自身にとつても負けを認めるみたいで嫌だったからだ。俺の心が折れたら、一体誰が昴のことを助けてやれるんだ。俺はつばを飲み込んで、必死で涙を流すのを止めた。

「も、もうダメだ直衛……あ、後のことは頼む……ばた」

毛布にくるまって芋虫のようになりながら昴は玄関で俺に手を伸ばして倒れた。

「何やってんの」

昴はぱつと明るい笑顔になった。

「そこは大丈夫か、昴！ 昴！ すばるうつうつうつと私の名前叫ぶ場面よ」

「そうすか」

「あーあたし全然だめだった」

「俺も」

「なんかあたしの顔見るとみんななくなっちゃうのよね。ついこの前までは私が通るとへらへら笑ってたのに、何よ」

それはたぶん親比派だと思われたくないからだろ。昴に近づいたらそれこそ親比派のレッテルを張られる。

「今日１日飯食ってないよな」

「あ、うん。でも１日くらい大丈夫だよ」

「珍しいな」

「どういう意味？」

「いやいつもならぎゃあぎゃあわめくと思った」

「私はそんなにわがままだと思ったわけ！」

俺の顔を爪でひつかかれた。痛い。

その日、また二人一緒に布団にくるまって寝た。

だがその日はいつもと違っていた。

夜中に目が覚めると、隣で昴が震えていた。

寒かったわけではない。その証拠に、昴の肌からは汗がしたたりおちていた。昴の目からは涙が流れていた。

「おい、どうした！」

直衛は昴の体を揺さぶって昴は目を開けた。

「ふ、ふえ……直衛」

「怖い夢でもみたのか」

「夢っていうか、ちよつとこれからのことが不安になってきちゃつて、みんな私が大統領じゃなくなったら離れていっちゃったから。みんな大統領だった私しか見てなかったんだなって思ったら、急に怖くなった。ずっと私は1人ぼっちだったんだなって」

「大丈夫だよ。すぐ昔みたいに暮らせるようになるよ。ご飯だつて、アジの開き定食を食べられて、仕事だつて見つかつて、みんな仲良
く」

「ねえ、直衛はその時一緒にいるよね？」

「いるにきまつてるだろ！どこにも行かねえよ！」

昴は子猫のような目で俺を見つめていた。俺は昴を抱きしめたが、彼女の震えは簡単にはなくならなかった。俺が昴を守ってやらなければならぬ。俺は窓から見える満天の星空の下、そう決心した。

翌日、昴はあまり眠れなかったからか、目に隈ができていた。

「じゃあ行ってくるわ」

「うん。がんばって」

さて、どうしたものか。さすがにそろそろ仕事を見つけないとヤバイ。飯なしで2日以上暮らすのは体力的にもたない。ただでさえ暑くて体力消耗が激しい島だしな。

つつてもこんなもんひたすら回るしかねえんだけどさ。

結局、その日は昼頃まで就職先を回ったが全滅だった。俺は教会前のベンチに座りながら、どうしようかと途方に暮れていた。

ガシャンと俺のベンチがゆれた。

「うにゃあ！なんだこの糞島は！」

頭に花をのつけて、白衣をきたあいつがベンチを蹴っていた。

「プリシス、お前、いつもイライラしてんのな」

「ああ！」

プリシスはすり下がつていた眼鏡をくいつとあげて俺を見る。

「あんだ、前大統領の夫じゃん」

「そうだよ」

「ちよつと、助けてよ!」

「どうした? 予算減らされたとか?」

プリシスはぎくつと体を斜め後ろに仰け反った。

「よ……よくわかったわね」

「そりゃ、お前、変な眼鏡作ったりとかろくな使い方してねえじゃん」

「毎年300万ドルの研究費が今年は10万ドルまで減らされたのよ! これじゃ実験装置だって買えやしないわ!」

「300万ドルつてえと2・4億か。すげえな。俺からは遠い世界の話だわ」

「で、むかついたから、こんな島出てこうと思ったの」

「は? 就職先あんのかよ。今のご時世、研究職はいっぱいだよ」

「いやまあそうだけど……だ、大丈夫よ。あ、あたしは、て、天才だから……ダイジョウブダイジョウブ」

唇を振るわせて、むちゃくちゃ動揺した様子で言われても説得力皆無なんだけどな。

「で、出国手続きしようとしたら、ビザ降らないの」

「え? なんで?」

「外国人の入出国が法律で禁止されたのよ!」

「は、はあ? で、でもこの国、観光業してるだろ?」

「観光ビザはオーケーで就労ビザ取ってる人は入国も出国もできないようにしたらしいのよ。ふざけんなって感じよ。これじゃこの島、でっかい牢獄じゃない!」

「なんでそんなことを……」

「はじめはフィリピン人のこれ以上の流入を抑えるために入国者数を減らすために法律を作ろうとしたらしいんだけど、そうしたら、まず間違いなくフィリピン人が他の国にいくか自国に帰っちゃうでしょ? 迫害されている国に長くいたいとは思わないから。で、そのとき、レストランとかの労働力が不足して経済は大混乱になる。」

それを防ぐために現在入国している外国人は全て出国不能にしたわけ」

「なんだそれ、行き当たりばつたりで先のことなんか一切考えてねえじゃねえか。そんな法律長いこともつわけないぞ」

「反移民政策で政権取ったから後に引けなくなっちゃったんじゃないの？」

「フィアはこの島を一体どうしようとしてるんだ」

「それよりさ、あんたも前大統領の夫でしょ？　なんとかコネ使って私をこの島から脱出させてくれない？」

「いや、無理だよ。親比派として目の敵にされて、就職もできない有り様なんだぜ？」

[illegible]

「うるせえ」

「あーあ、あんたに頼ろうと思った私が馬鹿だった。あの糞せつまい研究室で寝てくるわ」

「真面目にやったら予算増やしてくれるんじゃないのか？ あいつらだってそれくらいの理性は残ってるだろ」

プリシスははんと鼻で笑った。

「いい？ 研究費を取るのは良い研究結果を出したものじゃないの。政治力がある人間が研究費をたくさん取れるのよ。覚えときなさい。世の中ね。実力がある人間がその実力通り評価されることなんてないのよ」

プリシスの言うことは本当かもしれない。あの眼鏡は並の研究者じゃ作れないだろう。それなのにこんな辺境の島に追いやられるということは結局、若いから就職先が無かったとか、学内政治で失敗して大学につまはじきにされたとかそういうことかもしれない。人の評価というのは仕草や態度、または偏見によって作られ、実力とは評価において非常に寡少に見積もられるのだ。

「つうかだったらよ。 昂に申し訳ないと思わないのかよ。 あいつは

お前をきちんと評価して予算をたんまり与えて研究させてたんだろ？ それなのにお前は趣味の研究ばかりやってさ。全然、昴がやってほしい商業利用のための研究やらなかったじゃないか」

「……すこしは悪かったと思ってるよ」

「じゃあ今からでも商業利用のために働けよ。あいつ大統領じゃないけどさ。それが島民のためにもなる」

「……ふん。誰がこの島の人間のためにやるもんですか」

「おい」

プリシスはぷいっと背中を向いてどっかに歩いていった。

人間は自分の利益のためにしか働かないんですよ。

あの俺が好きだったメイドさんの言葉を思い出した。

あいつも今はどこで何やってんだろうか……仕事は見つかったのか？ 今もどこかで苦しんでるんじゃないのか？ それとももうどこかで働いているんだろうか。

……いや今は他人の心配などより自分の心配をしなくちゃならない。

俺は休憩を終えると街中へ行って仕事探しの続きをし始めた。

だが結局、この日も仕事は見つからなかった。

家に帰ると、にこにこしながら昴がちゃぶ台の前で座っていた。ちゃぶ台の上には野菜が入ったスープのようなものがあつた。

「どうしたんだこれ？」

「よもぎとノビルっていう野草だよ。昼から夕方の方にジャングルで取ってきたの。ごめんね。私、仕事見つからなかったから」

「いや、謝らなくていいよ。俺も仕事みつからなかったしな。それよりすげえな。こういう知識もあるんだな」

「うん。食べて」

昴はにこにこしてそのあくが浮いた緑色のスープを俺に渡した。俺は無茶苦茶、腹が減っていたので、そのスープにがつついた。みるみるうちにスープが無くなっていく。

と、半分くらい食べた後気づいた。そーいや、昴はなんで食べないんだ？ この1皿しかないみたいだけど……もう先に食べてたのかな。

「昴はもうこのスープ食べたの？」

「食べてないよ」

「は？ じゃあこれ残ったの食べないと……」

「直衛が全部食べていいよ」

「いやいやいや、何言ってるんだよ。自分で取ってきたんだから、自分がまっさきに食べるべきだろ。何にもしてない俺だけ食べるなんてありえない」

「いいんだよ。全部食べて」

「だめだって、お前ふらふらじゃん」

昴の頬はこけていて、目つきもぼおっとしている。どう考えても栄養失調を引き起こしている。

俺はもっていた皿を昴に突きつけた。

「お願いだから、食べて」

昴は下を向いて、ぎゅっと自分の服を掴んでつらそうにしていた。

「どうしたんだお前……」

「じゃ、じゃあ今から布団に入って寝ようよ！ 夫婦なのに一度も……そういうことしてないじゃない」

昴は俺の手を胸元に入れた。ただ、いつもと違って、その目は怯えるようだった。あきらかに様子がおかしい。

「おい！」

「えっぐ……」

昴は突然泣き出した。俺は驚いて、昴の肩に手を置いた。

「おい、なんかあったのか！」

「今日、レストランで仕事ないか聞いてから、その後、町を歩いてたら、卵投げつけられて……外国人を呼び込んだお前がなんでこの国にいるんだって……早く出て行って、お父さんの昔の友達の島民の人とか、私が洋服を買っていたブティックの女の人とか色んな人

に取り囲まれて、色んなこと言われて……だから、私、怖くなつて仕事探すの昼に止めてずっとジャングルの中に隠れてたの」

「な……んだ……って」

信じられない。元大統領だろ？ 選挙から落ちて、普通の人になつたからってそんなことまでするのか？ 昂はお前等にそんな酷いことをしたのか？ 昔の政策を支持しないからって、囲んで罵倒するとか、そんなイジメみたいなことしていいって言うのか？

「みんな、大統領の時はあんなに私ににこにこしてたのに、私が大統領じゃなくなったら、私に酷いことするようになった、大統領の私と仲良くして、自分の利益を増やそうとするために私に親しくしてたってことだよ。人間って怖い……直衛だって人間だから、私と一緒にいて利益が無くなったらあの人達みたいに離れて言っちゃうんじゃないの？」

「馬鹿野郎！ 俺がお前の前からいなくなるわけねえだろ！」

「そ、そうだよ。ごめん……ごめんなさい」

昂は頭を何度も下げていた。昔の自信満々で傲岸不遜な昂はどこいったんだよ。そんなぺこぺこ頭下げる昂は、大統領の時のお前はそんなことしなかっただろ。環境が変わっただけで人間はこんな風になっちまうのかよ。

「もう、食ってね。今日のことは忘れてさ」

「う……うん」

昂は皿に残ったスープを食べると疲れていたのかすぐ眠っていた。俺の胸の中ですうすう寝息を立てるのはただの未成年の年相応の女の子にしか見えなかった。

もしも高校生の俺が再びメイドと会ったら

翌日

「今日はお前、行かなくていいから。俺が意地でも仕事みつけてやる」

「うん……」

昴は髪をぼさばさになってもそれを気にせず、毛布にくるまっていた。

玄関から出る時、メイド服が視界の隅に入った。

「おはようございます直衛様」

懐かしい声がした。驚いて横を振り向くとそこには、笑顔のアナリが壁に寄りかかって立っていた。

アナリはいつものメイド服だったが首には真珠のネックレス、顔には紅い口紅をつけ、綺麗に整えられたストレートの髪の毛をしていた。昔のような暗いイメージは無く、むしろどこかのセレブのような明るさを感じさせる。

「お前、アナリなのか？」

「え？ アナリ？」

もともと布団にくるまったまま、昴は心配そうな顔つきで顔を出した。

アナリは笑顔のまま昴の方を振り向いた。

「お久しぶりです、大統領閣下」

「あの私はもう……大統領じゃなくて」

「世間の人間がどのような評価を下そうと、私の中であなた様は未だに大統領です」

「やった、アナリだけは変わってなかったんだね！」

昴はすっぱだかのまんま、アナリに抱きついた。

「げえ！ 周りの人間気にしろよ！」

俺は慌てて、着ていた学ランを昂にかけた。

周りを見る……あぶねえ、誰もいねえ……俺の昂の体を誰かに見られたら困るぜ。

「アンリだけだよ、私が大統領になっても前と同じように接してくれたのは！」

「そうですか……大変でしたね。でももう大丈夫ですよ」

「大丈夫って何だ？」

「ええ、お二方が就職活動に奔走していると耳にしまして、お仕事をご紹介しようと思ってここに参りました」

「え……まじで？」

「マジデ？」

昂はうれしそうにピョンピョン跳ねる。

「アンリは就職先見つかったのか？」

「はい。とあるところの秘書を務めさせていただくことになりました」

「良かったじゃん。アンリ」

俺はバンバンとアンリの背中を叩いた。

アンリは恥ずかしそうに目を伏せる。

「それで、その重役に掛け合ったところ、男性1人だけなら雇って給料を出してくださると了承してもらいました。さすがに2人は無理でしたけど」

「いいよー直衛行つてきなさい！」

昂はキャツキャツと騒いで、ビシツと俺に向かって敬礼した。

しかしその話を聞いて俺は不安になった。

「その人、俺が大統領の夫だと知ってるのか？」

「はい？」

「いや、ずっと大統領の夫だからって断られたんだ。俺を雇ったら親比派だと思われるからって」

「ああそのことですか、大丈夫ですよ。直衛様のことは事前に話していますから、その重役さんは親比派と言われることなんて気にし

てないようでしたよ」

「そうか、それは良かった」

「じゃあ、直衛様行きましょうか」

俺はアンリの背中についていく。

昂は手を振って俺たちの後ろを見送っていた。

タクシーに乗って俺たちは外国人観光客が泊まるような高級ホテルについた。

「1101号室の村井アンリ」

「かしこまりました」

キーをカウンターからもらって、エレベーターに乗る。

あれ？

なんで高級ホテルに連れてきたんだ？ 面接なら職場でやるのが普通だろう。それともその重役は仕事かそれとも休養でこのホテルにいるんだろうか？ だが、それならなんでアンリは自分の名前で部屋を取ってあるんだろうか。普通は会社の名前か、その重役本人の名前で部屋を取るだろう、わざわざアンリの部屋にその重役がいる理由がわからない。

チン

エレベーターが止まった。

「どうぞ」

アンリに先導されて、1101号室に入る。そこはまるで別世界であった。大きな海水魚の入った水槽。52型の大型テレビ、スランバーランドの英国御用達のベッド、また銀食器や高級家具がひしめき合っていた。窓からはオラパ島全体が見え、さらにここは西側なのでおそらく夕方になれば素晴らしい夕日が見えるだろう。

「すごいな」

「それほどではありません」

「それで重役はいつ来るんだ？」

アンリはぼかんと口を開けて、思い出したように手を叩いた。

「ああ、そんな話でしたね」

アンリは満面の笑みになった。

「さっきの全部嘘です」

「……………は？」

アンリはえへへと照れくさそうに顔を赤らめた。

「直衛様を連れ出すために行っただう・そ・です」

俺はアンリが何を言っているのか理解するのに数秒ほどかった。

「え？ は？ ちょっとまでじゃあ何か、その重役なんていなくて、俺が就職する職もねえってわけか？」

「はい」

「なんのために俺をこんなところに連れてきたんだ？」

アンリは苦笑している。

何がおかしいんだこいつ…………でもこの部屋に住んでるってことはアンリが良いところに就職できたのは事実のようだ。もしかしてそれを自慢したかっただけとか？ おいおい、こっちは必死だったのに勘弁してくれよ。

俺は額に手を当てた。

「あのなあ」

「ああ、ああ、結論を急がないで。職はありませんが、直衛様に私の給金の一部を差し上げることができます。おおよそ月に3000ドルほど渡すつもりです。もちろん条件がありますが」

「それってヒモじゃん！」

それは男としてどうよ？

「2日間、ろくに物を食べられていませんよね？ 昨日食べたのはよもぎとノビルのスープだけ、これじゃ後数日で飢え死にしていますよ？」

あ、あれ？ 昨日よもぎとノビルのスープ食べたことなんで知ってるんだ？ 周辺の住人に聞いたとか？ いやでも家の中をのぞか

ないかぎり何食べてたかなんて普通わからんぞ。大体なんで俺たちが2日間飯を食べてないことを知ってるんだ？

俺は不思議に思いながらそれを言うのはやめておいた。

俺の考えすぎだと思ったからだ。

「確かにしのこの言ってる場合じゃないかもな」

「そうそう、人の好意は素直に受けましょう。あなただって私にいつばいお金くれたじゃないですか」

「金額が全然違うしなあ」

アンリは腕を組んでうんうんとひとりごちしていた。

「あのとき、私、すつごくうれしかったんです。金額じゃないです。直衛様にこんな好意をもらってるんだあつて、心が温かくなつて……それで……」

アンリはぽつと頬を赤らめた。

「好きな人のために尽くすことは良いことなんです」

アンリの様子に俺は少し恥ずかしくなった。別に大したことはしてねえけど。まあ、昴にこれ以上苦しい思いはさせられねえし、武士とは犬といえ畜生ともいえ生き残らなければ武士とはいえないつて言うし、恥を忍んで食べさせてもらうか。職についたときにお金は返済しよう。

「で、条件ってなんだ？ あんまり厳しいことは止めてくれよ」

「簡単なことですよ。あはは」

「あはは……そうか。で、何？」

アンリは無表情になって4つ折りになった二枚の書類を俺の前で開いた。

「中村昴と離婚してください」

その二枚の書類とは離婚協議書と離婚届だった。

「何だそりゃ」

アンリの目は驚くほど見開かれて、瞬き1つせずに俺を見つめ続けている。

「離婚協議書と離婚届ですよ。離婚協議書の内容は財産が全くないのでほとんど書く必要がありませんでしたけどね。直衛様の印鑑を押してください。後必要なものはこちらでまとめて大使館の方に提出しておきます」

「ご丁寧に中村昴のところにはすでに印鑑が押してある。昴が印鑑を押すわけがない、アンリが勝手に作って勝手に押したんだ。」

「そういうことじゃねえ！　なんで勝手にこんなもん作ってるんだってことだ！　なんで俺と昴が離婚しなきゃなんねえんだよ！」

「直衛様は私の給金をもらったら、その後、この部屋に私と一緒に住むことになるんです。それなのに直衛様は昴と婚姻関係にあるなんておかしいじゃないですか」

「おかしいのはお前の頭だ！　なんで俺とお前がこの部屋で暮らすことになってるんだ！」

「だってこちらの部屋の方が快適ですよ。あんな……ゴミみたいな人間達が住むバラック街なんて人が住むところじゃありませんよ」

「だったら、ここに三人で住めばいいじゃないか！　それで万事収まる話だろ！」

「嫌です。昴さんと一緒に住むなんて」

アンリはぎりつと歯ぎしりした。

「なんでだ！　お前はアンリに仕えていたときはあんなに献身的に」
「なんでって……」

アンリは目を瞑って、拳を握って、口をこれ以上ないほど大きく開けて俺に言い放った。

「なんで、私をクビにした人のために何かをしなくちゃいけないんですか！」

「お前……」

「ふざけないでください！　あれから私がどれだけ苦労したと思ってるんですか！　直衛様が渡してくれたお金はすぐに強盗に盗られてしまつて、私はずっと水だけで暮らしてきたんです！　あなただつてわかるでしょう？　どんなに苦しい暮らしか！　自分でやった

ことの重大さに気づかないような。あんな……あんな人間のクズにしてやることなんかありません！」

アンリの怒声は強烈だった。俺の心に訴えかけるようなそれだけのすこみがあった。そりゃそうだ。アンリの苦労は俺自身が昨日まですつと味わいつづけてたんだから。何の苦労もしてないなんて言えるはずがない。

「言いたいことはわかる。俺も昂が悪いと思ってる。でもこれはやりすぎだ。みんななかよくすれば……」

「私は大統領のためにあんなに尽くして……尽くして……それで何？　ちよつと頬をひっぱたいだけでクビ？　ふざけないで……ふざけないで！　人の人生をなんだと思ってるの？　私はお金も地位も手に入れたの。これさえ手に入ればなんでもできるわ。だから、私はずつと欲しかったあなたを手に入れるの。大統領がその権力で海外から盗ってきたあなたを、私はお金で手に入れるの……そうお金と地位さえあれば私はなんでもできる」

「れ、冷静になれって、お前は頭に血が上っておかしくなってるんだよ。な、昂にはあのことを謝らせるから、それで勘弁してくれよ」「もう、あんな女のことを一切しゃべらないで！」

アンリの平手が俺の頬をひっぱたいた。

「あ、ごめんなさい……つい」

少し頬が痛かった。だが、今はそんなこと気にしてるわけにはいかない。

俺は深々と頭を下げた。

「昂がやったことは謝る。虫の良い話かもしれないが、昂と一緒にここに住まわしてくれないか。給金はいらさない。ただ少しご飯を食べさせてくれるだけでいいから。後は家事の一切はまかすってのはどうだ？　その間に仕事探すからさ……」

アンリは俺を無視して置いてあったアタツシケースを開いた。

「私がどんな職についたと思いますか？」

アタツシケースから、つばのついた学帽のような帽子を取り出

し、黒い革靴に履き替える。

「街中をふらふら歩いているところを、あのポニーテールに呼び止められたんですよ。そして仕事を紹介されたんです」

「フィアに？ どういうことだ……」

黒漆の刀を腰に差した。

「そして言われたんです。中村昴を監視しないかって……彼女の行動をよく知っている私ならやりやすいだろうと、それをやりやすい職にもつけようと」

「監視……だと？」

どんどん雲行きが怪しくなってくる話に俺は不安を覚えた。

そして決定的なものを見た。

アタツシケースの中からアンリは【特警委】と書かれた腕章を取り出し、腕につけたのだ。

「お前、それって……」

「そう、私は特別警察委員会、最高顧問……村井アンリ委員長になりました」

特別警察委員会は以前にも述べたように親比派財産没収法によって制定された独自に捜査、逮捕、及び法の執行ができる外部警察機関である。反国家的行為を行ったものを選定し、国家に帰属するかの是非を決定できる。

「悪魔に魂を売ったのか！」

「ここで私に逆らえば、反国家的行為者として逮捕することも可能です」

アンリは親指で刀を出し入れして、刀の動きを確かめる。

「そんなもの冤罪じゃねえか！ 俺がいつ反国家活動したんだよ！」
アンリは刀を抜くと、綺麗な刀身を見つめる。

「自白は証拠の女王です。三日三晩、寝ずに尋問を続ければ、つい事実を吐いてしまうものです。まあそれで自白しなくても、調書を書き換えればいいだけの話ですが」

アンリは髪の間からその暗い目線を俺に投げかけた。

「あなたでなくとも別に元大統領を逮捕することも可能ですよ」

アンリの言うことは可能だろう。つい先日でも日本では検察による調書捏造事件があったし、警察による拷問まがいの尋問は今でも横行しつつづけている。国家機関が一般市民を犯人に仕立て上げるなど簡単なのだ。

「アンリが、そんなことできるわけねえよ。お前は優しいから」

「ふうん。じゃあ見学しますか？」

「何をだよ……」

「私の仕事ぶりをね」

アンリはその刀身を鞘に納めた。よく見れば、その鞘には少し赤黒いシミがついているような気がした。

ホワイトジュエリーレストランにて

俺は学帽と刀をつけ、真っ黒なメイド服に身を包んだ二人の特警委に、羽交い締めになれていた。

アンリは特警委によって頭を床に押さえつけられた店主の頭を刀の鞘で持ち上げる。そして胸元から書類を出した。

「逮捕状です。あなたは反国家的行為者としての疑いがかけられています。早急にご同行をお願いします」

「わしは何もしておらん！」

「じゃあ先ほど何故逃げようとしたのですか？」

アンリは刀を抜くと、店主の首もとにつきつけた。

「お、お前等に捕まったらおしまいだからだ！ 捕まった連中はろくに裁判も受けずに豚箱に入れられているというじゃないか」

「それは誤解ですよ。きちんと裁判も行われています。ただあまりにも明々白々な自白を得ているので、1回の裁判で決着がついてしまっているだけです」

店主は目をその場で泳がせた。

「な、なあ…… お前さんだって、好きでこんなことやってるわけじゃないかろう？ 前に店に来たときは元大統領のお付きメイドだった

じゃないか……そ、それでなあ、こ、これくらいで許してやってくれんかなあ」

店主は指を一本立てた。反対側の手には財布を握っている。つまり、ワイロを支払う代わりに許してくれということなのだろう。

アンリは刀で立っている指を切りおとした。

「ぎ、ぎゃあああああああああああああああああああああ」

「収賄罪は懲役20年の重罪です。あなたは法廷で非常に不利な立場に陥るでしょう。余罪の追及も一段と厳しくなると考えられますので、尋問は覚悟しておいてください」

「あ、悪魔め……黒い羽をまとった悪魔どめ！」

店主は特警委達によって連れて行かれた。

「なんで、あの人が捕まるんだ……何故！」

「あの人ですか？ それは次期大統領選における有力な対立候補だからです」

「は、はあ？ 親比派だから捕まえてるんじゃないのか！」

「ああ……特警委は表向きは親比派を排除するためのものですが、実際には次の選挙を有利に運ぶために政敵とその支援者を抹殺する組織ですよ。ここだけの話ですけどね」

「んだそりや……そんなもん民主主義でも何でもねえじゃねえか」

「日本や旧ソ連でも検察またはKGBがある一方の政治勢力に阿って政治的な逮捕や捜査をすることは珍しくありません。どこの国でも警察組織はそういった政敵を排除する役割も担っています。でもまあ彼を捕まえた本当のところの理由は別にあるんですがね」

アンリは刀についた血を紙ナプキンでふき取って、刀を鞘に入れた。

「昨日、特警委が監視していたところによると、ここを訪れた元大統領を励ましていたそうです。それはそれは元大統領は喜んだそうですよ。全く、あの人が喜んでいたところを想像すると反吐がでますね」

「お前、なんでそんな風になっちゃったんだ……」

アンリの顔は片側は笑い、片側は怒った表情になった。

「これでよくわかりましたよね？ 元大統領が反国家的行為者となるかどうかは私の気まぐれ次第だということです」

そしてアンリはもう一度2つの書類を机の上に置いた。

「それでも俺は昂を裏切れない」

アンリは無表情に戻って、その書類を胸の中に戻した。

「いいでしょう。では、少し考えてください。その間に彼女が飢えて死んでしまうか、それとも逮捕されて、尋問中に【不慮の事故で死んでしまうか……この離婚届に判を押さなければ、結末は悲劇的なものになるでしょう」

「何故そこまでして俺を手に入れようとする。俺はそんな価値のある人間じゃない」

「私にとってあなたは3つのプールに入れられたこの世の全ての金塊と交換しても手に入れない存在だからです」

俺はそこで解放された。どうしようもなかった。ここでアンリに殴りかかる気力も起きなかった。国家権力は俺にとってはそれほどまで大きく、巨大でなすべがないものだった。彼らの金と権力はアンリの心を邪悪に染め上げ、元の純朴で理知的で優しくった彼女の全てを破壊していた。

俺は夕方頃バラックの家に帰った。

「ただいま」

昂はブルゾンを着たまま、毛布を頭から被っていた。額から汗を流していた。まだ夕暮れ時で暑いのにどうしたんだろうかと思った。

「おかえりなさい。どうだった」

「いや、それは……」

俺は気まずそうな顔を見ると、昂は一瞬とまどったような表情をしたが、彼女はむりやり笑っていた。

「だめだったならしょうがないよ。また明日から頑張りましょ」

「そ、そうだな」

日本に戻って親の援助を受けられれば良かったが、ファイアが外国人の入出国を禁止している。電話で援助を頼んでも、金を送る手段がない。送金もストップされているそうだからだ。法人なら資金の移動ができるんだろうが、個人では自分でなんとかするしかない。

大丈夫だ。アンリの力を借りなくても、どこかに就職先があるはずだ。

「はあはあ……」

「どうした？」

昴は息を荒く吐いていた。

「抱いて、直衛」

「ったく、またかよ。そんなだから、ゴシップ誌に淫乱生活なんだと」

「抱いて、寒い、すごく寒くてたまらないの」

俺は何を言ってるのかわからなかった。暑そうに、口から尋常じやない息を吐いて、胸を上下させて、体中汗だらけの昴がどうして寒いなんて言うのか。

俺の脳裏に1つの可能性が思い浮かんだ。

俺は昴の額と俺の額をくつつけた。頭にゆたんぽがついているかのように昴の額は熱かった。

「お前、病気か、一体何の？」

「え？ 病気？ あ、あだからこんなに体が寒いんだ。あはは」「わかんないのか？」

「今、気づいた。そう思ったら、もう座ってられないや」

昴は俺の腕の中に倒れた。そこから昴は苦しそうに息を上下させて、俺の体に張り付くように、俺から離れないように体をひつつけた。

何の病気だ？ 風邪か？ いや、それにしても、熱が出るのが早すぎる。今日の朝はなんとも無かったんだ。インフルエンザじゃあるまいし、そんな急に熱がでるわけがない。

耳に虫の羽音がした。その羽音の先に目の焦点を合わせる。そこ

には2、3匹の蚊が八の字を描いて飛んでいた。

まさかマラリアじゃないのか。マラリアは発熱を発生させ、悪寒を伴う。可能性は高い。もしマラリアだったら、早急に病院に見せにいかなきゃだめだ。

「はあはあ……ごめんね。私、病気になんかなっちゃって、これじや直衛に病気が移っちゃうね。今日は私は外で寝るよ」

「何言ってるんだ。早く病院に行くぞ」

「そんなお金無いから我慢する」

「馬鹿かお前は、お前はいつもいつも馬鹿すぎるんだよ！」

俺は昴を背負って、走り出した。病院に急ぐしかない。

「ごめんね……直衛。私、何もできない子で」

その言葉を最後に昴は死んだように眠った。

「くっそ！ 絶対、絶対助けてやるからな昴！」

「助けられませんね」

医者とは冷たい眼光をためらいもせず俺に向けていた。

昴を背負ったまま、診療所にかけてこんだ俺の前で医者はそう言った。

「金が無いから助けられないってのか」

「YES 君みたいなコジキの患者はいくらでもあります。彼らは最初はどうなことをしても返すという。でも一度だって私が金を受け取ったことは無い。君らには信用がない」

「元大統領だぞ！」

「関係ありません。金を工面出来る人間は最初に金を出せます」

それから俺がどんなに頼んでも頭を下げて、医者は俺の話を聞かなかった。そのうち医者は診療室に戻って別の患者の相手をしはじめていた。

金さえあれば……昴を助けられる。

そうだ。約束も信頼もへったくれもない。ここで助けなきゃ、昴は死んじゃうんだ。金がいる。悪魔に魂を売り渡してでも、金を手

に入れなくちゃならない。

昴をソファーに寝かせて、俺は診療所を後にした。

そして少し風の強い夕日の中を駆け抜けて、銀行についた。

俺が来ると銀行の女性店員はまたかと嫌そうな顔をした。

「またあなたですが、ですから前にも申しました通り、預金封鎖されていまして」

「今日は違う！ マイクロクレジットだ。少し、お金を貸してくれ！ 病気で死にそうな人がいるんだ！」

「え？ マイクロクレジット？」

そうだ。無一文の俺でもマイクロクレジットなら貸してくれるはずだ。20ドルでも30ドルでも借りられるはず。

「いいですけど、あなた5人の連帯保証人はつけられますか？」

「5人……」

そうだった。マイクロクレジットには5人の連帯保証人が必要だった。

いまから5人の連帯保証人をどうやって探そう。1人は昴が確保できるが、それ以外に誰かなってくれる人がいるのか？ この外国人の俺に。

「当てがないならご融資はできませんよ」

女性店員は椅子を回して、後ろを向いて、机に向かって他の作業を始めていた。

俺はそこら中に座っているお客に向かって土下座して回った。

「お願いだ。連帯保証人になってくれ！」

「は、はあ？」

「病気で困っている人がいるんだ。たった20ドルかそこらの入院費なんだ。お願いだ！」

「俺とは関係ないだろ。邪魔だ。あっち行けよ！」

そいつに顔をけっ飛ばされて、そいつはどこかに行ってしまった。糞、じゃ次はあそこで座ってるおばさんだ。

「ひっ、こっち来た」

「お願いだ。連帯保証人に」

俺が土下座していると、

机で作業していた女性店員が俺に気づいたのかびっくりして大声を上げていた。

「ちよつと何してんですか！」

女性店員は警備員に指示を出す。

俺はまたヒヤマに腕を捕まれて外に放りだされた。

「もう二度と来ないでください。警備員さん、今度来たときは入れないでくださいね」

「連帯保証人は少し待ってくれるだけでいいんだ！ お前だって人の心が残ってるんだろ！ 人の命とお金とどっちが大事かくらいわかんだろ！」

女性店員はちつと舌打ちをした。

「その貧乏人どもの言葉は聞き飽きましたよ。私はいつもこう言っています。もちろんお金ですとね」

女性店員は笑いながら、ヒヤマの肩を叩いた。

「二度と来る気が起きないように半殺しにしてください」

ヒヤマの拳が俺の前でどんどん大きくなって、俺は一瞬意識が飛んだ。

俺は体を起こし、ヤシの木に体を傾けた。

「もう、あれしか…… 昴を助けられる方法は無いのか……」

外はもう真つ暗で、暴風が吹き荒れていた。ヤシの木が風に煽られている。そして朽ちた一本の椰子の木が折れて、海の中へと落ちていった。俺はアザだらけでボロボロになった体を揺らしながら、ひたすら走り続け、アンリのいるホテルへと着いた。

「1101号室の…… 村井アンリに電話をつないでくれ」

俺がカウンターに行くと、女性のホテルマンは俺を不信に思ったのか、対応はぎこちなかった。しかし、昼にいた男のホテルマンが俺を覚えていて、1101号室の村井アンリに電話を入れることが

出来た。

トゥルルル トゥルルル トゥルルル トゥルルル

なかなか、でない。

「くそっ！」

俺はイライラしてカウンターを手で叩いた。

「来てくれると思いました」

アンリが不敵な笑みを浮かべて、俺の横に立っていた。

「アンリ、今すぐ金を受け取れるか？」

「大丈夫ですが、それよりお体どうかされたんですか？」

「早く！」

心配そうにしているアンリだったが、すぐにアタッシュケースから離婚協議書と離婚届を俺に渡す。

俺はすぐに離婚協議書と離婚届に自分の名前と拇印を押した。

アンリはだんだんと心配そうな顔を緩ませて、その書類を手にとると目をめい一杯開いて笑った。

その夜、診療所のベッドで昂は目を覚ました。

「あれ、直衛？ ここどこ？」

「診療所だよ。お前、マリアで危なかったんだぞ」

「あ、そうだったんだ。ごめんね直衛」

「薬打ったからもう大丈夫だぞ」

「あれ、お金は？」

「重役の人が貸してくれた。その重役の人がやっぱり就職はオーケーだって言ってくれたよ」

「よかった。私が病気直ったことよりずっと良いニュースだよ」

「そんなこと言うもんじゃない」

「私、さつき怖い夢見てたんだ」

「ん、どんなの？」

「私はずっと直衛と一緒に歩いているんだけど、私が石に転んでつまずいて怪我して動け無くなっちゃうの。それで直衛がクスリを探

しに行くってどこかに行ってしまうの。でも直衛はクスリを探しに行ったきり結局帰ってこなくて、私はその場でずっと泣き続けているっていう夢」

「俺はいなくならないから」

「そ、そうだよ。直衛が私の元からいなくなるわけないもん。そうになったら私1人ぼっちになっちゃう」

「俺はいなくならないから」

俺の目の前で昴の体が歪んでいた。

「どうして泣いてるの？ 直衛」

昴は俺のことをベッドの上で抱きしめてくれた。

俺は最低の人間だった。これ以上ない。この世の中で一番の最低の人間だった。

握りしめた離婚届を昴に見られないようにポケットにそっとしまっていた。

俺は昴の信頼を裏切ったのだ。

窓から昨日まで見えていた綺麗な空は台風の影響でこの世の闇を吸い尽くしたかのような暗闇になっていた。

もしも高校生の俺とスバルが選挙に立候補したら

俺の目に真つ白な朝日が突き刺さる。俺は絨毯の上で膝を立てたままの状態を目を覚ました。時計を見ると、8時を回っていた。背伸びをして、ベッドの上で寝ている彼女を揺さぶった。

「おい、起きろ。起きろ！」

「アンリ！」

「うゝん……もう少し寝かせてください」

「特別警察署への出勤時間に遅れるぞ！」

昴はもうほとんど閉じた状態の眼のまま、よろよろとベッドから起きあがる。パジャマ姿でふらふらと洗面所まで行って、歯磨きを始めた。ぼたぼたと歯磨き粉が口から垂れている。

「じゃあ俺がアタッシュケースの支度しとくから」

「おにやがいしましゅ」

「起きてるかー？」

「アンリは朝が弱い。」

「ぶえ、にやんども言ってるじゃにやいでしゅか。わたしは朝が強いと……終わった」

そう言う昴は歯ブラシを口につっこんだまま、テーブルへ座った。そこには俺が朝に作っておいた目玉焼き定食があった。昴は箸を手探りで持つと、ご飯をすくって、そして口を開けてご飯を食べようとする。

「って歯ブラシ口につっこんだまま、朝食取るやつがあるか！」

俺はアンリの首根っこを掴むと、洗面所へ連れて行って、歯ブラシを口から取ったあと、コップで口を洗わせた。

「はいがらがら」

「ぶへえ……は！ 私は何を！」

水道の冷たさでアンリは目を覚ましたようだった。

「歯ブラシつつこんだまま朝飯食おうとしてた」

「う、うわ…… すいません！ すいません！ 直衛様！ 毎朝毎朝
お手をかけてしまつて！」

アンリは半眼のまま、ぺこぺこ頭を下げていた。

「いや、いいよ別に。お金もらつてるんだからこのくらいのことし
て当然さ」

アンリは急いで朝食を掻き込むと、アタッシュケースの中身を確認して、腰に黒漆の刀を頭に黒い学帽のような帽子を被り、脱兎のごとく玄関で黒い長靴を履いた。

「それじゃ大統領官邸に行つてきます。今日は忙しくなりそうなので、夜中に帰ります。ご飯は用意しなくて良いです」

「闇衣の暗黒天使さんは毎日忙しいな」

「その呼び名は恥ずかしいから止めてください、全く島民の人たちのネーミングセンスには呆れますよ」

「徹夜にはならないのか？」

「ああ、うちはエコだとかなんとかのせいで、退社時刻の夜１１時から出勤時刻の朝８時まで電気消えて閉まつちゃうんですよ。だから私は夜１１時を超えて、特別警察署にはいません」

特別警察署とはアンリの働いている特警委が働いている建物の名前である。市街から離れた島のはじっこにある。警察署とは違って裁判所としての機能があり、尋問した後すぐに裁判にかけて有罪にすることができる。もちろん全ての裁判は傍聴することはできない。

「あ、そうだ」

「なんだ？」

「これ、お役所から正式に離婚受理書が届けられました」

「そうか……」

「以前から拒否していたこれにも判を押しておいてくださいね」

離婚受理書と、そして結婚届を俺に渡した。結婚届に関しては、もうこれ以上引き延ばすことはできないだろう。俺はその場で判と

サインを描いた。

アンリはにつこりと笑った。

「それじゃ、今日中に結婚届を出してくださいね」

そういうとアンリは目を瞑った。キスしてくれということなんだろう。俺は望み通りキスしてやった。

「じゃ、行つてきます」

俺は手を振つて、アンリを見送った。

疲れたな……もう色々考えすぎた。

「昂のところに帰ろう」

そして俺は昂が住んでいるアパートへと向かった。

俺がアンリの家に通い始めて2ヶ月が経った。昂の手前、ずっとアンリのホテルには住めなかったので、こうして時々、昂の家に泊まることで半同居生活を続けていた。昂には泊まりの仕事がたびたびあると言つてごまかしていた。とはいえ、近頃は昂という時間よりもホテルでアンリと寝食をともにする時間が多い。そうだったころからか、毎日、俺を見送る時の昂の顔は寂しそうになったのは。

俺は近くの市場を通った。盛られている野菜や果物はほとんどない。店を閉めているところも多かった。度重なる反移民政策でアメリカの心証を悪くしたオラパ共和国は、食料援助の縮小という経済制裁を受けていた。かなりの部分をアメリカからの援助に頼るオラパ共和国はその影響で厳しい経済状況に追い込まれていた。また物資が不足しがちになったこの国を訪れる観光客も少なくなった。寂れたホテル、人のいなくなった砂浜、訪れるものいなくなった観光地。街中では背を丸める失業者の数々と、暗く陰鬱な街中の風景がもはや普通になっていた。

だが、ここまで状況が追い込まれているにもかかわらず。

フィアの大統領支持率は60%台と比較的堅調な数値を示していた。その原因は、フィアが経済の悪化の原因をアメリカに押し付けたことが原因である。強固な移民政策を推進するアメリカがオラパ

の反移民政策に驚異を感じ経済制裁をしたのだという風にラジオや新聞で吹聴したのだ。オラパ共和国はアメリカから独立したという経緯もあって、アメリカに反発心があること、またナシヨナリズムの掲揚などもあいまって、この論は非常に広く支持された。

こういった例は、経済制裁をされたイラクにおいても起こった事例である。イラク戦争（2003年勃発時）前の経済制裁をされたイラクにおいて、フセイン政権は90%超という驚異的な支持率をたたき出していた。その原因は経済制裁により、フセインに経済の依存度が高まったこと、またアメリカという明確な敵の出現により国内がまとまったことが主な原因であった。しかし経済制裁をされた原因は、クウェート侵攻なのであって、明らかに自分たちが原因であり、それを現在の困窮の原因がアメリカにあると考えるのは少々無理がある結論といわざるおえない。

このように国民とは自分たちがしたことを非常に忘れやすく、失敗の原因を自分以外に押し付けることをもつとも好む集合体なのである。

少し萎びた昴のアパートに俺はついた。

このような地獄のような状況下で、子供達はアパートの前でサッカーをして遊んでいた。彼らはこの国の状況など知らない。俺はそう心の中で思っ、殺伐したこの世で、彼らを見て、少し心を落ち着かせていた。

2階に上がって、ギイと古びたドアを開けて、昴の部屋に入った。

「あ、帰ってきた！ おつとめご苦労様だよ」

俺に昴は抱きついた。

俺は腰に手を回す。手にコラーゲンたっぷりのタンパク質がくっつく。俺が不思議に思っ、首をぐにやりと伸ばして昴の背中を見ると、俺の手が昴の尻を掴んでいた。

「っつーか、昴は背中に何もつけてなかった。

裸エプロンだった。

「おいしい、裸でエプロンつけんなよ！」

「そんなことはいいから！ 早く座って、一緒にご飯食べよう」

壁紙のはがれ落ちた部屋に、ちゃぶ台が一台置いてあった。その上にはあじの開き定食があった。アジは焦げていた。俺はあぐらを掻いて座り、箸を付ける。こげた部分をのけて、中身を食べるとうまかった。昂は強火できつちり焼くくせがあつて、見た目は悪い物の大抵はうまいものが作れる。

「えへへ、おいしい？」

「うん。おいしい」

俺は裸エプロンからちらちら見える胸が気になった。食べている最中に手でいちいち胸を押し上げている。まあ、わざとやってるんだろうな。

うつ……

少し、目がくらくらする。さすがに絨毯の上で寝ると疲れがよくとれていないようだ。しかしこのような意地を張ったのは今日ぐらないものだ。最近ほとんど、アンリと一緒に寝るようになっていた。俺には昂がいるのに。

「ねえ、疲れてるの？」

「え、そうだな。仕事が忙しいから……な」

「じゃあ、ここに頭のせて寝ていいよ」

昂は自分の膝元を手でばんばん叩いた。

「膝枕か？」

「そうだよ」

「いや、やめとく、これ以上迷惑かけられねえ」

それは本心でもあったが、昂への罪悪感もあったのかもしれない。つた。

昂は立ち上がって、俺の後ろに回った。

「何？」

「えい」

昂はその場で、頭をヘッドロック。

「うげ」

俺の頭に力を入れてバランスを崩させる。そして無理矢理、頭を自分の膝へ持つていつて、昴は正座した。俺は呆れて空笑いした。「お前、もうちょつと穏便にできないのか？ 折角幼妻とその夫の朝の食卓みたいな雰囲気なのによ」

「えへへ……やわらかい？」

昴は朗らかな笑いを俺に見せていた。最近、こんな笑顔を俺に見せるようになった。あつたころとはずいぶんと昴の様子も変わっていたように感じる。それに俺はなんだか安心していった。

「そうだな。やわらかいわ」

「最近太っちゃったせいで足がぶによぶによなつたからかな？」

「いや、いいんじゃないの。マリアにかかつてたときはもうすごく痩せてたから、あんどきまじでガイコツみたいだったから」

「今はもうガイコツじゃないよね？」

「あつたりめえだ。俺の昴はものすごく綺麗だよ」

「そう」

窓から潮風が入り込む。南国の温かな太陽に照らされて、昴の手が俺の頭をなでていた。俺はうとうととしはじめていた。

「ずっとこんな生活が続けるのも悪くないな」

そうして俺は眠ってしまった。昴に抱かれながら。

幸せな時間。アンリと昴の間をコウモリのように飛び交う俺に訪れた一時の休息。昴と一緒にいると自分の惨めさも、世の不条理も全て許せるような気がした。そして俺は気がゆるんだのだろう。

その時、俺のポケットから離婚受理書と結婚届が冷たい床に落ちていたのだった。

「う……うん。あれ俺寝ちまったのか」

俺の頭には昴の膝枕の代わりに普通の枕が敷いてあつて、体には毛布が掛けられていた。

昴はいない。どこに行ったのだろうか。

俺は起きあがると、屈伸をして、消えた昴を探し出した。バスル

ーム、台所、4畳半のこの部屋、どこにもいなかった。

「昼食を買いにでもいったのかな？」

時刻は12時を過ぎていた。俺はそうだと思いこんで、暇をもてあましたので、外に出て、散歩でもしようと思った。完全に二ート生活だな。おい。

などひとりごちして、外に出たとき、さっきまで遊んでいた子供達と、アンリ率いる3人の特警委がそこにいた。

（アンリは仕事るか）

アンリは他の2人の特警委に指示をだしていた。

2人の特警委達は近くのベンチで座っている老人に近づく。

特警委の黒いメイド服は非常に威圧感がある。昔、彼らに囲まれたことがあるが、岩山がすぐそばにあるかのようにだった。

「ふぁい？」

その老人は呆けているようで、特警委の言うことに上の空で対応していた。その様子に特警委は腹が立ったのだらう。

老人の首もとに白羽を向けて、脅すような口ぶりと言った。

「おい！ お前怪しいな！ 少し署まで来てもらおうか！」

「ふぁ？」

老人はまるで解っていないようだった。

こんな老人が反国家行為者であるはずがない。政治の世界とも当然無縁だらう。しかしこんな老人を捕まえることも特警委にとって意味があった。

これはアンリが言っていたことなのだが

特警委は日に決められた逮捕者数のノルマが存在しているからである。そのため、全く反国家活動と関係の無いものをノルマのために捕まえることが多いらしい。なんでもフィアが「自分に逆らうものがどうなるかを国民に見せつけるため」にやっているらしい。

ソ連などの警察国家では、密告やノルマ達成のために犯罪者でないものがこうして大量に捕まっていたという。

俺ははつきり言っただけを見てものとも思わなかった。不幸だ

なとか、老い先短いのについてないなとか、そういう風に他人事としてそれを傍観していた。もう俺の中の正義の炎は完全に潰えていたのだった。

とにかく疲れていた。自分の無力さを実感し全てを諦めていたのだ。

俺が彼らのやりとりを無視してどこかに行こうとしたとき、それが起こった。

あのフィリピン人のウェイトレスが特警委の前に立ちふさがったのだ。どこから現れたのかどこにいたのか。彼女はそこにいた。

たぶん、老人が連れて行かれるのを黙って見ていらなかったのだろう。しかし、これはあまりにも無謀だ。フィリピン人が特警委の前に立ちふさがれば、それは当然逮捕されるに決まっている。

「貴様、何のつもりだ！」

特警委がにらみ合っている間に、アンリがやってきた。

「何のつもりか知りませんが公務執行法違反で逮捕しますよ」

ウェイトレスはそれでもどかなかった。ただ、立ちふさがりこういった。

「モウ、コンナコトハ止メテクダサイ」

「仕事なので止めるも何もありません」

「才爺チャンヲ連レテ行クノハ止メテ、私ノ、タツター人ノ肉親」

「そうですね。それはご愁傷様です。尋問には堪えられないでしょうね」

アンリは冷たく言い放った。

「絶対ニドカナイ」

「そうですね、じゃあ2人とも確保ですかね」

とアンリが二人の特警委に命令しようとしたとき、ウェイトレスの言葉が彼女を止めた。

「才父サンハ、私ヲ、東京ニ行カセテクレテ、デモ私が不甲斐ナイカラ、大学ニ入ルコトガデキナクテ、ソレデモ必死デ仕送りシテクレタノ、私ハ結局コノ島デ働ク事ニナツタケド、才父サンニハ苦勞

カケラレナイ」

アンリはじつとその話を聞いていた。その話はまるで、自分自身のことを話しているかのようにだった。

「……そう」

「特警委員長、早く確保しましょう」

「私ダケ連レテイッテ！」

「なんだとこのフィリピン人が！ お前等みたいなのはな。全員生きる価値がないんだ」

「そうだ！ 俺は運が無くて、こんな仕事やってるけど、それはお前等が職を奪わなければ、こんなことにならなかったんだ。お前等みたいなクズのせいだな。お前が大学入れなかったのは努力が足りねえんじゃないのか？ 人間なゝ頑張ればなんでもできるんだよ！ てめえの努力不足で大学には入れなかったんだろ！」

アンリは目を瞑って、二人の特警委の話を聞いていた。特警委達はアンリの様子がおかしいことに気づいて、アンリの方を見つめた。まぶしい日差しと風呂に入っているかのような熱気がアンリを包み込み、アンリは額から汗を垂らしていた。

「もう、憎しみの連鎖をここで止めにしましょう」

「「は？」」

二人の特警委の声が重なった。

「今日のパトロールは終了、今日は署で書類作業に入ります。結構たまってますしね」

「え？ ちよつ……こいつらどうするんですか？」

「証拠不十分で逮捕は無し」

「それじゃあ今日のノルマは？」

「今日の分は、昨日捕まえたのを繰り上げておきましょう。昨日はデモをしようとして捕まったのが10人もいましたからね」

「ええ？ そ、それは……」

アンリは半眼で二人を見下すように目線を落とした。

「委員長の私に逆らう気ですか」

「い、いえなんでもありません」

アンリ達は、車に乗って去っていった。

ウェイトレスは何が起こったのかわからなかったのか、その場でぼおつとアンリの去った道をしばらく見ていた。

「ふ、ふえ、今日は暑いのお。アイリーンや」

「ソウダネ、オ父サン」

二人はそのままどこか遠くへと去っていった。

なんとなくそれを見て、俺も勇気がわいてきたような気がした。

あのウェイトレスも戦っているのか。何故、俺はこんなところで散歩しているんだろうか。一体この2ヶ月、俺は何をしてきた。人々が嘆き苦しみ、誰もが地べたをはいつくばるように生きている中で、何故1人こんなところで流れにまかせるまま、アンリと昴の間をこうもりのように飛び交っているのか。俺は男として生まれたなら、立ち上がらなければならないのではないだろうか。

いや、俺が立ち上がって何になるんだ。そう、俺には何の力も無いんだぜ……

わき上がってきた勇気はすぐにしぼんでしまった。結局俺はこの程度の人間なのだ。

あ、そうだ。結婚届だしに行かなきゃな……確かにポケットに入れておいたはず。

俺はポケットをがさごそと探って、離婚届を確認のために取り出そうとした。

あれ？ おかしいな……ポケットに入れてたよな。そうだよ。昴の家に来る間の道で確認したから、間違いない。じゃあなんでないんだ？

まさか。

昴の部屋で落とした？

いやいや、それはないだらいくらなんでも、ないよなあ？ でもじゃあ道で落としたってのか？ 俺さっき寝てたんだよな。もしか

したら、そこで床に落とした？ ……可能性は一番高いぞ。

体中からじとつとした嫌な汗が流れてきた。背筋が凍るような冷たさを感じる。心臓に突き刺さるような恐怖が俺を襲っていた。

俺はあわてて、2階に上がり、ドアを開けて昴の部屋に入った。

はいつくばって床を探す。無い。やはり道中で落としたのか？ と思つて体を起こして、ほつとしたとき、

ちゃぶ台の上に離婚受理書が置いてあつたのが見えた。

「え……これ」

頭の中が真っ白になった。

「昴……見たのか？」

すこし物事を考えることができなくなった。俺はそこいらを意味無く歩き回った。歩き回っていると気が散つて今の現状を深く考えなくて済むからだ。

昔、同じようなことをしたことがある。子供のころ、ハムスターを飼っていたのだが、それを間違つて足で潰してしまったのだ。俺はそのとき、ハムスターの潰れた死体を見ても、何が起こっているのかわからず、うろろろその場を歩き回っていた。

と、おかしなものが目に入った。窓の外で縄がぶら振り子のように揺れているのだ。何か吊しているのか？ 朝来たときにはあんなもの無かつたのに。

心臓がばくばく鳴つて、窓の方に近づいていく。そして、窓の下を見ると、

ブルゾンを着た誰かが首に縄を巻き付けて、首をつつてるのが見えた。

「え……あれ……昴？ え？ 嘘だろ？ おい……嘘だろ！ おい！ なんかいえよ！」

俺はどうしていいかわからなくなった。

「おい！」

それは俺の言葉に全く反応せずにぶらぶら揺れているだけだった。「どうしてだ。なんで、俺が離婚していて、結婚届け作つてたのに

絶望したのか？ いや、今はそんな過ぎたことを言っている場合じゃない！」

一階に回って縄からおろすか？ いや、昂は一階から少し高い位置にある。すぐには下ろせない。そうだ。ハサミで、縄を切れればいい。そんなに太い縄じゃない。ハサミで切れるはずだ。俺は急いで、部屋中の棚を引っかき回した。

「くそ、一体どこにあるんだ！」

「何探してるの？」

「バツカ！ ハサミだよ！ 早く探せ！」

「ハサミはその棚の2段目に入ってる」

「まじか！ ありがとな！」

俺は洋裁ハサミを手にとると、急いで窓にかかっている縄にハサミを入れた。だが固くてハサミが通らない。

「ちよつと手伝ってくれ！」

「え？ う……うん。何すればいいの？」

「俺と一緒にハサミを握って！ 2人の力で縄を切るんだ。早く！」

「うん……じゃ力入れるよ。えい」

縄がぱつさりナメに切れ、どさつと大きな巨体が落ちた。

「よし、昂！ 今から助けに行くぞ」

「うん。でも直衛、誰を助けに行くの？」

「馬鹿やつろ、地面に落ちてる昂だよ。目が見えてねえのか昂！ あれ？」

つてなんで昂がここにいるんじゃああああああ

裸エプロン姿の昂が不思議そうに頭にはてなマークを浮かべていた。

「なんでさつきから直衛は1人で騒いでるの？」

「いや、昂が離婚されていた事実絶望して、窓から首つり自殺をしてみたからだよ！」

昂は憐れんだ目を俺に向けていた。

「大丈夫？ 直衛？ 林先生呼びましようか？」

「林先生は日本にしかいねえから！ いや、じゃ地面に落ちてるのは……」

俺は地面を見た。それはニコニコマークがかかれ、真っ白な布で作られたてるてる坊主だった。

「なんだこれ」

「今朝スコールが降らないようにてるてる坊主作ったの。でっかいのをね」この島ってすぐスコールが降って洗濯物が台無しになっちゃうじゃない。だからでっかいの作ったの。そのおかげでほら」

畳んだ洗濯物を持って昴はニコリ笑った。

「さつき屋上から取ってきたんだけど、全部カラツカラに乾きました」

「お、おま！ まぎらわしいことすんなよ！ てるてる坊主に自分のブルゾンなんか着せやがって！ 心配したんだぞ！」

「心配してくれるのはうれしいんだけど、普通、てるてる坊主と人間を間違えないと思うの」

「そりゃそうだけど、状況が状況だったからさ」

「何かあったの？」

「それは……」

「気づいてないのか？ だが、ちやぶ台の上にあったっていうか、そういうことだよな。いや、昴が気づいてようと気づいてまいと関係ない！」

俺は頭を下げた。

「昴。悪い、実はお前とはすでに勝手に離婚していたんだ。俺はずつと、仕事と行ってアンの家に行ってたんだ。それで今日、アンのとの結婚届を出そうとしていた！ 俺は史上最底の最悪野郎だったんだ！」

昴はぽかんとした目で俺を見つめていた。

「知ってたよ」

「すまねえ、今日知って、どうしていいのかわからないと思う。俺を蹴るなり殴るなり」

「だから、ずっと前から知ってた。アンリの家に行ってたことも離婚してたことも」

「え？」

昂は唇に指を当てて思い出すように話した。

「病院に入院した初めての日に、直衛がつきつきりで病室にいて、そのとき直衛寝ちゃったでしょ？ そのとき、ポケットからくしゃくしゃの離婚届が落ちてたの見たの。で、金策に走っていたのを私にもおぼろげながらに覚えていたから、これを交換条件にアンリからお金借りたんだろなって思った」

「え、でもそれは俺が離婚届を出したって事実だけで、アンリと取引があつたなんてわからないだろ？ お前を捨ててアンリのところにいったって思わなかったのか？」

「そんなこと直衛はしないよ。私の愛した直衛だもん。人を裏切ることはできない。今回のは私が病気になっちゃったから仕方なくしたんだよ。アンリには悪いことしたと思ったし、だからこれは私の贖罪でもあったのかな……」

「馬鹿野郎、人間なんてそんな綺麗じゃねえよ。俺はただ自分の保身のためにお前との信頼関係を売った最低な奴なだけだ」

「そうだとすると、私は、直衛がちゃんとご飯を食べられて、生活していければいいと思ってるよ。その隣に私じゃなくてアンリがいたとしてもね。私は直衛に迷惑ばかりかけて何もしなかったから」
昂はエプロンのポケットから結婚届を差し出した。

「馬鹿かお前は……なんだよそれ、そんなことしてもお前は何の利益もねえぞ。いつ俺がお前をうつとうしく思ってた切り捨てるかかわかりやしねえ、人間なんて汚えんだ。邪魔になったら切り捨てて、欲しくなったら奪い取る、自分の責任を他人におしつける汚い生き物なんだよ！」

「そうじゃないよ。だったら、直衛は私の元からとくにいなくなってるよ。人間はそうじゃないって直衛が証明してるよ」

俺は涙が勝手に流れていた。昂は全てを知った上で俺と会ってい

た。全てを受け入れて、それでも俺に笑いかけてくれた。俺は不甲斐ない自分自身に涙した。そうだ。この昴に俺はこれ以上酷い仕打ちをしてはならない。今、俺が立ち上がらなければならない。俺以外の一体誰が、この昴を幸せにすることができるんだ！

俺は結婚届を手に取るとそれを破り捨てた。

「え……」

「役所に行つて、もう一度俺たちの結婚届を出そう」

「でもそれじゃ、アンリからお金がもらえないよ」

「金はいらない。自分たちで手に入れる」

「でもどうやって……フィアが私たちを職につけることを邪魔してるんだよ？」

「1ヶ月後の大統領選に勝つて、大統領職につく。1ヶ月までならいままでアンリからもらった給金でなんとか暮らせる」

「大統領選つて……できるわけないよ。私、みんなから嫌われちゃつてるよ」

「できる。いややってみせる」

「でも、選挙にはお金がたくさんいるよ」

「無一文で勝つ」

「お金が全くなって選挙活動をするなんてそんなことどこの世界でも見たことも聞いたこともないよ」

「誰もやってねえなら、俺たちがその最初の1人になるんだ。俺たちとそして悪魔に支配されたこの島を幸せに導いてやるんだよ！」

「でも」

俺は昴を抱き寄せて、濃厚なキスをした。唇と唇が混ざり合い、口の中で解け合つていく。昴の目がとろんとして、頬が真っ赤になった。

「は、はう、直衛……」

「この島の大統領はお前だ。昴！」

俺は昴をお姫様だつこで抱き上げた。

「う、うん」

「愛の力で大統領のイスを手に入れるぞ！」

その後、俺たちは役所に突撃し、結婚届を提出し、立候補者の登録を行った。

「それはそうと、昂、お前、裸エプロンで屋上に行ったのか？」

「そうだよ」

「お前、もうちょっと身なり気にしろよ！」

昂はえへへと笑いながら、自分の頭をこつんと叩いた。

だめだこいつ……はやくなんとかしないと。

もしも高校生の俺が対立候補に選挙協力を頼んだら

まず俺たちはボランティア集めをしだした。以前はヒヤマやアンリ、官邸のメイドや使用人などを動員できたからボランティア0人でもなんとかやっていけたが、さすがに今回はボランティア0人ではやっていけない。

まず人員が必要な作業としてポスター貼りがある。デザインをきめて、コピー機で印刷をして、島内の各所に張るという作業をしなければならぬ。次にチラシ配りである。自身の立場を表明するための政策などを示したいいわゆるマニフェストと言われるものを選挙期間中に配らなければならない。さらに事務所における色々な事務作業にも必要である。

俺はちやぶ台の上で頭をかかえた。

「しかしどうするか、以前の選挙において新聞で募集しても全く集まらなかったものを……」

そもそも何の見返りもなしにこんなことをする人間がいくらいるんだ？ ポスター貼りやチラシ配りなんぞ面白くもなんともないだろう。

「やっぱり金払って集めるしかねえのかな」

「うーん。全くできないわけじゃないと思うけど」

「何か当てがあるのか？」

「要は金銭を与えるんじゃないかと、別の物を彼らに与えればいいんじゃないかな？」

昂は先ほど切ったキュウリのぬか漬けを食べながら言った。

「別の物？」

「ちよつと行ってきました」

昂はエブロン姿（もちろん今は下に洋服を着ている）のまま外に出て行った。

「え、おい待てよ」

昴がどこかに行ってしまったので、俺はポスターのデザインを考
えることにした。

3時間後、昴は息を切らして帰ってきた。

「おまたせゝぜえはあぜえはあ」

「どこに行ってきたんだ？」

「お父さんの友人で、町内会の一番若い人、その人に人を集めても
らったの」

「コネでどうにかなる問題かな」

「やっぱり新聞で話すより直接話したほうがいいよ。色々新聞には
載せられないことも話せるし」

「ふーん。じゃあ後日、集まったときに期待だな」

俺があまり期待もせずに、ポスターのデザインの続きをやりはじ
める。

「もうそんなことは後にして、直衛も来るんだよ。外で待ってるん
だからね」

昴が俺の腕を引っ張ってドアの方へ引きずっていった。

「え？ もう来てるの？ しゃあねえなあ」

どうせ1、2人だろと思ってドアを開けて、アクビをしながら、
階段を降りていく。

階段を降り終わって、あくびをして空を見ていた顔を地平線にも
つていくと、そこには

まるで祭のような人だかりができていた。

「あ、あれ？ これは夢ですか？」

昴は俺の頬を引っ張った。

「痛い？」

「あんまり痛くない」

昴が俺の頬をビンタした。

「痛い？」

「痛いけどこれくらいじゃ夢かどうかわからない」

「うーん」

昂は俺の頬に拳銃を突きつけた。引き金に手を掛ける。

「痛」

「それ死ぬがな！」

「もう、夢じゃなくて現実だよっ！」

俺たちに気づくと彼らは整列した。どれもこれも若い、ほとんど学生のように見える。

その中の1人が俺たちの前に出た。

背が高く、色黒な少年だった。

「中村昂様、中村直衛様、こんにちわ、中川リユパータスと申します」

「ああ、こんにちわ……ほんとにボランティアなの？」

「はい」

「本当にいいの？ アルバイト代とか出せないよ？」

「かまいません」

「……なんで来たの？」

「はい？」

「いや、お金ももらえないのに、ポスター配りとかチラシ配りとかよくする気になったなとおもってさ」

「私たちの親、友人、親戚は特警委に捕まったものたちです」

俺はその言葉で全てを察した。

「つまりフィアが再選しないように、対抗馬である昂についたと」

「それだけではありません。昂様が以前から移民政策論者で民族融和政策をしていたことを知ったからです。昂様が直接、学校や集会所に回って教えてくれました。昂様は素晴らしいお方です」

昂はえへへそんなことないよう〜などと頭に両手を当てて、顔を隠していた。

そういうことか。つまり昂が与えたのは金銭でなく、名誉なのである。反移民政策の被害者である彼らは、フィアのやっていることは間違っていると思っっている。つまりフィアは悪だと認識している。

それに対抗する存在として昴は自分が移民政策論者だと皆に言ったのだ。こんなことは触れ回らなくても皆最初から知っている、為政者は思ってしまうがそれは違う。

何故なら「国民というのはものすごく物忘れをしやすい」からだ。それを証拠に、フィアがヘルコマンダーとして知られていた事実もすぐに忘れられている。前大統領の政策など2ヶ月も経てばすっかり忘れているだろう。こうして昴の選挙活動を手伝うことによって、正義を全うすることができ、これが彼らにボランティア活動をするこのモチベーションを与え、その動機ともなったのだ。何人も人が行動する原理とは金銭だけではなく、同族愛といったような善意からも行動を起こすのだ。

「よし、じゃあ、さっそくポスター作りしてくれ、マニフェストは3ヶ月前のがあるからそれを配ってくれ」

「はい！」

そして彼らは精力的にボランティア活動をした。

しかしすぐに問題が発生してしまった……

俺はちやぶ台に手をたたき付けた。

「だめだ！」

ちやぶ台の上には、今日発行されたワシントンオラパがあった。そこには各候補の支持率が乗っていた。

ランフォード・フィア 60%

ナカムラ・スバル 15%

井上・ニミッツ 5%

どの候補も支持しない 20%

「以前の選挙時から5%しか変わっていない！」

リユパータスは困ったような顔をした。

「やはりポスター貼りやチラシ配りだけではだめなのでしょうか。どぶ板選挙や演説もするべきでは？」

「どぶ板選挙は1週間前からはじめている」

「それでこの数字ですか……」

今、昴はどぶ板選挙のために各家を回っている。しかし、1ヶ月で回れるのはせいぜい島民の15%だ。しかもどぶ板選挙は効果が高いとはいえ、彼ら全てが昴に入れてくれるわけではなく、効果も限られてくる。これでは45%もの支持率の差を埋められるものではない。

「演説も……はつきり言っただけは演説が全くうまくない。以前の選挙で大失敗したことがあってな」

「でもこのまま何もしないで手をこまねいていたら確実に負けます」

「くそ、どうすればいいんだ！」

「私たちはほとんど素人ですから、もっと選挙活動に詳しい人がいればいいんですが」

俺は半眼で何も表情を変えずに政治手法を次々と話すあいつのことを思い出した。

（あいつならもしかするとこの状況をなんとかするかもしれない。

だがだめだ。あいつが、一番憎んでいるだろう昴の手伝いをするはずがない）

その時、玄関先から声がした。

「お困りのようですね？」

夕暮れの逆光の中でふわふわのメイドカチューシャが風に揺れ、白を基調とした地味なメイド服をきた女性が刀を背中にしよって、腕を組みながら立っていた。

俺はその姿を見て、心臓が跳ね飛ぶかと思った。

「おまえ、なんでここに」

「お久しぶりです、直衛様」

そう、アンリである。

彼女はいつもの半眼をしていたが、素性を隠すために口元に真っ黒なマスクをつけていた。

「誰ですか？」

リユパータスは訝しげな顔をした。

「ふっふっふっただの通りすがりのNINJAですよ」

「NINJA！ 日本生まれですか？」

「ええ……江戸っ子NINJAです」

「ワオ！」

「いやいやいや、彼女は昴の元メイドの……」

「し」

アンリは唇に人差し指をつけた。

（私が特警委だとばれると困ります。彼らの親族を捕まえたことのある私がここに来たと知ったら怒り狂って追い出されるに決まっています）

（もう、特警委は辞めたのか？）

（辞めてはいませんが、もう逮捕者は出さないようにしてます。

フィア様には偽の書類を送ってね……部下達は不満たらたらずけど）

（なんでそんなことをしているんだ？）

（疲れたんですよ。もうね。罪もない人間を捕まえるのは……）

アンリは寂しそうな表情でそう言った。

俺はそれ以上聞くのは止めた。たぶんアンリにも心情の変化があったのだろう。ともかく元の優しいアンリに戻ったみたいだった。

リユパータスは興奮していた。

「わかった！ 江戸っ子NINJAさんは、分身の術を使って投票数を増やすんですよ」

「違います。そもそもそれは不正投票です」

「じゃあ、幻惑の術を使って、島民を洗脳してこちら側に投票させるとか！」

アンリは顔中に血管を浮かばせながら、リユパータスの頭の髪の毛を抜き身の刀でザクザク斬りながら言った。

「あなた実はアホの子ですか？ 頭つまってますか？ 髪の毛の下に本当に頭あるんですか？」

「ヒイイイ N I N J A の暗殺術怖い！」

ついでにアンリの怖さも戻っていた。

「それでアンリ、その手というのは？」

おしっこちびって腰を抜かしているリユパータスを放っておいて、アンリはちゃぶ台を叩いて言った。

「【選挙協力】です」

「選挙協力ってなんだ？」

「昂様とフィアの支持層ってわかりますか」

「支持層……ごめん考えたこともなかった」

「いえ、卑下なさらないでください。今まで政治活動していなかったのだから当然です。」

昂様は主に保守的な農民層に人気があります。父親の支持基盤を受け継いだことが理由です。フィアは主に都市部のサラリーマン層に人気があります。元々軍人として有名だったことで新聞などをよく読む層に知られていたからです」

「そうなんだ」

「ですが、この島には農民層とサラリーマン層だけではありません、日雇いのウェイトレスなどの飲食店勤務、富裕層の家を造る建設作業員、年金暮らしの老人など、それ以外の層もあります。農民層は全体の10%、サラリーマン層は30%、その他の層は60%です。我々を支持しない選好を持つこの【その他の層を吸収する】のです」

「どうやって？」

「そのカギはこの人物です」

アンリは新聞の端に乗っていた候補者の井上・ニミッツを指さした。

「彼に立候補を取りやめてもらって、彼を支持する層の票を吸収します」

俺はアンリが何を言っているかわからなかった。無茶苦茶なことを言っているように思えたからだ。

「ちよっとまで、取りやめてもらってそんなことできるのか？」

「取りやめてもらう代わりに、次の議会の中間選挙で全面的に大統領がニミッツ氏の派閥を支持することを表明します。彼の支持率はたった5パーセント、勝てるみこみの無い選挙で戦うよりも、中間選挙で地盤固めを行うほうがはるかに合理的だと判断するはずです」

「いや、それでもだ。苦勞して5パーセントの支持をとつてもしょうがないぞ」

「支持率低迷の原因はニミッツ氏が彼の属する派閥のなかで人気がないからです。そのおかげで彼の立候補に反感をもった人間達が對抗馬のフィアに支持を表明しています。5%はみかけ上の数字、彼の派閥には実際にはもつと支持層が隠れています」

「嫌われ者なのか」

「はい。ニミッツ氏が元々官僚上がりで収賄の噂に堪えませんでしたから。ニミッツ氏の派閥が昂様支持を表明すれば、かなりの数の票をニミッツ氏とフィアから取れるでしょう。」

このように【選挙協力とは連合する他勢力に投票するようにし向ける選挙手法】です」

アンの策は確かに魅力的だ。1週間これだけ苦勞して5%しか支持を勝ち取れないのに、選挙協力をすれば、確実に5%の支持を得られ、さらにフィアからも支持を奪い取れるとすれば、これ以上ないほど良い。ただ、実現性はそこまで高いとは思えない。相手だつて、この選挙に巨費を投じているだろうし、勝つ自信があるから出て来たのだ。それを簡単に取りやめて、こちらの支持をしてくれなどと、了承してくれるだろうか。俺が候補者だつたら怒つて断つてしまつだろう。

だが実現性は低くてもやるしかない。このままでは座視て死ぬだけだ。

「他に方法が無いんだな」

「はい」

「よし、【選挙協力】やってみよう」

こういつた選挙協力は、先の衆院選でも民主党が社民党及び国民

新党と連携する形で導入している。民主党は都市部に基盤を持ち、国民新党及び社民党は農村に一定の支持がある。社民党に関しては社会党時代に民主党に行かなかった議員が社民党として残ったためであり、国民新党に関しては郵政族といわれる議員が農村部に集中しているからである。

この選挙協力によつて、社民党、国民新党の支持者を獲得した民主党は苦手とする農村部でも自民党を圧倒し、そして結果は皆ご存じの通り民主党単独で過半数の衆院議席を獲得したのである。いかに選挙協力が強力な選挙手法かを物語っている。

「はあい、回つてきたよ。直衛！今日は疲れたから、布団の中で早く一緒に寝よ！」

昴が手を挙げて帰ってきた。そこでアンリのことを見て驚く。

「え、何？ N I N J A？」

「ええ、N I N J Aですが……」

アンリはぴくぴくこみかみに血管を浮かべていた。

「わお、直衛色んな知り合いいるんだね！ま、そんなことどうでもいいから、布団しいて寝るよ」

アンリは刀を抜いて、ちゃぶ台の端を切り捨てた。

「はあはあ……そういうハレンチなことはやめたらどうですか？スキャンダルになりますよ？」

「いいんだよ！私たちは夫婦だから」

「ふ、夫婦う？」

昴は俺に抱きつく。アンリがマスクをモゴモゴさせて、マスクの下でギリツと歯ぎしりをする音が聞こえる。

かすかにアンリが口の中で言っている声が聞こえた。

（後で殺す後で殺す後で殺す後で殺す後で殺す後で殺す後で殺す後で殺す後で殺す）

「おゝん。今日は別々の布団で寝ようか」

アンリの歯ぎしりがとまって、目を三日月にしてにんまり笑って

いた。

「ええ、直衛、私のことやっぱり嫌いになったの……」

昂は涙目になる。

昂の涙は見たくない。

「ち、違うよお。そ、そうじゃないよお」

「良かったあ じゃあ一緒に寝よ！」

ギリギリギリギリ

アンリが歯ぎしりする。

「ど、どうすればいいんだあああああああああああ
あああああああ」

とりあえず折衷案として、俺を真ん中にしてN I N J Aを左に昂を右に寝かせた。

昂にはNINJAによって身辺警護するためと言っておいた。

というわけで、翌日、昴と俺とアンリでニミッツ氏の選挙事務所に行って、選挙協力を願ったわけだが。

「なんで俺が出馬を取り下げねばならんのだ！」

ニミッツ氏はバーコード頭から沸騰するような蒸気を上げて怒り狂い。机の上にあった椰子の実を窓に投げつけて、ガラスをブチ割っていた。

(で、ですよねぇ)

と俺はぼそつと言った。

NIJJA姿のアリが机の前にならずに出て、目玉を飛び出させてニミッツを睨み付けた。

「いえ、ですから勝ち目の無い選挙を捨てて、ニミッツ氏の党派が中間選挙で勝ったほうがお互いに有益ではありませんかと述べているのです。いくらなんでも支持率5%じゃ勝ち目は全くありません」

ニミッツは微動だにせず、あの怖いアンの顔を手で前に押しのけた。

「勝ち目が無いかどうかは私が判断することだ！ 君たちにどうこ

う言われる筋合いはない！　そもそも中間選挙で私の党派が勝つても党としては利益になるが、私には何の利益もないじゃないか！」

（うん。まあ正論だな）

（ちよつと直衛様も黙ってないで何とか言ってくださいよ）

（そういわれても……こつちだつて自分の利益のために降りろつて言つてゐるわけだし）

（そんなこと言つてゐる場合じゃないでしょうに）

昂の方は半分口を開けてばあつと突つ立つてゐただけだつた。しかし昂も選挙に落ちてから大人しくなつたのはいいんだが、こういうときは昔みたいに自信満々に啖呵切つてほしいもんなんだが。

「あ、直衛、今日の夕飯は白身魚のフライにしましょう」

「何だこの小娘は」

昂……ぼけぼけになるのはもうよしてください。

「そんなんだから、あんな軍人上がりの素人に負けるんだ。お前も大統領になつてたときは公費でじゃんじゃん遊んでうまい飯食つてたんだろ？　自分だけおいしい思いをしようつたつてダメなんだよ」「いや、俺の知る限り昂は公費に手をつけたことは一切無かつたが」「嘘をつけ、それじゃ大統領になるのは、あんな課長程度なら誰でももらえる安い給料のためか？　そんなわけがない。少しくらい横領してたんだろ？　ん？」

「ちつ、ちがうよ。島民みんなの生活がよくなるように仕事してたんだよ。島民の税金を盗んだりなんかしてないよ。私が選挙に出るのは、フィアが島民のみんなに酷いことしてるから」

昂は顔を赤らめて反論した。

ニミッツは大声を出して笑い出した。

「ハハハ！　下らん下らん。政治つてのはな。癒着企業に利益を誘導して、そいつらから献金をもらい、懷を暖めるためにすることだ。島民のためなんて、ご託並べるのは餓鬼のやることだ。有権者つていうのはな……馬鹿でノロマで権力者に搾取されるために存在しているんだよ」

俺の脳裏にあのウエイトレスや市場で下を向いて座り込んでいる失業者達の顔が思い浮かんだ。あいつらが搾取されるために存在してきたって？ あいつらはただ、権力に翻弄されてるだけじゃねえか。なんであいつらが搾取されるために存在しなければならんだ。

俺はその言葉に切れた。

「てめえは大統領に立候補する資格はねえ！」

「ああん？」

「大統領つてのはよ。島民を幸せにする義務があるんだよ。それをてめえははなつから放棄しちゃってる。ただ単に私利私欲のために、公費を好きなように使い込むために大統領になろうとしてる。そんな奴は大統領になる資格はねえ！ てめえが支持率低いのも当たり前だ！ この銭ゲバ野郎！」

「なんだと……だまって聞いておれば、おい、誰かこいつらをたたき出せ！」

周りにいた秘書達が俺等を羽交い締めにする。

そして俺たちは事務所から追い出されそうになったそのときである。

「待つんじゃ！」

事務所の中に、1人の着物を着た老人が入ってきた。

「た、大老！」

ニミッツはその姿を見ると、驚き仰け反る。

（大老？）

（彼はニミッツが所属する派閥【ビーブ】でもっとも力を持っている議員です。現在は隠居しているそうですが、昂様の父親時代にはその豪腕さでよく知られたそうです）

「お前の応援演説に行こうかと思っけてきてみれば、さっきの話はなんだ」

「こ、こいつらが悪いんですよ。いきなり出馬を辞めると言い出すから」

「収賄を肯定するような大統領など国の恥。 昴元大統領の言うとお
り、お前は出馬を辞める」

「しかし……」

「辞めろと言ったのが理解できんのか！」

「う、うるさい！ 隠居老人が俺に指図するんじゃない！ ジジイ
は家で盆栽でもいじってればいいんだ！」

「見苦しいな。 本当に。 お前が辞めなくても、私は昴元大統領を支
持することを明日表明しよう。 そうすれば、ビープ派の島民はこぞ
つてお前を捨てて昴元大統領を支持する。 お前がかるうじて5%と
いう数字を出しているのはビープ派という看板だけだからな。 お前
が出馬をしようとしまいと、派閥の応援を得られない貴様は落選
じゃ」

「こ、こ、このジジイイイイイイイイ」

ニミッツは飾ってあった壺を振り上げて、その老人の頭にぶちあ
てようとした。

しかし一閃、アンリは背中にかけていた刀を抜き去り、かすかに
白い剣筋を見せて、壺をたたき割った。

老人は壺に入っていた水でずぶぬれになった。 そして老人は口
に入った水をぺつと吐き捨てる。

「ペツ、最後は暴力で屈服させようとするのか。 ふん。 人間落ちる
と大抵パターンは決まっておるな」

アンリの刀がニミッツの首もとに突きつけられ、ニミッツは額か
ら汗を垂らしてその場から動けなくなっていた。

「く、くそお！ くそおおおおお！」

ニミッツは後ろに2、3歩後退すると、裏口から走って逃げてい
った。 それを追うように彼らの秘書も外へ逃げ出していった。

「あ、ありがとう爺さん、おかげで助かった」

「いやなに、孫が世話になっておるからな」

「孫？」

「リュパータスはわしの孫じゃ。 どうも奴の恋人のウェイトレスだ

かなんだかが、特警委に酷い目にあつたらしいでの。怒り狂つて對抗馬の昴元大統領のボランティアをやりだすといいおった。わしはもう隠居の身で政治には関わっておらなんだが、まあなんというか、孫を影ながら支援するというのがの」

「ありがとう。爺さん」

「あ、そうそうこのことは内々のことにしてな。あいつはプライドが高いから貸しを作るのを嫌うからの。ほっほっほっ」

そういうと爺さんは事務所から消えた。

何はともわれ、ビーブ派の選挙協力は取り付けたわけだ。

「くそっ、あのジジイめ。ん、ちょっと待てよ、あのNINJA姿のメイドどこかで見たことあるような……そうだ。あいつ特警委の委員長やつてる奴じゃないか。このことをフィアに言えば、くくく……面白いことになりそうだ。俺だけ落ちるなんてゆるさねえ、あいつも道連れにしてやる！」

「ん？」

俺はニミッツの事務所から昴の家への帰り道、誰かの声が聞こえたような気がした。しかしそれは空耳のようにか細くて、結局すぐに忘れてしまっていた。

そして、選挙日まで2日を切った。

各候補の支持率

ランフォード・フィア 50%

ナカムラ・スバル 30%

どの候補も支持しない 20%

「大分縮まったが、これじゃあまだ全然足りない……」

俺は電話を手に持ったまま、ちゃぶ台の上で首を垂れていた。

ボランティア達は忙しく歩き回り、昴もどぶ板選挙でここにはいない。

どうする？ 後3日しかないんだぞ。20%の差を縮める方法は

あるのか？

俺は電話越しにアンリに話しかけた。アンリは今日はまだ仕事であつた。

「なあ、何か手は無いのか？」

「難しいといわざるおえませんね……正直、【地上戦】ではもはや限界かもしれません」

「地上戦？」

「固定票を確実に確保していく選挙手法のことです。いわゆるどぶ板選挙や選挙協力ですか」

「じゃあ地上戦以外にも戦い方があるのか？」

「【空中戦】というものがあります」

「どういうものなんだ？」

「浮動票狙いの宣伝活動ですね。演説やラジオや新聞広告などで票を確保することです」

「演説は……昂には」

「ええ、難しいでしょうね。以前に大失敗しましたから、ラジオも新聞広告もお金がないからできません」

「もう無理なのか？ 俺たちは結局無謀なことをしていたのか？」
「諦めてはいけません。選挙は投票箱を開けるまでわからないという格言もあります。情勢次第で勝ち負けは簡単にひっくりかえるものです。あ、すいません。ちょっと部下によばれたので失礼しますね」

ツーツー

切れてしまった。

空中戦……か。

演説はあいつ、無茶苦茶なことを言いそうだからな。いや、確実に言うだろう。はっきりいって、支持率がプラスどころかマイナスに作用する可能性も全く否定できない。

しかしやるしかないか。やらなきゃ落選だ。とにかく趣向を凝らして、成功させるように努めるしかない。

「回ってきたよ」

昴が帰ってきた。

「ふう、疲れたあ、じゃあ今からご飯作るね」

「いや、今日は俺が作るよ」

「いいよ、こういふのは奥さんの仕事だぞっ」

「後3日も頑張らなきゃいけないんだから、休んどけ」

「えゝでも……」

「いいから」

俺はフライパンに油を引いてガスコンロに火を点けた。今日は何にしようか。

うーん。最近野菜が少ないから、野菜炒めにでもしよう。

ベーコンとキャベツを切ってから、まずベーコンを焼いていった。料理はホテルでアンリに指導してもらいながら作ってたからかなりうまくなったと思う。

昴は暇そうにもじもじしている。俺の方をちらちら見たり、新聞をパラパラめくったり、せわしなかった。そのうち俺の方に駆け寄ってきた。

「や、やつぱり手伝うよ」

俺はまるで子供みたいな昴をふつと笑った。

「じゃあまあニンジンとタマネギ切ってくれ」

「うん。わかった」

昴はぎこちない仕草で料理をしていた。包丁を持つ手も危なっかしい。はつきりいつて昴は料理がうまくない。子供の頃はずっと勉強していて高校生くらいから、ずっと大統領の執務をしてるんじゃ、料理を作る暇もないから当然だけどな。

「気をつけるよ」

「あっ」

昴の指から血が垂れていた。

「ばっかお前！」

俺は急いでコンロに点いた火を消す。

「あ、あわ、血が、血が」

「じゃこれで一時的に止血」

俺は昴の指を舐める。

「は、はう……」

昴は顔を真っ赤にして俯いた。

俺は、急いで棚から絆創膏と消毒液を取ってきた。消毒液を塗って、絆創膏を貼ってやった。

「あ、ありがと直衛」

「あぶねーからお前そこで座ってる」

「うん……なんだか直衛に頼ってばかりだな私」

「いーんだよ。女が男に頼るのは当然だ」

昴はちよこんと座布団を敷いて床に座った。

「ねえ、選挙どうしようか」

俺は切った野菜を手づかみでフライパンに入れていった。そこに醤油をかけていく。

「NINJAが言うには空中戦をした方がいいらしい」

「空中戦？ 私は蛸に乗って爆弾降らせるなんてできないよ」

「戦闘じゃねえよ。演説だよ」

「そ、そっか……でも演説は怖いからやだ」

フライパンを返した。

たぶん、昴はあの時の失敗した演説のことを思い出しているんだろう。いくら話してもこちらの話を聞かない民衆達、馬鹿にしたような目線。色んなものを投げつけられた思い出。それが彼女に恐怖を思い出させているのだ。

「でも……やるよ」

「え？」

俺は驚いて空中に浮かぶキャベツをフライパンから落とすようになった。

「だって、私がやらなくちゃ、選挙に落ちちゃうし、それにもう島民のみんなが暗い顔しているのは見てられないよ。フィアのやり方

は間違ってる」

彼女は体を震わせて、自分自身を抱きしめながらそう言った。

「昂……」

俺は野菜炒めを皿に盛り合わせるとちゃぶ台の上に置いた。

そして震える彼女を俺は後ろから抱きしめた。

「じゃあ二人で頑張ろうな」

「うん！」

俺たちはほくほくと醤油の香りたつ野菜炒めを二人仲良く食べていた。

もしも高校生の俺がさらわれたメイドを助けに行ったら

それは5時過ぎ、窓からわずかに白い陽の光が入ってくる時間帯だった。

トゥルル

トゥルル

トゥルル

こんな時間に何の電話だろう。

俺は隣にすうすう寝息を立てて俺にしがみついている昴を起こさないよう、ゆっくりと手をどけて、受話器を取った。

ガチャ

「はい、ナカムラ・スバル事務所」

「直衛……様、中村……様、助けて……はやく」

アンリの声だ。

「おいどうした！ アンリ！」

別の人間の声が聞こえる。

「さて拷問の続きをしようか。お前、ちゃんと顔上げて顔見せる！ 下を向いてちゃ蛍光灯の影になって顔がみえねえだろうが！」

ん？ 何やってんだ！ お前、さては仲間に連絡しようとしてたな」

「私は……」

ツーツー

俺は受話器を持ってしばし呆然となった。

何だ？ 一体どういうことだ。アンリの身に何かあったのか？ いやまて混乱するな。冷静になれ、なるんだ！

俺の心臓の鼓動が早くなり、体中の血流が熱を乗せ体中を駆けめぐる。脳みそが火照って思考がとぎれとぎれになり、体中からアンリを危険にさらした人間に対する怒りがこみ上げてきた。

理性を持たぬ情動は常に人を破滅させる。

俺は必死で心を落ち着かせた。

深呼吸して呼吸を整えたあと、思考をめぐらせた。

そして思い出す。ニミッツの事務所の帰り道に聞いた言葉を。あれは空耳じゃなかったんだ。ニミッツがフィアにアンリが昴の手伝いをしていることをばらしたのだ。

着信履歴を見ると、アンリがいつもかけてきている特別警察署から掛かっているのがわかった。

やはりそうだ。

じゃあどうする。

そんなもの助けに行くしかないだろう！

だが、1つだけ助けに行くにしても懸念があった。

「ふえ？ 直衛、起きるの早いね」

昴が目を擦りながらパジャマ姿で起きあがった。

昴の演説である。

俺がいらない中で昴は演説できるだろうか。昴は民衆の前に立つことを恐れている。全くしゃべれないまま演説を終わらせてしまうかもしれない。

だが悩んでる時間は無いんだ。

「昴！ 原稿用紙はちゃぶ台の上に置いておくから、リユパータス達と演説の設営をしていてくれ！ 俺はちよつと用事ができた！」

「え？ ちよつと待つてよ。私1人じゃできないよ」

「ごめん。でも俺は行かなくちゃならないんだ」

昴に事情を話すわけにはいかなかった。アンリの身に危険が及んでいるとわかったらとても演説に集中するどころじゃない。アンリを助けても、選挙に落ちたら、まず間違いなく、特警委達が昴と俺を逮捕しにくるに決まっている。現在は選挙期間中だからそんなことはできないが、選挙が終わったらやりたい放題だ。選挙に勝って、アンリを助けないといけない。

俺が外に出ようとすると、不安そうな顔つきの昴が俺の服の裾を掴んでいた。

「アンリのところに行くの？」

どこでわかったのか。いや、女の勘という奴なのか。

「そうだ」

「もう、私を1人にしないで……アンリに不倫してもいいから、だから」

「不倫じゃない」

「じゃあなんでアンリのところに行くの？」

昂は不安でいっぱいなのだろう。俺にずっと一緒にいてほしいのだろう。

ただ、俺は全てをかなえられる魔法使いじゃない。分身の術を使える忍者でもない。今、できる最善のことをする人間でしかない。今できることは1つしかなかった。

それは自分自身の言葉を誠心誠意伝え、昂を納得させることだった。

「帰ってくるから」

「え？」

「俺は絶対帰ってくるから。俺を信用してくれないか？」

「や、やだよう、もうどこにも行かないで、みんなみんな消えていっちゃうから！ 直衛だけはずっと傍にいてよ！」

俺は彼女の涙を手ですくった。

「約束だ。絶対帰ってくる。そしてあの大統領の時の生活に戻るんだ」

昂は困ったような表情をしていた。しかし、数秒後、上唇を噛んで、目をめい一杯瞑って、こくと頷いた。

「わかった。だけど……絶対、ぜえったい！ 演説しているときには絶対に帰ってきてね！」

「ああ当然だ！」

俺はそして、玄関を出て、アンリのいる特別警察署へと走っていった。

昂の演説が始まるのは12時前後、それまでなんとしてもアン

りを助けて、演説会場である教会前に行ってやる！

昴のアパートから特別警察署までは幾分距離がある。きちんと舗装された道はかなり迂回するので、俺はジャングルの中を駆けていった。

ジャングルの中は朽ちた木にひっかかりたり足を切り刻む鋭利な葉を持つ植物があったり、また空気の充満した見かけ上は踏めるが、実際はすかすかな腐葉土に足を取られたり、足を踏み外して崖から転落する恐れがあるなど非常に危険な場所だ。大統領官邸の周りは人が作った獣道によっていくばくか安全だが、ここはそれらない。俺は体中傷だらけになり、転んで泥だらけになっても走ることをやめなかった。アンリのために俺の体はどうなってもよかった。だが正直、走っても昴の演説に間に合うのは難しい。走っても片道5時間は掛かるだろう。

だが走るしかない。走るしかないのだ。そう思い俺は走り続けた。しかし俺の思考がそこで止まった。そして足も止まった。

俺はじつとぽっかりと開けた場所で、下を向いて考えた。

何故俺がこんなところで足を止めたのか。

それはよく考えるとあの電話はおかしかったからだ。

アンリが言っていた言葉を思い出した。

（うちはエコだとかなんとかのせいで、退社時刻の夜11時から出勤時刻の朝8時まで電気消えて閉まっちゃうんですよ。だから私は夜11時を超えて、特別警察署にはいません）

そして左記が電話で言っていた何者かのセリフだ。

（さて拷問の続きをしようか。お前、ちゃんと顔上げて顔見せろ！ 下を向いてちゃ蛍光灯の影になって顔がみえねえだろうが！ん？ 何やってんだ！ お前、さては仲間連絡しようとしてたな）「蛍光灯ってなんだ！ この時間帯に電気は点かないはずだぞ。いやでもちよっとまで電話の着信履歴には特別警察署が出ていたはずだそれはどういことなんだ？」

【もしかして、あの電話は罠なんじゃないか】

俺たちが特別警察署に来たら、そこで俺たちを拘束する。そうすれば、選挙期間中ずっと拘束したり、また不慮の事故と称して殺してしまったり、脅して出馬を取り消させることも可能だ。

大体、中村様ってなんだ。アンリはいつも昴様か、元大統領としか昴を言わないぞ、そもそもアンリの性格から考えて、あいつはこういうときに俺に助けを呼ばない。何故ならあいつはいつも1人で抱え込んで何も喋らない奴だから。何ヶ月も一緒に居れば、相手の性格くらいわかる。おそらくあれはアンリの音声を拾って、それを編集したんだろう。

そしてアンリが拘束されていることは事実だと考えて間違いない。何故ならその電話をしている最中にアンリがひよっこり昴のアパートに現れたり、電話をしたら計画が台無しになるからだ。

つまり、アンリは特別警察署にはいない。別の場所に拘束されている。

問題はその場所がどこなのかということだ。

「ん？」

ジャングルの中に人影が通ったような気がした。こんなところに人がいるのか？ たしかあっちの小川の方に……

俺が歩いていくと、そこにはまっ黒いメイド服を着た特警委が辺りをきよろきよろ見回しながら歩いているのが見えた。そしてこっちの方を見る。

やべ

俺は慌てて木の裏に隠れた。

その特警委は辺りを警戒しながら、小川を渡っていった。

（あっちには確か、旧日本軍の司令部施設があるはず、最近観光客も反移民政策で評判が悪くなったことが原因でほとんど来っていない。人を隠すにはもってこいの場所だ）

俺は旧日本軍の司令部施設まで先回りをした。

司令部施設の周りには予想通り、特警委達がたむろしていた。2、3人が周りを見て、非常に警戒した様子である。

とそこにさつき追い越した特警委が現れた。

「交代だ。お前はあっちの方へ行ってくれ」

「嚴重に監視しとけよ。観光客が間違えて入ってくるかもしれん」

「あのスパイ委員長殺してしまったほうがいいんじゃないか？」

「後々取引材料になるから生かしておけということだ。選挙期間が終わったらどうなるかは知らんがな」

「ふん」

そして1人はどこかに去っていった。

アンリはあの中にいるようだ。問題はどうかやって潜入するかだな。司令部の入り口には刀を持った特警委が2人いる。武術も何もやっていない俺じゃ1人も倒せやしないだろう。何か手は無いものか。その時、足におかしな感触があった。そこはぶかぶかしていて、足がずぶずぶと葉っぱの下に沈んでいくのだ。

そういえばここは……アレがあつたはずだな。

俺は急いで、アレへの入り口を探しに回った。

「ふん。まさかお前が裏切るとはね……」

アンリは椅子に縛り付けられ、フィアの拷問を受けていた。

フィアはベレー帽に迷彩服のいつもの軍服を着て、手のナイフをくるくる回している。

アンリは体中にナイフで斬りつけられたキズがあつた。フィアは手のひらにつけられたアンリのキズをナイフでえぐる。赤黒い血がじわっと骨の間から吹き出てきた。

「ぐっ……うう」

「ふ、イラク掃討作戦の時を思い出すな。このナイフで何度もレジスタンス共のキズをえぐったか」

「趣味の良いことをしてますね」

「そうそう、趣味の良いボクはそいつらの金歯と骨でアクセサリ―

作ってみたの、みる？」

と言うと、ポケットから尖った骨に金歯が刺さったペンダントのようなものを取り出した。そしてそれを手のひらの傷口に押し付ける。

「ぐう！ はあはあ……この拷問に何の意味があるんです？ 私をいくら痛めつけようとも、昂様の居場所は吐きませんよ」

「別に、お前に聞かなくても居場所はとくに割れてるよ」

「なっ……？」

「署の中で電話したのはうかつだったね。あそこの電話は全て盗聴されてるの。特警委じゃなくて軍人に。お前を完全に信用しているとも思ったの？ 電話番号から住所を割って、お前の電話の声を合成して、私に恥をかかせたあの男と元大統領を署に呼びこんでおいたわ。ま、今頃二人は特警委の刀で斬り刻まれているところだね」

「そんな……じゃあなんで先ほどから私を拷問にかけているのですか？」

「ボクを裏切った人間が苦痛に歪むのが楽しいからだよ！」

「どんな理由かと思えば、下らない……」

「裏切り者には死を！ 全ての苦痛を！ これは神が下すジャスティス！ ははは……貴様等愚民共はボクが指導し導かねばならないの！」

「指導し導く？ 反移民政策で、経済を破綻させ、何の罪も無い人間達を逮捕し、島民達をお互いに反目させてきたあなたはどこへ我々を連れて行こうですか？ 地獄ですか？ 冥府ですか？ それともあんなの下らない脳みその中にしかない理想郷なんですか！」

「理想郷は存在するよ。島民による島民のための島民だけの政治。ヤツラのいない政治。ヤツラは1人もこの島に入れちゃいけない。ヤツラは私の友人を、部下を、そして私の夫を殺した。そう、イラクでヤツラは一回の爆発で全てを殺してしまった。ボクは独裁者から彼らを助けるために来たのに……」

ヤツラは何を考えているかわからないよ！ ヤツラは血と鉄で打倒

するしかないよ！ 私から全てを奪ったヤツラを決してボクは許しはしない！」

「あなた……」

後にわかったことだが、フィアはイラク滞在中に爆弾テロで夫を亡くしていた。それからのフィアは抜け殻のようであったという、家では何もせずにはおつとしているだけ、人が訪ねてきてもほとんど虚ろの状態であった。そのまま自殺しそうな様子すらあった。しかしある時を境に彼女は精力的になり、大統領選に出たいと周囲にもらすようになったという。彼女の心の転機には、1つの事件が関わっていた。あるフィリピンからの移民が麻薬密輸の現場を押さえられて、車で逃げ出し、そして、島民とともにもつていた爆弾で自爆したのである。その現場に彼女は居合わせたという。

そこで何があったのかわからない。

ただ彼女はもしかすると、【彼らのような犯罪者の移民から島民を助けなければならない】という【善意の志】を持ったのかもしれない。

そしてその善意の志は日に日に大きくなり、島民の幸せは島から移民を排除するのみにある。そう思ったのだらう。

人々の幸せは多岐にわたる。家族が欲しい。お金が欲しい。もっと便利な生活をしたい。その中のたった1つ。移民は怖いから排除したい。という欲求が増大した。彼女は人々の幸せをそのみであると考えた。この恐怖とは誰もが一度は思ったことだ。それ故、人は彼女に共感し、彼女と善意の志を同じくした。

だが1つの欲望だけが叶えられる社会は他の欲望を叶えることがおろそかになる。家族を欲さず、金を欲さず、便利な生活を欲しない。そんなことよりただ移民だけを排除したい。こんな歪んだヴァランスを持つ社会は財政基盤を崩壊させ、長く保ちはしない。

このように思想に囚われた社会、現代であれば共産国、古代であれば極端な宗教国家はすべからず財政ヴァランスを崩して、崩壊していったのである。

政治において一番重要なのは、適切なヴァランス感覚を持ち、誰にも不安を持たせずに行政を行うことにある。しかし私が知る限り……歴史上そんな完璧な政治をした人間は1人として存在したことがない。

「さあ、これも終わり、あなたのような裏切りものを殺して私たちは理想郷へとひた走るのよ」

フィアはナイフを振り上げ、アンリの胸にナイフを突き立てようとする。

だがナイフはスコップによってはじかれた。

「え？」

フィアは素っ頓狂な声をあげた。そしてゆっくりと顔を上げていく。

驚いただろう。そこにはスコップを持って泥だらけになっていた俺が立っていたのだから。

「よう、チンチンクリンの現大統領閣下」

「お前一体どこから！」

アンリは突然自分の後ろに現れた俺に驚いていつもの半眼をすこし大きくしていた。

俺はスコップの刃で縄を斬る。

「ちっ！ まだナイフはあるよ！」

フィアは腰についていたナイフを手にとって俺の腕の腱を斬ろうと軽く振っていく。

俺はスコップでガードしていく。

「おっと、軍人にはかなわねえから逃げることにするよ」

「はっ！ どこに逃げる場所があるの！ 隣の部屋に5人、外にも2人いるんだから！」

フィアは腕を組むと自慢げに自分のポニーテールをふわっさふわっさと揺らしながら笑った。

「お前なあ、そのすーぐ油断する癖やめたほうがいいぜ？」

「は？」

俺は、アンリをお姫様だっこする。アンリは髪の毛で目を伏せて、顔を赤らめた。

「しっかり捕まってるよ！ アンリ」

「は、はい！」

アンリは俺の首に手を回してがっちりしがみついた。

そして俺はトンと、スコップで地面を叩く。

すると、地面に大きな穴が空いて、俺たちはその穴の中に吸い込まれていった。

3 mくらい落ちたところで、俺は着地。

俺たちはほとんど前が見えない大きな洞窟の中に落ちた。

ポケットに入れておいたケイタイを取り出した。海外だからアンテナが立って折らず使えないものの、その光が洞窟の中を光らせる。万が一の時のためにケイタイの電源を切っておいてよかったな。

「ここは……どこですか？」

「日本軍の洞窟陣地だよ。ここら一体のジャングルの地下にはこんなのが張り巡らされてるんだ。知ってるだろ？ 俺は一回落とされたことを思い出してな。もしかしたら司令部の下にも通っているかと思ったらビンゴ」

「す、すごいです。直衛様。こんな方法で助け出すなんて、それにファイアの罠も見破ったんですね」

「まあな。それより、早くここから抜けだそう、あいつらもすぐ追ってくるだろうからな」

「はい。直衛様」

アンリを地面におろす。

「あ、もう少ししてもらいたかったんですけど……」

「え？ 何？ お姫様だっこじゃ歩くのに遅いだろ？」

アンリはちよつとむくれた顔をしていた。

「む、なんでもないですよ！」

俺たちは真つ暗な洞窟の中を駆けていった。

ずぼっ

俺は入ってきた穴から顔を出した。周りを見る。誰もいない。

俺は先に出るとアンリを引っ張って外に出した。

「これからどうするんですか？」

「昂のどこに行く。あいつ一人じゃ演説できないっていうからさ」

「どこで演説しているんですか？」

「教会、アンリも一緒にいかないか？」

「いえ、私は……正直、昂様には顔を合わせられません。もし合うんでしたら覆面をしてから」

「昂はあの件はそんなに気にしてないよ。実はお前との結婚届、あいつに見られたんだ」

「え」

「そうしたらあいつどうしたと思う？」

「拳銃であなたを殺してあたしも死ぬとか？ 昂様は暴れ回りそうです」

「そんなことしないよ。あいつは知ってるって言ったんだ。そう全部知った上でお前との仲を許してたんだと。アンリをクビにしたことずっと気に病んでたんだぜ」

「昂様は……私と違って心の広い方ですね」

「だからよ。もう一度あって……昔のように過ごそうや」

「そうですね。本当にありがとうございます。本当に」

アンリは俺の胸で涙を流していた。

「ラブコメはそこまでよ」

木の陰からフィアがほくそ笑みながら現れる。

俺はスコップを持って身構えた。

「昂は今、教会にいるのね」

「だからどうした！」

「私の友人に元スナイパーが居てね。その人は拳銃で200m離れた所からでも百発百中の腕前なの。昂さん、最近大人気だそうだから、一杯群衆が集まるでしょうねえ。で、そんな中にポケットに拳

銃を隠し持った誰かさんがいても全然わからないんじゃないかな？」

「まさか……」

「そう、今、その友人に連絡を取って、教会に行ってもらったわ！
ハハハ！」

「お前そんなことしたら、選挙に負けるぞ！」

「死んだ人間がどうやって立候補するのかしら？ 対立候補不在のまま
ま当選って形。ばーか」

「急ごう！ アンリ！ 昂が危ない！」

「ふん。逃がさない！」

俺たちの前にフィアが立ちふさがる。周りを見ても特警委はいない。どうやら、俺たちのところまでたどり着いたのはフィア1人のようだった。

俺の腕からスコップがすつと盗られた。

アンリがスコップを握って剣術の構えのような格好をしている。

「直衛様は昂様のところへ行ってください。ここは私が」

「おい、お前1人置いていけるわけがないだろう！」

「直衛様より私の方がはつきり言って強いです。それに、急がないと昂様の命が危険です！」

「でも！」

「話してる場合じゃないでしょ！」

フィアの投げナイフが俺の目の前に飛んでくる。アンリはそれをスコップではじき、その後すぐにフィアの方へ走りこみ、スコップの腹で思い切りアンリの頬を叩いた。

「いつつー、さすがに特警委員長に任命しただけあるわ。お前やっぱりものすごく強い」

フィアはぺつと口から血を吐き出し、ナイフを横にして、構えを取った。それからナイフとスコップの応酬である。フィアがナイフを突きだしたかと思うと、アンリはそれを避けて、逆にスコップの刃で斬りに行く、それをフィアが軽くナイフでいなして、逆にフィアは足でアンリを蹴り飛ばす。目にも留まらぬ戦闘に俺は度肝を

抜かれた。

「直衛様、あなたははつきりいつて邪魔なんですよ」

アンリの冷たい瞳が俺を突き刺した。確かに、ここで何の武器も持たない俺が割って入っても邪魔になるだけ、それより今は昴を助けに行くことが先決か。

「わかった！ 絶対に死ぬんじゃないぞ！」

アンリはこくりと頷き、フィアの横っ腹をスコップで叩き返していた。

「ぐは！」

フィアはその場に膝をつく。

「今の内です！」

俺はフィアの横を通り抜け走る。俺は後ろを見ながら、豆粒のように小さくなっていくフィアとアンリを見つめていた。

「くっははは！ 間に合わないわ！ 昴もこいつも、どちらも墓の下で会うだろうよ！」

ここから教会まではそんなに遠くない。俺はまるで壁を作っているかのような草木の影を手でかき分けて、前へと進んでいく。

「くっそお！ 間に合えよ！」

そして、大きな木の根っこをよじ登ると教会前についた。

そこにはこれでもかと言うほどの群衆が集まっていた。まるで祭りの会場のような人ばかりで、一步も前に進めないような状況だ。ある人はベンチの上に立って賢明に昴を見物しようとしていたり、またある人は教会の屋根に登っていた。

「なんじゃこりゃ、集まりすぎだろ」

それほど今回の選挙に興味がある人間が多いのだろう。これなら演説の効果も抜群だ。

しかしこの中から暗殺者を捜すのは非常に難しい。一体何人いるんだろうか。少なく見積もっても1000人は下らないように見える。

昂の方は、まだそこらの資材をかき集めて作った臨時の壇上には、上がっていなかった。

「とにかく、昂が壇上に上がる前に見つけねえと」

と、俺が人の波をかき分けて、必死に怪しい人物を捜し回ろうしていた時、運悪く昂は壇上に上がってしまった。

「もうかよ！」

遠くからは点のようにほとんど見えないが、昂はマイクを握ったようにみえた。

「伏せる！ 伏せるんだ！ 会場には暗殺者がいるんだ」

だが俺の声は群衆の声にかき消されて、昂には届いていないようにみえた。人々のざわめきは俺の耳には戦闘機が轟音を出している飛行場のように感じる。俺が手を振っても、昂にはちっばけな点がうごめいているようにしか見えないだろう。

「くそつ、万事休すか！」

しかし、なんと昂は急に壇上の下に隠れた。

「聞こえたのか？」

いや、そんなことはありえない。昂がこちらに気づいた様子は無かったし、わかるはずがない。ではなんで隠れたのだろうか。

壇上の下で昂の腕がぶるぶる震えているのが見えた。

そうか……演説するのが怖くなったんだな。

彼らにヤジられたらどうしよう。また物を投げつけられたらどうしよう。取り囲まれたらどうしよう。壇上に立ち、大勢の群衆を見た途端、不安と恐怖が昂の心に飛来してしまったにちがいない。昂はこの3ヶ月で大統領ではなく普通の女の子になってしまったのだ。人々のざわめきが一層大きくなっていった。

ある意味好都合だが、しかし昂だっていつまでもあそこに縮こまっているわけにはいかないはずだ。演説を止めて帰ろうとしたら、壇上から降りるその背中を狙われる可能性がある。演説をそのまま続けたら演説中に撃たれるだけだ。結局、この間に暗殺者を見つけれしかないが、この群衆の中からたった1人を見つかるなんてでき

るのか。

「どうすればいいんだ。俺は……昴を助けられないのか？」

「諦めが早い早い。諦めが早いから愚民は大成しないんだよ」

俺の目の前に花が通る。白衣を着て、緑色のゴーグルをかけた小さな女の子が肩をすくめていた。

あのいけすかないロリ科学者プリシスである。

「プリシス、奇遇だな。でもお前と話してる時間は無いんだ」

「暗殺者探してんでしょ？」

「え、なんで知ってるんだ？」

「さつきぎやあぎやあわめいてたじゃない」

「あ、そうか。知ってるなら早い。俺と一緒に探し回ってくれ、1人じゃなくて、2人いれば、無理かもしれないが、少しは見つかるかもしれない」

プリシスははああと馬鹿にしたような目線を向けた。

「あゝあ、やっぱり馬鹿だねい」

「いやだからお前と口論してる場合じゃねえんだって、手伝わないならあっち行っていてくれよ」

プリシスはピッピッとゴーグルのテンプルのボタンを押して、俺にそのゴーグルを渡す。

「こんなエロメガネいらねえよ」

「鉄の周波数にあわしといたから、わかる？ その意味？」

「鉄分子を持つ物質の形状が見えるようになってるってことか？」

「ご名答、じゃ目標に向かってゴー」

プリシスはビシッと群衆に向かって指さした。

「は？ ということだよ？」

「かー！ あんた脳みそにスポンジ入ってるの？ 拳銃はほとんどが鉄でできてるのよ！ なんで空港に金属探知器あるかわかってんの？」

「え？ あ？ あ……そうか！ このエロメガネを鉄の周波数に合わせれば、人の波が消えて金属の類だけが見えるようになるってこ

とか！」

「そう、それで拳銃っぽい形が見えたらそれを持つてる奴が暗殺者ってことよ」

「あ、ありがとうプリシス！」

「でも気をつけてね。グロックタイプだった場合、かなりプラスチックを使用してるからもしかしたら見分けにくいかもしれない」

「うーそうなのか」

「なあに、理論的にうまくいくもの作れば大抵実験でもうまくいくもんだよ。悩んでないで早くいつちまえ！」

俺はゴーグルをつける。目の前にいたプリシスが消えて無くなった。群衆の方に目を向ける。すると、そこにはいろいろなものが見えた。携帯電話の中身が見える。これはサラリーマンか？ 少し低い位置でラジオをもっている。おそらく学生だろう。スパナやドライバーを持っている人間は……建築作業員か。だが色々みえるものの、中々拳銃らしきものがみえない。

俺は群衆をかきわけて、内部へと入っていった。

「なんだこいつ」

「んん？」

「なにやってんだ？」

ゴーグルをかけてキョロキョロ当たりを見渡す俺は相当不審なのだろう。まあそんなこと気にしてられないけどな。

とその時である。5mほど先に何やらおかしいな金属の筒が見えた。その金属の筒の中にはバネがあつて、筒の後ろ側には杭上のおそらく撃鉄と思しき形をしたものがついていた。見えているのは銃身部分か。銃の周りにはナイフがふよふよ浮いていた。こいつが暗殺者であることは確実だろう。

俺はそこにゆっくりと歩いていく。

ゴーグルをはずすと目の前に現れたのは、

ホワイトジュエリーレストランの店主だった。

あ、あれ？

その店主はエプロン姿でダダボの茶色いズボンを着ていた。ア
ンリに切られたはずの指が縫合されてついていた。

店主は俺に気づくとにこやかな笑顔で挨拶をした。

「やあ、奇遇だね」

「おっさん捕まったんじゃ」

「少しワイロを渡したら釈放してくれたよ。いやあ世の中お金だね
え」

もう一度、ゴーグルをかけた。やはりナイフも拳銃もズボンの中
にあるように見える。

俺は混乱した。

いやだつてこのおっさんは俺の就職のチラシを渡してくれたし、
昂に優しくしてくれただろ？ このおっさんがフィア側の軍人だっ
たなんてありえねえだろ。

「どうしたんだい？」

店主は笑顔のまま俺に近づいてきた。

いや、ちよつと待て、この店主に俺と昂は……【何かしてもらっ
たのか？】

優しい言葉をかけてもらったり、就職口が書いてあるチラシを渡
してもらっただけで結局この店主がしたことは俺たちには何の利益
にもならなかった。それにだ。そういえば、この店主のどこを去っ
た途端に昂が島民に取り囲まれたんだよな。もしかしてこの店主が

……

「おっさん、なんか隠してることあるんじゃないか？」

「何を言っているんだい、いきなり？」

「そのズボンの中にあるナイフや拳銃はなんだよ」

「え？ な、なんで知ってるんだい？ いやあ最近物騒だからねえ、
特警委に捕まって以来気をつけているんだよ」

「なあ、昂の親父とは本当に古い友人だったのか？」

「そつだよ。もちろんだ。彼とは学校の同級生だった」

「その学校を卒業してからあんたは軍人になった」

「……よく知ってるね」

「もしかしてあんた、昴の親父とは親しそうにっていて、実際は嫌いだったんじゃないのか？ でも大統領だから仲良くしていた。自分の利益になるから。大統領と友達になったら色々コネだって作れるだろうしな」

「はっはっはっ、突然何をありもしない妄想を並べ立ててるんだね？ これだから子供は」

「だから大統領じゃなくなった昴を捨てて、元軍人のおつてを使つてフィアにすり寄ったんだろ！ おかしいと思っただ。いくら就職難だからって、あのチラシの店どこ回っても募集すらしてませんつてな。てめえ俺に偽物のチラシ渡して、昴に嫌がらせしてやがったな！」

その店主から笑みを突然消えた。

「……これは隠し通せそうもないねえ」

店主はズボンからナイフを取り出すと、俺に向かって振り上げる。俺は横っ飛びにトンで、避ける。

しかしそのナイフは隣に立っていた男性の腹部を貫いた。

「ぎゃあ」

「くそっすばしっこい」

店主は悪態をつくつと、その場に転がった男性の腹部を蹴り飛ばした。

周りにいた人間は異変に気づいて店主の前から離れる。だが、何が起こっているかまで把握できている人間は少なかった。ほとんどの人間はその男性が何かの拍子に転んだように思えた。当然だ。いきなりこんな場所で刺殺事件が起きるなどと想像力がある人間がそう数いるわけがない。

「大人しくしろ！ この人混みの中じゃもう逃げられないぞ！」

「ふん。目的さえ達成できれば、そこらの人間を刺して回つて、それで道を作るさ」

「この糞外道が！」

「それに目的は達成できそうだ」

店主は拳銃を握ると空に向けた。

俺は驚いて振り向く。

昂がりユパータスの説得されながら、おそろおそろ立ち上がって
いたのだ。

あの馬鹿、何余計なことしてんだ！

「THE END」

店主は拳銃の引き金を引いた。

銃声とともに人々の悲鳴が鳴り響いた。

俺は一步も動けなかった。店主の拳銃からは煙が上がり、硝煙の
匂いが当たり一帯に充満した。

店主の腕は上空に向けられていた。彼は笑顔で勝利を得た微笑み
をした。

しかし、その腕は絡め取られ、彼の笑顔が張り付いた頭は地面に
たたき付けられていた。店主は気絶する前に思っただろう。これで
任務完了だと。

「直衛様、任務完了しました」

店主はアンリに腕をきめられて、その場に頭をたたき付けられて
気絶していた。

「アンリ！」

アンリはゴーグルを頭の上に上げた。

「すいません。遅くなりました。ファイアが案外強くて手こずったも
ので……結局逃げられてしまいましたし」

「お前、すげえよ、まじで！」

「いえ、これくらい。誰にでもできます」

アンリはぱっぱとメイド服についたホコリを飛ばすと、店主のポ
ケットからナイフやら拳銃やらを引っ抜いて、店主の着ていたエ
プロンで腕と足を縛り付けた。

そして鳴り響くようななどかい音声が聞こえた。

「直衛！ 帰ってきたんだね！」

昴がうれしそうに壇上で飛び跳ねていた。

「どうやら、俺を中心に人混みに穴ができたため、俺がいることがわかったらしい。」

「おうよ！」

俺は壇上の昴に親指を立てた。

「じゃ、演説初めてくれや！」

「うん！」

そして昴の演説は始まった。

もしも高校生の俺が南の島の大統領と結婚させられたら

ある冬の晴れた早朝

高校生の俺、工藤直衛は真つ黒な学ランを着て、雨上がりの通学路を歩いていた。

そして俺は現在、非常にゆゆしき問題が発生している。

それは暇なことである。

小中高と地元の公立に通い、家族4人暮らし、父は平凡なサラリーマン、母はパートをやつてる主婦、妹が1人中学に通っていると、俺は全くとって一般的な高校生。

当然のことながら

空から降ってきた美少女にキスをされて108羽のセキレイの中から嵩天を目指したり、

空から降ってきた美少女にごはんをせがまれて、能力を消す右手だけで戦に挑んだり

空から降ってきた美少女と天空に浮かんだ城へ行き、バルスしたりしない。

まあしないよね。いきなり何の努力もしないで空から降ってきた美少女と付き合うことになるなんて夢物語の話さ。現実は厳しい。

俺は現実の儚さを感じながら、降ってこねえかなあと上空を見上げながら、近道である人通りの少ない裏路地を進んでいった。

ゴミ箱が猫に食い荒らされていた。薄暗くて寒い。大きなビルの合間はこの通学ラッシュの時間でも人っ子1人いやしなかった。

（ここって本当不気味だよな。バラバラ殺人の死体でも置いてそんな場所だ）

と、しばらく歩いたところである。

空からどんどん近づいていくものが見えた。

「え？ 何々？ まさか……」

ハゲ面マツチヨのおっさんが空から降ってきた。

おっさんは屈伸するように立ち上がる。事態が全く飲み込めない俺。スーツ姿のおっさんはニカツと笑って、2mはあるかと思われる麻袋をがばつと俺にかぶせて俺はそのまま麻袋に入れられたままどこかへ連れて行かれた。

母さん。現実には

空から降ってきたハゲ面マツチヨに拉致されて東京湾に放り込まれるようです。

「うおおおおおおお、なんだこりゃあああああああ」

俺は麻袋の中でじたばた体を動かす。暗い。体がちくちくする。冷たい。昨日の雨が麻袋にしみこんでる。息苦しい。死んじゃう。窒息して死んじゃう。お母さんお父さん助けて

ドサツとソファーに乗せられ、バンとドアが閉まる音がして、ブロロロと排気ガスを出す音がした。車に乗せられたらしい。

野太い野獣の声が耳元で喉を鳴らすようにささやいた。

「シット……騒ぐとどうなるかわかってるか？」

ペチペチと麻袋の上からナイフが頬に当たるのがわかった。

俺は震えながら、今までの生活を走馬燈のように思い出す。

学校の健とアニメの話でもりあがったなあ。妹の奈々にテストの勉強教えて夜更かししちゃったなあ、お父さんは昨日も夜遅くて肩もんでやったなあ、あはは。

すいません。暇って言うてすいません。平穏な日々が一番です。

そのとき、俺は携帯をもっていることに気づく。ごそそと学ランの胸ポケットから携帯を取り出す。だが携帯の青い画面にはアンテナが立っていないかった。

くっそ！ 圏外かよ！ それともなんか電波遮断装置でもつけてるのかこの車！

数時間後、俺は体に浮遊感がして、今度はガタンガタンと平行に動くエスカレーターのようなものに乗っていた。

「家用ジェットの方ですね」

ここは空港か？

俺が声を上げようとしたそのとき。ゴンと目の前に星が現れて、目の前が真っ白になった。あのおっさんに頭を殴られて気絶させられたんだと思う。

そして目を覚ますと、俺は寒い寒い貨物機の中で体中を凍らせて鼻水を垂らしていた。

「どこに連れてく気なんだああああああああああああああああ」
俺の叫びは虚しく貨物機の中でこだましていた。

意識が戻った。

暑い……さっきまで全身こごえるように寒かったのに、今度はすごく暑くなった。どうなってんだ。

ゆっくりと眼をあけると赤いロングスカートに、臍脂色のブルゾンを羽織った女性がアゴに手を当てて椅子に座りながら俺を見下すような目線で見ていた。その女性は非常に高貴そうな仕草で、それとは裏腹の笑顔が似合いそうな活発な表情をしていた。
カラカラと開け放たれたステンドグラスの窓から涼やかな風が吹いている。

その風は少し潮の匂いがした。

高そうな絨毯が敷かれ、これまた高そうな壺や調度品が置かれていた。どこかのお屋敷なのだろうか。

「おはよう、直衛」

「あ、おはようございます。あの……ここどこでしょうか？　なんか怖いおじさんに連れてこられた記憶があるんですか？」

俺は椅子に座らされて、後ろ手に縄で縛られていた。

「あれ？　縛られてる」

「とりあえずこれを書きなさい」

「え？」

渡されたのは2通の書類だった。

「何これ、なんか色々書いてあるな……」

「あーうーんとですね。本籍と父母の氏名と住所はわたくしが書いて

てしまいましたから、とりあえず名前を書いて拇印を下さい」

2 通の書類の一番上に書いてある文字を読む。

婚姻届 婚姻証明書

夫になる人が空欄になっていて、妻になる人に名前が書いてある。ご丁寧に初婚にチェックがあつて、新本籍の部分はオラパ共和国リリユー州1番地とか聞いたことが無い国の名前が書いてあつた。

俺の頭にハテナの文字がでて、10秒くらい経って、なんだか笑いがこみあげてきた。

「え？ なにこれ？ なに？ なんで俺が婚姻届に名前書かされるわけ？」

隣に書いてある文字を見る。

ナカムラスバル

「いやこの女の人だだよ……」

彼女は自分を人差し指でさした。

「私です」

「へー、そうなんだ。君と結婚するんだ………だが断る」

「断れません」

横からあのひげ面のおっさんが首を出して、俺の目の前に現れた。

「げえ！ 誘拐犯！」

そのおっさんは縄をほどくと、ものすごい筋力で俺の手をボキボキいわせながら操作。工藤直衛と妙に達筆な文字で書いて、親指で拇印をむりやりおさせた。

「これで婚約成立ですね。直衛様！」

そういうと彼女は椅子に座ってその書類をにやにやしながら眺める。

「いやいや、日本の法律知ってる？ 本人の意思でなく無理矢理行われた契約は無効なんだよ？ だからこの婚約無効！」

「ふーん。そういえばうちにもそんな条文あつたような……じゃあ布告を出して、変えましょう」

「へ？」

『私と契約をしたものは絶対にどんな状況下でも有効な契約とします！』

「あ、ヒヤマ、新聞に載っけておいてくださいね」

「あい」

ヒヤマは頷くとその部屋から出て行った。

「は？ 1人で法律どうこうできるわけないだろ？ 何いつてんだ？」

「できますよ」

彼女は一差し指を立てて、ウインクした。

「だって私、この国の独裁者ですから」

「え？」

「だーからー私、ナカムラ・スバルはオラパ共和国大統領です。

そしてあなたは私の夫、ファーストジェントルメンに今なりました」

そういうと、彼女はブルゾンを脱いで、中に来ていたＴシャツを脱ぐ。そして、ブラジャー一枚と長スカートだけになって、俺の頭の後ろに手を持ってきて、にっこり笑った。

「じゃあ、熱い一夜を過ごしましょうか」

「ええ！ ちよつちよつと待つて。心の準備！ 心の準備！
ていうか意味わかんないから！ 頭の整理！」

「うーん。ベジタブル系ってやつですか？ 恋愛に消極的な男子だったんですか」

「いや違う違う。こんな状況でS。Xに積極的になる男なんていないから！ まず状況説明してくれよ。なんで俺、こんな国に連れて来られて、あなたと結婚することになってるわけ！ しかも大統領ってなんだよそれ、冗談もほどほどにしてくれよ」

「んー本当なんですけどねえ」

「いや、あなたが大統領だなんて信じられないし！」

「あ、そうだ」

彼女は机にあったノートパソコンのキーボードをパチパチと押して、こちらに持ってきた。

「これ、日本の外務省のホームページです。基礎データというタグをクリックしてください」

俺は怪訝そうな顔でクリックする。ホイールをくるくる回して、画面を下へ動かすと、元首ナカムラ・スバル大統領（2010年12月就任、任期3ヶ月）とでてきた。

「ハッキングしたとか？ もしかして同じサイト作ったとか……」
「そんなことできるわけじゃないですか。インターネットの設定だって、メイドのアンリにもらったくらいなのに」

グーグルでナカムラ・スバルと打って検索する。確かにどれもこれもオラパの大統領であることを示す資料ばかりでてきた。ついでに彼女の写真もでてきて、彼女がオラパの大統領であることは本当のようだ。

「で……なんでその南の島の大統領様が俺をさらって結婚させようとしてるわけ？」

「あなたを好きになったから」

「理由は？」

「愛に理由なんて必要なの？」

「いやいや……」

彼女は手を絨毯の上につけると、下から見上げるように心配そうに長いまつげのついた眼で、俺を見た。

「私のことが嫌いなのか？」

心臓の鼓動がなった。

「いや、そういうことじゃなくてね。結婚はね、相手の意見をね、聞いてからね、やるもんでね」

「やっぱり嫌なの」

「いやだからね。とりあえず、俺を日本に帰して、君が告白をしてから、まずデートでデイズニールランドに行って、映画でも見て、それから順を追って、お父さんとお母さんに紹介するって段階を踏んで、式場を予約して、ウェンディングドレスを賃貸で注文して、それから婚姻届けを役所に提出……ってなんで俺、結婚を前提にしたお

つきあいをする事になつてんだ！」

「やっぱり私のこと嫌いなんですね！」

「人の話聞けよ！ どう考えても嫌ってるようなこと言つてないだろ！」

大体俺、童貞だし、アプローチされて悪い気はないんだが……普通に帰り道に声をかけりゃいいのに、なんで誘拐なんてするんだこの人。かなり変だ。

「じゃあしょうがありません」

彼女は胸の間から黒光りする拳銃を取り出す。

そして太陽の光を背ににっこりと天使のような微笑みをして、銃口を俺に向けた。

「処刑」

「へ？」

「殺します」

「ええ！ どうして！」

「だって、あなた、ここで日本に帰したら絶対に他の女の子と付き合うでしょ？ いや、絶対付き合っちゃいます。こんな魅力的な男性放っておくわけないもの！ だから、他の女性とちぎりを結ぶ前に殺ります」

「んな、自己中にもほどがあんだろ！」

俺の額に銃口が突きつけられる。

この蒸し暑い中に、ひんやりと冷たい感触。それが拳銃が現実である文字通り肌で解つて、背筋がすうっと凍り付いた。

カラカラと風で窓が揺れ動く音が聞こえる。カモメの鳴く声が遠くから聞こえてきた。それら全てがこれが現実であることを俺に伝える。

そう。彼女はできるのだ。何故なら彼女は独裁者だから。人1人殺したって、問題無い。名だたる独裁者。スターリンだって、レーニンだって、ロベスピエールだって、ソ連人民の敵だとか、反革命罪とか、タバコに毒薬をしこんだとかあらぬ罪をでっちあげて何人

も罪のない人間を殺した。平凡な高校生の俺なんか彼女のような独裁者には簡単に殺せるのだ。

そして……彼女は何の躊躇もなく、拳銃の引き金を引いたのだ。

「GOOD BYE」

カチツカチツ

しかし銃弾は放たれず、彼女は首を斜めにして、不思議そうに銃口をのぞき込んだ。

「あれ？ ジャムってる。イギリス製はだめねえ」

こいつ、普通に殺そうとしてきた！ やばいまじでやばいぞこいつ、ど、どうにかしてここから逃げないと……

その瞬間である。

詰まっていた薬莢が排出され、引き金が元の位置に戻っていった。そこに握り込んでいた人差し指が、引き金を押し戻す。

弾倉から銃弾が上がり、撃鉄が弾の背中をたたき出して、その銃弾はくるくると螺旋状に回転しながらだんだんと昴の顔に近づいていった。

つまり、2発目の銃弾が彼女に向かって放たれたのだ。

直衛はその瞬間を眼で見て、

とつさに彼女を抱きかかえるように壁際へタックルした。

間一髪。

銃弾は昴の髪をきり、窓のステンドグラスに突き刺さった。

（いやちよつと待て、なんで俺助けてんだ！ 逃げるチャンスじゃねえか！ くそ……）

彼女は呆けた顔をして天井を見ていた。そして、眼から涙が流れて、ぎゅつと俺の学ランに手をしがみつけた。

「い、今死にそうだった」

「う、うん。そうだな……」

（死にそうだったのは俺もなんだが）

「こ、怖かった。怖かったよう」

彼女は俺の体を抱きしめて、わんわん泣いた。

（いや、でもそれお前の不注意じゃん）

と言いたかったが、なんとなくやめておいた。

まるで子供みたいに泣きじゃくる彼女を見て、かわいそうだった。思った。

そして抱きしめていた。奇妙だと思う。誘拐犯で、自分勝手に、俺を殺しかけたこの女性に同情するなんて……それでもなんだか、彼女のすべては本気で純粹でそして愛おしさを感じるほど子供っぽかった、だから、放っておけなかったんだと思う。

「キスして」

「え？」

彼女は目を閉じて、俺の唇とその震えた唇をあわした。

「抱きしめたらキスをしなきゃいけないって小説に書いてあった」

そう、この独裁者は、全てのものを無邪気に子供のように捉えていた。

（まあ、もう少しくらいやってもいいか）

俺はそんなことを思いながら彼女と唇を重ねていた。

もしも高校生の俺が南の島の大統領と結婚させられたら（後書き）

参考文献・ゲーム・サイト

世論の曲解 菅原琢

選挙の経済学 ブライアン・カプラン著 長峯純一／奥井克美 訳
トロピコ P O P T O P S O F T W A R E

[http://ja.wikipedia.org/wiki/
ウィキペディア](http://ja.wikipedia.org/wiki/ウィキペディア)

[http://blog.livedoor.jp/aoyama
211111/archives/51636750.html](http://blog.livedoor.jp/aoyama211111/archives/51636750.html)

世襲議員比率

[http://www.myfood.jp/wlmyfood/
us|foodnews/2009/01/post.html](http://www.myfood.jp/wlmyfood/us|foodnews/2009/01/post.html)

アメリカ食通信 大統領の食卓

[http://sankai.jp.msn.com/world
/korea/100718/kor1007181713002](http://sankai.jp.msn.com/world/korea/100718/kor1007181713002)

-n1.htm 産経ニュース

[http://www.nicovideo.jp/watch/
sm10777016](http://www.nicovideo.jp/watch/sm10777016) 東方楽園鉄 〱ゆうプロ楽園統治記

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7644q/>

カノジョは南の島の独裁者～がんばれ大統領選～

2011年2月9日00時41分発行